

宮沢賢治「文語詩稿 一百篇」評釈八

信時 哲郎

78 「厩肥をになひていくそたび」

①厩肥をになひていくそたび、
水の岸なる新墾畑に、

まなつをけふる沖積層^{アリビーム}、
往来もひるとなりにけり。

②エナメルの雲 鳥の声、
熱く苦しきその業に、

唐黍焼きはみてやすらへば、
遠き情事のおもひあり。

大意

厩肥を背負って何十度も、真夏のもやのために沖積層がけむつてみえる中を、川岸の開墾地の畑に、むかう道も昼間となったようだ。

エナメルのようにつやつやした雲 鳥の声、焼とうもろこしを食べて一休みすると、熱く苦しき仕事のなかに、ふと昔日の情事のことなども思い出された。

モチーフ

厩肥を畑に運ぶという「熱く苦しきその業」から「遠き情事」が思い出された、という詩。賢治は森荘已池に、人間は労働・思索・性欲の三つの方面にエネルギーを使うもののだとし、農民は労働と性欲にエネルギーを費消してしまうために、思索がおろそかになってしまふのだと語った。だとすれば、賢治はここで労働

働と思索にエネルギーを集中させるべく、性欲を抑圧しようとする人物を描こうとしたのかもしれない。しかし、羅須地人協会時代の自分を乗り越えようとし、「草や木や自然を書くようにエロのことを書きたい」とし、「岩手艶笑譚」を書くつもりがあつたとも語ったことを思うと、過去の自分を第三者的に描こうとしたか、あるいは労働の合間にもエロチックな思いが浮かんでしまうリアリティを書こうとしていたのではないかと思われる。

語注

厩肥 家畜小屋の敷きわらと糞尿を混ぜて発酵させた肥料。「きゅうひ」や「うまやごえ」とも呼ぶが、「一百篇」の「精悍馬」「二」には「こえ」というルビがある。音数の関係もあり、本作でもこれを「こえ」と読むことにしたい。

いくそたび 漢字で書けば「幾十度」。何十回も、の意味。
沖積層 地質時代の区分の一つで、最も新しい時代を沖積世と呼ぶが、その時代に堆積した地層のこと。賢治は羅須地人協会の資料「土壤要務一覽」で、「沖積土壤ハ、一般ニ砂質デ、吸収力保水力ハ往々過小デアルケレドモ、他ノ理化学性ハ良好デアリ、酸性モ烈シクハナイ」とする一方、洪積台地を、「洪積土壤ハ可成石灰ト燐酸ニ乏シイ。吸収力保水力、過大ノ所少ナクナイ」と書く。賢治が耕していた畑は、北上川の岸にあつた沖積層にある。
新墾畑 「にいばり」は、万葉時代にも使われた古語で、新しく田畑や道を作ること。賢治は川沿いの地を開墾したので、そう

呼んだのだろう。

往來 「おうらい」と読むのが普通だが、入沢康夫（『文語詩難読 語句（5）』）は、「ゆきき」と読んでおり、それに従いたい。人が行き来することだが、ここでは道の意味で使われているのだろう。

エナメルの雲 先行作品の下書稿に「エナメルの雲／午后は雨だらう」ともあるが、木村東吉（『資料と考察』春と修羅 第三集『詩ノート』創作日付の日の気象状況）『近代文学の形成と展開 継承と展開8』和泉書院 平成十年二月）によれば、盛岡気象台では朝の五時から九時まで雨、水沢天文台でも午前二時から十時まで雨が記録されている。その後は曇。夜になってまた雨が降ったようだ。層雲（霧雲）や乱層雲（雨雲）が出ていたようだが、先行作品には、この雲を見て「午後は雨だらう」と書いていることから、雨雲の代表的存在である乱層雲であらう。

唐黍 トウモロコシのこと。下書稿(一)には「コン」というルビもあるが、下書稿(四)には「きみ」とある。「二百篇」の「塔中秘事」の定稿には、「玉蜀黍」に「きみ」というルビを振った例もあることから、ここでも「きみ」としておきたい。

熱く苦しきその業 八月の農作業だけに熱い中を、猛烈な匂いの伴う厩肥の運搬は苦しい作業だったということだろう。「こう」とすると、仏教的な意味になってしまうので、ここは「わざ」と読みたい。

評釈

先行作品である「春と修羅 第三集」所収の口語詩「七三四」〔青いけむりで玉唐黍を焼き〕一九二六、八、二七、」の下書稿(二)が書かれた黄野（24 24行）詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、同一の用紙に重ね書きされた下書稿(二)、その左方余白に書かれた下書稿(三)、黄野（24 24行）詩稿用紙に書かれた下書稿(四)（鉛筆で⑤）、

定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存。生前発表なし。

口語詩の下書稿(二)（ただし同一紙面に文語詩の下書稿(一)、(二)、(三)が書かれている）には、「不足 自らに甘へせしむる点がありて不快なり」、「二人称に直す」、「一人称にて甘きもの 三人称となすとき 往々奇異なる真美を生ずることあり」、「食事を除く」といったメモが書かれている。どの稿についての言及なのかは、書かれた位置や筆記用具、内容から総合的に判断するしかないが、おおむねこの方向に推敲されていたように思う。本作についてのコメントとしてだけでなく、賢治が文語詩をどう捉えていたかについてを示す資料としても極めて重要なものだと思う。

取材日は、賢治が羅須地人協会を設立して間もない時期で、農村における独居自炊生活を始めて半年ほどの時間が経過し、その厳しさを知ると共に、未来に対する明るい展望も持っていた頃だと思われる。

「七三四 仕事」と名付けられた先行作品の下書稿(一)の最終形態から見ていきたい。

青いけむりで唐黍を焼き

塩漬けのトマトも皿に盛って

若杉のほずゑの chrysocolla も見れば

たのしくしづかな朝餐な筈を

こんなになわたくしの落ち着かないのは

昨日馬車から坂のところへ投げ出した

厩肥のことが胸いっぱいにあるためだ

甲田加吉がすっかり内地でしくじって

からだひとつでブラジルへ行く日

なげなしの財布で

国の芝居をもう一度見た

エナメルの雲

午后は雨だらう

「春と修羅 第三集」の中の一編だが、さらに先行する形態が「詩ノート」に残されていないためか、甲田加吉という偽名めいた名前を登場させるなど、この段階でもう虚構化が始まっていたように思える（「ブラジル移民」や「国の芝居」については不明）。下書稿(二)になると、唐突に「情事」の語が書かれ、これが文語詩にまで影響することになる。初期形態をあげよう。

青いけむりで唐黍を焼き
塩漬けのトマトも皿に盛って

若杉のほずゑの chrysocolla も見れば

たのしく豊かな朝餐な筈であるのに

こんなにもわたくしの落ち着かないのは

昨日馬車から崖のふもとに投げ出して

今日北上の岸まで運ぶ

厩肥のことが胸いっぱいにあるためだ

エナメルの雲鳥の声

熱く苦しいその仕事か

一つの情事のやうでもある

……川もおそらく今日は暗い……

先行研究はいずれもこの「情事」に言及したもののだが、賢治と直接の交流もあり、岩手で農業をした経験もある詩人・童話作家の儀府成一（後掲）は次のように書いている。少々長いが、同時代を生きた人として、また農業にも詳しい人の見解として貴重なものだと思う。

率直にいつて、われわれに情事を想起させるのは、何であるうか。音であろうか、色であろうか、それとも嗅覚の（こと）きものであるうか。いろいろのケースが考えられ、可能性も認める

が、一般的にいつて今あげた三つに限つていえば、何といつても嗅覚が一番セクシアルな働きかけをするのではないか。そうすると、俗にいつ肌ざわり、肌のおい、体臭、といったものを通りこして、分泌された精液のおいが浮かびあがる。これと、よく馬に食ませ、よく踏ませて、しかも半年も積みかさねられて十分蒸された厩肥のおいの相似性は、すでに触れた通りふしぎに通い合うものをもっている。とても「焼き唐黍」の比ではない。

賢治は、これも知つていたのではなからうか。「熱く苦しい」身を焼くような情事と、厩舎に積まれている厩肥の足が焼けそうな高温と、（昔の農家ではこの高温を利用して、厩舎のなかで納豆をねせ、いやになるくらい食膳に上せたものであった）鼻を刺すような厩肥の強い臭気のなかに、ごくかすかにまざつていて、ツーンとくるセクシアルな匂い——精液のおいを対置させるなど、その巧緻な点、詩の技術的な面をつきぬけて、肉体の秘密にまで迫つている感がする。しかも作者は、そのなまなましいリアリズムそのままは避けて、エナメルの雲だの、焼いたとうもろこしだのに託し、ほんとうは詩全体が遠き情事の「におい」（精液のおい）そのものなのに、においではなく「おもひあり」と、サラリとかわしているようにみえる。

かわしている、としか見えないくらい工だということとは、別の見方をすれば、実際は、なにもかも——厩肥に含まれているほのかな精液のかおりから、情事に至るまで——知つていたのだ。知つていたからこそこんなきわどい詩が書けたのだし、巧みにかわすことも逃げ出すこともできたのだ、とも云えるのであるう。この詩には、このような見方も成り立つほど問題を孕んでいて、隠された賢治の性をさぐるのには、小さな手がかりの一つかもしれないと考へていたのだが。ただ、これ以上追究する時間はいまの私にないのは心残りだが、目を転じて、内村康江（小笠原露の仮名・信時注）とのあの稚拙な、あと味のよ

くない別れ方からみても、現実の宮沢賢治は、熱く、苦しい、情事どころか、異性を抱いたことすら一度もなかった人のように思われてきて仕方がない。

厩肥のにおいが精液のにおいに通じるといふことの可否については、なんともコメントできないのだが、賢治が情事どころか異性を抱いたことすらなかったであろうとしているのは、妥当なところではないかと思う。

こうした解釈がある一方で、沢口たまみ（後掲）は、「賢治は確かに、自分も情事を経験したことがあったのだと、文語詩には記しているのです」と書いている。しかし、文語詩には虚構が多く取り入れられていることについて考慮すべきだろうし、賢治が一般女性を恋愛の対象とした経験があったことは確かだとしても、当時の社会通念や賢治の性格、宮沢家の家格から考えて、一般女性と「情事を経験した」とは考えにくい。ただ、沢口にそう思わせるほどに賢治の言葉が真に迫っていることも事実で、賢治に「情事」の経験などなかったらどうかとする儀府にも、「知っていたからこそこんなきわどい詩が書けたのだ」と怪しませましたのだろう。

関登久也（「禁欲」『賢治随聞』 角川書店 昭和四十五年二月）は、ある朝、旅装の賢治に会い、「どちらへおいでになったのですか、ときくと岩手郡の外山牧場へ行って来ました。昨日の夕方出かけて行って、一晩中牧場を歩き、いま帰ったところです。性欲の苦しみはなみたいていではありませんね。そういつて別れました」という証言をしていることから、賢治も常人と同じように性欲はあったのだと思われる。

それを抑圧したのは「小岩井農場」（『春と修羅（第一集）』）に書いたような宗教的な性欲観、すなわち「もしも正しいねがひに燃えて／じぶんとひとと万象といつしよに／至上福しにいたらうとする／それをある宗教情操とするならば／そのねがひから砕け

または疲れ／じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと／完全として永久にどこまでもいつしよに行かうとする／この変態を恋愛といふ／そしてどこまでもその方向では／決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を／むりにもごまかし求め得やうとする／この傾向を性欲といふ」といった信念であったのだろう。

こうした恋愛観や性欲観が何によるものかについては諸説あり、例えば、結核にかかりやすい体質が遺伝するのを防ぐという優生学的な配慮から賢治は性欲（結婚）を抑えたのではないかとも思うのだが（信時哲郎「宮沢賢治とハヴロック・エリス 性教育・性的周期律・性的抑制・優生学」『環境文化研究所紀要6』 神戸山手大学 平成十四年三月）、ここでは賢治が森荘巳池（昭和六年七月七日の日記）『宮沢賢治の肖像』 津軽書房 昭和四十九年十月）に向って語った言葉をあげておきたい。

労働と性欲と思索、思索と労働、こんなように二つづつならびうまい具合に調和すれば、まあ辛うじて成立しますね。肉体労働と精神労働それに性欲と、この三つを一度に生活のなかに成り立たせるといふことは、まずまずできません。日本の農民は、肉体労働と性欲だけの生活を古い時代から押し付けられて、精神労働を犠牲に、ただ二つだけでやってきたのですね。

このように考えていたとしたら、賢治は「情事」（＝性欲）を抑圧させたために、「熱く苦しいその仕事」（＝労働）に熱中できるのだ、という意味で、この詩句を書いていたことになりそうだ。

しかし、同じ時に、賢治は森に向かって、「禁欲は、けっきよく何もなりませんでしたよ、その大きな反動がきて病気になるたのです」。「何か大きなことがあるという、功利的な考えからやっただけですが、まるつきりムダでした」とこれまでの態度を反省し、「草や木や自然を書くようにエロのことを書きたい」と語ったという。

事実、その言葉のとおり、エロをとり入れたと言えるような文語詩もあり、例えば「一百篇」の「塔中秘事」では、「ひそかなる女のわらひ」が農場の脱穀塔の中から聞えてきたというような詩を書いている。そう思えば、本作もエロを扱った作品の一つに数えた方がよいように思う。

賢治は農村における猥談の効用について意識的であり、農学校時代の教え子・根子吉盛（佐藤成「鳥のやうに教室でうたつてくらした毎日」『証言 宮沢賢治先生』 農文協 平成四年六月）は、次のような証言を記している。

猥談は大人の童話みたいなもので頭を休めるものだと言われ、誰かを憎むというわけでも、人を傷つけるといふものでもなく、悪いものではない。性は自然の花だといわれたことを覚えております。

また、森荘巳池（「牡丹雪が降る夕暮れ」『二〇一人の証言 啄木・賢治・光太郎』 読売新聞盛岡支局 昭和五十一年六月）は、賢治が「花巻の若い連中が集まってワイ談に花を咲かせていても、最後には必ず彼が話題を独占したものだ」とし、「野にあったワイ談の名手」とも書いている。さらに森に向かつて、「岩手艶笑譚」のようなものを書きたいと言っていたともいう。

そう考えてくると、賢治は意味のない禁欲を続けるかつての自分の姿を、客観的に描こうとしたという解釈が生れよう。下書稿に、賢治は「一人称にて甘きもの 三人称となすとき 往々奇異なる真美を生ずることあり」と書いていたが、もしかしたらこのことを言いたかったのかもしれない。

また、労働の最中にも、ついつい頭の中をエロチックな思いが浮かんでしまう、というリアリティを書きたかった可能性も考えられてよい。大著『性の科学』を読み込んでいた賢治のことであるから、労働と性、あるいは厩肥の性的な効果といったことに、

化学的な興味を持って書いたつもりもあつたのかもしれない。

先行研究

儀府成一「凄絶な禁欲」『宮沢賢治・その愛と性』 芸術生活社 昭和四十七年十二月

森山一「賢治の恋」『宮沢賢治の詩と宗教』 真世界社 昭和五十二年六月

伊藤博美「『饗宴』の舞台」『賢治研究42』 宮沢賢治研究会 昭和六十二年一月

沢口たまみ「シグナルの恋」『宮沢賢治 愛のうた』 盛岡出版コミュニティー 平成二十二年四月

79 井原氏曰

①花さけるねむの林を、 さうさうと身もかはたれつ、
声ほそく唱歌うたひて、 屠殺士の加吉さまよふ。

②いづくよりか鳥の尾ばね、 ひるがへりさと落ちくれば、
黄なる雲いまはたえずと、 オクターヴオしりぞきうたふ。

大意

花の咲くネムノキの林を、 早々と夕暮れ時の色に身を染めながら、
小さな声で唱歌を歌いながら、 屠殺士の加吉がさまよひ歩く。

どこからかカラスの尾羽が、 ひるがえりながら落ちてくると、
黄色に染まった雲はまばゆく、 一オクターブ低い声に下げて歌い続ける。

モチーフ

夕方になって一斉に花を咲かせたネムの林で、どこからともなく鳥の尾羽が落ちてきたことを、屠殺士の加吉の経験として書いた作品。不吉な雰囲気が漂うが、先行作品の取材時期は盛岡中学卒業後、進学を許されずに悶々としていた大正三年夏。親と同じ仕事に就くことが義務付けられていた賢治は、生れながらにして人々から差別される仕事をすることを義務付けられていた屠殺士に、自らの気持ちを重ねたのではないかと思われる。

語注

ねむ マメ科の落葉高木で高さは十メートルほどにもなる。夜になると就眠して葉が閉じて下に垂れる。夏の夕方には枝先に刷毛のような赤い花を咲かせる。

かはたれつ 「かはたれ」は「彼は誰れ」のことで、誰の顔かわからなくなる夕暮れ時のことを言う。下書稿(一)には「さうさうと身もたそがれて」ともあった。

屠殺士 食肉や皮革を得るために牛馬などを殺す人のこと。ただ、宮沢俊司(後掲)も言うように、「屠殺士」という言葉は『日本国語大辞典』などにも載っていない。

しりぞきうたふ 下書稿(二)の手入れで「オクタヴをとみに下し」と書いた段階があることから、唱歌をうたっているうちに高音が出なくなつて一オクターブ低く歌つたということだろう。

評釈

黄野 (220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(タイトルは「銅壺屋」)、その余白に書かれた下書稿(二)(タイトルは「工匠」。鉛筆で①)、黄野 (220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(三)(タイトルは「黄昏」。青インクで②)、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。先行作品は「歌稿〔A〕〔B〕」の197、「歌稿〔B〕」の198。まずは元となつた短歌を「歌稿〔B〕」より引用する。

197 花さける／ねむの林のかはたれを／からすの尾ばね鼻ぎつゝあるけり

197 198 いづくよりか／鳥の尾ばね／落ちきたりぬ／ねむの林の／たそがれを行けば

「大正三年四月」(大正三年度の短歌が収められている)に収められた歌だが、ねむの花が咲くことから季節は夏だということがわかる。大正三年といえば、賢治は盛岡中学校を卒業してすぐ岩手病院に入院。その際に看護婦に恋心を抱くが、親からは結婚を許されず、また、進学も許されなかったために悶々とした日々を過ごしていた年だ。ノイローゼ状態になって、ようやく九月には進学を許されるが、その頃に島地大等『漢和対照妙法蓮華経』に出会つたとされ、浄土真宗を信奉する父とは、新たな火種を抱えることとなつた。本作は、まだ進学も許可されていなかった夏のできごとのようなだ。

下書稿(一)から見ていきたい。

鋳物屋の 寺井小助は
たそがれを 半天かづき
花さける ねむの林に
たゞひとり さすらひにけり

いづくよりか 鳥の羽ばね
ひるがえり 落ちて来しかば
小助そを 手にうけもちて
鼻ぎながら 黄の雲を見ぬ。

賢治自身の経験を詠んだ短歌から、虚構化されて鋳物屋の寺井

小助が視点人物となっている。ただ、その設定が長く続くことはなく、唐鍛冶、銅壺屋、屠殺士とかわっていく。名前も寺井吉助、四代吉助など変わってゆく。下書稿(二)ではこのように改変されている。

花さけるねむの林を

さうさうと身もたそがれて

たゞひとりさまよひくるは

銅壺屋のあるじなるらん

いづくよりか鳥の羽ばね

ひるがへりさと落ち来り

銅壺屋は「左勝手」と

つぶやきて黄の雲を視る

職業と名前だけでなく、賢治は彼らの取った行動も、舌打ちさせたり(下書稿(一)の手入れ)、「左勝手」とつぶやかせたり、唱歌を歌わせたり、と変化させている。ただ、「夕方になって一斉に花を咲かせたネムの林を歩いていくと、真っ黒な鳥の羽が落ちてきて、黄色い雲を見あげた」ということについては、短歌の段階から下書稿、定稿に至るまで全く変化していない。

では、黄昏時に鳥の羽が落ちてくるというだけのこと、賢治はいったい何を託そうとしたのだろう。

賢治が短歌や童話、詩にたくさんの鳥を登場させていることは、今さら言うまでもないだろう。「歌稿〔A〕」には「54 凍りたるはがねの空の傷口にとられじとなくよるのからすか」とあり、童話ならば「鳥の北斗七星」や「双子の星」に勇ましい姿で登場している。詩ならば「未定稿」に「鳥百態」があり、ユーモラス且つ愛情をこめて描かれている。「冬のスケッチ」の第十七葉には、「たましひに沼気つもり／くろのからす正視にたえず／やすから

ん天の黒すぎ／ほことなりてわれを責む」があり、また、「恋と病熱」(『春と修羅(第一集)』)でも、「けふはぼくのたましひは疾み／鳥さへ正視ができない」と書いていた。「陽ざしとかれくさ」

(『春と修羅(第一集)』)では、「からす器械」とも書かれていた。

これだけ様々に鳥が描かれているのに、イメージを一つにまとめてしまおうというのは無謀かもしれないが、例えば「鳥鳴き」という言葉があり、これは鳥が嫌な声で鳴くと死人が出るという広くさやかれている俗信だが、こんな言葉の存在からも、鳥があまり縁起のよい、かわいらしい鳥だと思われていなかったことは確認できると思う。黒猫が前を横切ると不幸になるなどともよく言われるが、真っ黒な鳥の尾羽根が落ちてきたのを、若き日の賢治は何か不吉なことが起こる前兆のような気がしたということではないかと思う。

さて、ネムの林の脇で鳥の羽を見つける以外にも、下書稿から定稿まで変わっていないものがある。

宮沢俊司(後掲)は、登場人物が変化することを指摘しながら、「仕事の内容の共通点は、金属を扱う、ということである。いずれも、火を扱い重労働で危険を伴う」と書いている。しかし、これだけでは下書稿(二)の手入れ段階から登場し、そのまま定稿にまで登場することとなった屠殺士が例外となってしまう。では、この屠殺士までも含めた共通性は何かといえ、農民ではないということだろう。さらに突っ込んで言えば、人々から区別され、時に差別されてきた存在だということだろう。

鋳物師や鍛冶屋は、町中に定住する者もいたが、農村を回って鍋釜や鍬などの農具の製造や修理する者もいた。農村にとつて彼らはなくてはならない存在であったが、「江戸時代において、日常生活に必要な道具を製作する木地(きじ)師・鋳物師・竹細工師・鍛冶屋・藍染め屋など、その職種は多様であるが、その多くが定住民ではなく、生活形態も異なるとして、一般からは区別され、政治を行う者も徴税がし難い彼らを、身分的に定住民の下に

位置付けることで、階級社会の維持に利用した」（山路興造「もう一つの差別の目」 「きょうと府民だより 人権ロコミ講座90」 http://www.pref.kyoto.jp/i/dayori/201502/kiuji_12.html）ともいう。下書稿(二)で、銅壺屋に「左勝手」とつぶやかせたのも、左利きが、やはり区別・差別された存在であったということに関係しているのだろう。

屠殺については、諸国を回ったわけではないが、食肉や皮革を得るために牛や馬などを殺す仕事で、人々から差別される存在であり続けた。「五十篇」には「あな雪か 屠者のひとりは」があり、「屠者」として生きることの倦怠感や徒労感（信時哲郎「あな雪か 屠者のひとりは」）『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』朝文社 平成二十二年十二月）を描いているのだと書いたが、賢治は改めて文語詩に登場させたわけではない。

しかし、重要なのは、賢治がただ差別されていた人々を文語詩に登場させたということではなく、自分自身の位置に彼等を立たせたということであろう。裕福な質・古着商であった宮沢家の長男が差別されていたという言い方はふさわしくないかもしれないが、自分の希望や資質が全く考慮されず、ただ親の仕事だからと、家業をそのまま受け継ぐことを求められ、そのことで悩まされたという意味では通じることもある。

大正三年の夏の或る日、賢治の目の前に、どこからともなく烏の黒い羽根が落ち、不吉な未来を感じさせた。自分の生き方を自分で決めることができなことは当時の賢治を悩ませたが、晩年になって、その思いをただ自分自身の記憶としてでなく、家業について思い悩む人々の思いに書き直したのが本作であったと考えたい。

先行研究

水上勲「宮沢賢治文語詩に関する二、三の問題」（『帝塚山大学人文科学部紀要1』 帝塚山大学人文科学部 平成十一年十一月）

宮沢俊司「黄昏」（『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』 柏プラーノ 平成十四年七月）

秦野一宏「苦の世界『フランドン農学校の豚』」（『宮沢賢治とは何か 子ども・無意識・再生』 朝文社 平成二十六年十月）

80 式扱場

氷の雫のいばらを、 液量計の雪に盛り、
鐘を鳴らせばたちまちに、 部長訓辞をなせるなり。

大意

氷から滴るしずくのついた野茨を、メスシリンダーに入った雪に盛り付け、
鐘が鳴るとたちまちに、 内務部長は訓辞を始めた。

モチーフ

花巻農学校を退職する直前に、賢治は岩手国民高等学校の講師を勤めた。県の社会教育主事だった高野一司と何度もカリキュラムについての討議を重ねた上でのスタートだった。しかし、国家主義・農本主義の立場に近い高野と賢治では、おのずと方向性も異なり、ぶつかり合うこともあったようだ。本作の舞台は、そんな国民高等学校の修了式（あるいは入学式）。県の内務部長が訓辞をする脇には、野茨と雪の入ったメスシリンダー。国民高等学校で農民芸術を講じた賢治にとって、この装飾は国民高等学校の国家主義的色彩に対する農村の側からの批判意識の表れであったのかもしれない。

語注

のいばら バラ科の落葉低木で北海道から九州まで自生する。枝

には鋭い棘があり、直立または他物に寄りかかり、よじ登る習性がある。春に芳香性の白い花を咲かせ、秋には〇・五〜一センチほどの赤い実をつける。賢治の教え子・平来作によれば、国民学校の卒業式の時、何か花はないかと急に賢治に言われ、困ったあげく、ネナシカズラを持って行くと、賢治は大喜びしたという。が、文語詩になると、のいばらと液量計に置き換えられている。「赤きみふゆののいばら」(下書稿(-))ともあつたが、赤田秀子(後掲)もいうように、これは「紅い実」のことだという。

液量計 液体の容量を量るガラス製円筒状体積計。メスシリンドラーのこと。

部長 岩手県の内務部長で岩手国民学校の校長でもあつた坂本暢のこと。「岩手日報」や「和賀新聞」には、開校式で坂本が訓辞を述べたという記事が載つた。修了式については、菊池忠二(「岩手国民高等学校と「農民芸術」論」『私の賢治散歩 上』菊池忠二平成十八年三月)によれば、坂本が勅語の奉読と修了生への証書授与を行ったというが、訓辞についての記述はない。ただ、後述する平来作の証言からすると、修了式を舞台にしているようなので、両方の経験を併せて書いているのである。

評釈

黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(鉛筆で⑤)、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。島田隆輔(後掲)は、「五十篇」の「氷柱かゞやく窓のべに」と関連するのではないかとするが、「氷柱かゞやく窓のべに」の「評釈」(信時哲郎『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』で既に述べたように、その次に収められている「来賓」と連作を構成するものなので、本作は無関係だと思う。

先行作品や関連作品の指摘は『新校本全集』にないが、赤田秀

子(後掲)や島田らによつて、「文語詩篇」ノート」の「1926一月 国民高等学校」に「偽善的ナル主事、知事ノ前デハハダシトナル」、「ノバラ、アケビ、ツルウメモドキノ藪、雪シリンドラ／内務部長」、「偽善館長、われは貴族には非ず。」と書かれているうちの二つめに関わっていることが指摘されており、そのとおりであろうと思う。

岩手国民学校は大正十五年一月十五日から三月二十七日まで、花巻農学校の校舎を借りて実施されたもので、「デンマーク式に則つた本県最初の試で就中一般民衆の文化を高むると共に一面に於て成人教育の目的を達成に努め他面に於ては地方堅実なる自治の基礎を作る為の施設である」(「和賀新聞」大正十四年十二月二十七日)。受講生であつた伊藤清一(「岩手国民高等学校と宮沢賢治」『校本宮沢賢治全集第十二巻(上) 月報』筑摩書房 昭和五十年十二月)によれば、「生徒の資格等は、特に限定されませんでしたが高等小学校以上の能力を有し、年齢満十八歳以上で、将来地方自治に努力すべき抱負ある者」で、岩手県内各地から学生が集まつてきたのだという。また、賢治の同僚でこの国民高等学校で講師も務めた阿部繁(「地人宮沢賢治」『宮沢賢治全集第六巻 月報9』筑摩書房 昭和三十一年十二月)によれば、「一体国民高等学校は疲弊した県下の農村を如何にして更生するかを論議した結果丁抹の国民高等学校を例にして開設したので当時の坂本内務部長自ら陣頭に乗り出し校長となり高野社教主事は各部から選抜されて入学した生徒と起居をともにして専らこれが指導訓練にあたるなど非常な力の入れ方であつた」という。

賢治はカリキュラム作成の段階から、授業の担当、生徒の世話などで八面六臂の活躍をし、そのためもあつてか、この時期の賢治の創作は激減している。賢治は「農民芸術」を十一回に渡つて担当したが、花巻農学校は同年の三月末に退職し、四月からは下根子楼で独居自炊生活を始める。羅須地人協会を夏から始めるが、その際にも農民芸術論を講じていることから、賢治にとつて国民

高等学校での経験は十分に生かされていたことになる。

「偽善的ナル主事」とされたのは岩手県の社会教育主事だった高野一司。明治二十一年、新潟県中頸城郡に生まれ、東京帝国大学農科大学を卒業し、山形や北海道の北見で開墾を指導し、大正十三年に岩手県社会事業主事兼社会教育主事となっている。阿部繁（前掲）は「宮沢さんと高野主事との間にも数次に亙つて論議検討が繰返された」とするが、菊池忠二（「岩手国民高等学校と「農民芸術」論」「私の賢治散歩 上」 菊池忠二 平成十八年三月）は、この二人が討議することにより、県側が作成したと思われる「開設要項」（「岩手日報」 大正十四年十二月十六日）になかった四科目（農民芸術、生理衛生、農民美術、音楽概論）が新設され、中でも「宮沢賢治の担当した「農民芸術」は、彼自身がその必要性を認め、自ら講義の希望をもち、そこに意欲をもって担当しようとした科目であったように思われてならない」という。

高野は県側の人間であったということもあるが、伊藤清一（前掲）が書くように、「東京帝大教授で法博の笈克彦や、友部日本国民高等学校長加藤完治の、薫陶を受けられた直系といわれる」存在であったから、国家主義的・農本主義的な傾向が多分にあった。伊藤によれば、毎朝、町内を駆け足で回ってから、国民体操（平沼騏一郎を団長とする修養団で行われていた体操）、皇国運動（皇国精神発揚のために笈克彦の「神あそび、やまとぼたらき」を元に高野が指導）を行い、君が代二唱、勅語奉誦、天皇陛下の弥栄を三唱し、心の力（小林一郎記述の「心の力」の朗読を行ったという）（菊池 前掲論文）。

高野と賢治の関係について、伊藤清一（前掲）は、「特に親しかったようであります」と書いているが、賢治の教え子で、国民高等学校の受講生でもあった平来作（関登久也「雪合戦」『新装版 宮沢賢治物語』 学習研究社 平成七年十二月）は、高野と賢治の雪合戦の様子を次のように書いている。

宮沢先生の雪投げとは珍しいと思っておりますと、始めのうちは緩慢に投げ合っておられました。お互いが夢中になっている様子。タマを作るひまもなくなって、雪をかけ合うというようになり様になりました。私は奇異の念に打たれて、暫く遠くから眺めていました。

「どうも少し変だぞ」

そんな風に思つて、眺めていました。その合戦が、いよいよ激しくなつて、ついには組打ちとなつて、二人は雪の上にくるげまわつております。

あるいは、喧嘩しているのではないかと、思われる位です。しかし、それから間もなく、二人は頭からぼやぼや湯気を上げ、洋服の雪を払いながら相見笑っているのを見て、安心しました。長い間の先生の生活に、ああしたことは実に初めてであります。

島田（後掲）が、賢治は高野らが進めようとしている「精神教育を内心共有できぬところがあつたのではないか」と言うが、それも納得のできるところで、賢治は「神道は拜天の余俗である歴史の誤謬」（「農民芸術の興隆」）と書き、また、「七四三」（「盗まれた白菜の根へ」 一九二六、一〇、一三、）（「春と修羅 第二集」）では、「盗まれた白菜の根へ／一つに一つ萱穂を挿して／それが日本主義なのか」「さうしてそれが日本思想／弥栄主義の勝利なのか」と国民高等学校でも重視された「弥栄主義」に懐疑的なそぶりも見せていた。

しかし賢治は、大東亜共栄圏建設のための標語「八紘一宇」の提案者であり、『日本国体の研究』 真世界社 大正十一年四月昭和五十六年八月復刻）の著者である田中智学の国柱会に入会し、「田中大先生の国家」（大正十年一月三十日 関徳弥宛書簡）を信じていた人間である。また、伊藤清一が書いた「（岩手国民高等学

校終業生答辞」における「柳モ農村ノ改善ハ今日ノ急務ナリ」を、賢治は「今日世界農業ノ黎明ニ当リ神国日本農村ノ確立ト改善トハ実ニ之全人類ノ急務ナリ」と添削してあるので、単純に判断するのも慎まれる。

また、賢治は高野について、「酸きも甘きも分り切つたる高野技師」（昭和八年五月一日 鈴木東蔵宛書簡）と、すっかり信頼しきつているような文章を書き送つてもいる。

島田（後掲）が高野について聞き取り調査を行ったところ、伊藤清一の子・伊藤清隆は、「たいへん尊敬していた」と語り、現在の北上市内にあつた岩崎農場で、高野とともに開墾作業・合宿作業をした阿部サツも、「率直なひとだ」と語つたという。岩崎農場に昭和七年に移住してきた高橋キエは「言いたいことははっきり言うひとだったな。素直なひとで情深い。悪くはないひとだった」、小田島キサは「からつとした、さっぱりした気性でなかったかな」と、いずれの評価も高い。

高野一司の人柄について、賢治がメモした「偽善的ナル主事」だけを見れば、よい印象を抱きにくいかもしれないが、これも「酸きも甘きも分り切つたる高野技師」という信頼があつた上での言葉であるように思う。賢治は、花巻高等女学校の藤原嘉藤治と仲が良かったことは知られておりだが、よくケンカもしたという。島田（後掲）は賢治と高野の関係について「是々非々で相対したと想像される」とするが、たしかにそのとおりの関係であり、藤原と賢治がケンカをするくらいに仲がよかつたように、高野ともそれほど仲がよかつたのではないかと思われる。高野と大きく意見が食い違つたのは、国民高等学校のカリキュラムについてであつて、大きな方向としては共通していたのだろう。

河野基樹（「宮沢賢治と岩手国民高等学校 官製社会教育のはざま」）、「賢治研究73」 宮沢賢治研究会 平成九年八月）は、日本の国民高等学校と、そのモデルとなつたデンマークの国民学校を比較して、日本は国策であるのに対して、デンマークでは公的な

教育制度の枠外にこれが置かれていることに大きな差があるという。例えば、昭和二年二月開校の日本国民高等学校では、開学の目的を「自覚せる皇国農民の養成」とし、「国民高等学校の教育は其生徒をして祖国の有する大きな生命を直観認識せしめ之に帰一せんとする憧憬心を先づ起させ、その大きな生命を背負つて祖国を弥栄ならしむるために将来各自の進むべき道をはっきりと認め、飽迄もその志を貫徹せんとする理想信仰を与へることが眼目」であり、「約言すれば、国民高等学校教育の第一義は農村青年に大和魂を涵養することにある」（鈴木誠治 「日本国民高等学校」 『農村に於ける特色ある教育機関』 昭和八年五月 協調社）とする。一方、デンマークの国民高等学校は、「国の規則や法令にはいっさいしづられず、教科内容や授業方法も、さらに教師の任免も全く自由で、生徒は寄宿舎生活をするという、二四時間教育の大私塾である」。「その学習内容も枝葉末節の『手先の訓練』のみにとらわれない、基礎的な人間教育に重点をおいて、もつぱら教養教育のみが行われる。国民高校は校長の方針によって教育内容もちがうが、国語、音楽、文学、体操は共通の重点科目となつていた」（菊池忠二 前掲論文より）という。

図式的なまとめ方になるが、高野があくまで日本型の国民高等学校を進めるのに対し、賢治はデンマーク型を目指していたのだろう。その結果として皇国体操と農民芸術が並存する岩手国民学校の特殊な性格が生れたのだということになると思う。さて、たつた二行の文語詩の背景を述べるにしては、紙数を費やし過ぎたかもしれないが、この詩は、今まで述べてきたような国民高等学校の二つの側面について書いたものではないかと思ふ。

平来作（前掲）は、岩手国民高等学校に関する思い出を、次のように語つている。

国民高等学校の卒業式のことです。岩手県庁からも学務課長や

その他高官達が大勢来るといので、先生もいろいろ忙しそうに働いておいでになりました。

その時、先生が遠くから、

「平君、平君」

と呼ぶので、急いで走って行くと、

「花瓶はあるんだが、花がない。何かその辺から、花になるものを探して来てくれないか」

と、おっしゃるので、

「ハイ、しかし先生。花といってもまだ雪があるし：」

それでもお受けした以上はと思つて、玄関から私は飛び出ました。

まだ地面に、堅雪が凍りついている頃です。いくら学校の付近をさがしまわつても、一枝の花などあるべくもありません。

私も、ちよつと困つてしまいました。だが、雪の中から花を尋ねよというのは、これはかならずしも、花でなくていいわけだと、ふと考え、あの大花瓶にふさわしいものを、取つて行くと思ひました。

それからまた元気を出して、学校の周辺をぐるぐる歩いてみると、ある大木にからみついて、見事な根なしかずらがあるのを発見しました。私は手を打つて喜び、その糸のようにこんがらかった根なしかずらを、ずるずると大木から引き離し、それを持って帰りますと、先生は相好をくずして喜ばれました。

「ああ、これはいい、実にいいなあ」

と言つて、花瓶に適当に盛りあげてから、少し離れてそれを眺め、にこにこされては喜ばれるのでした。

私も、自分の思いつきが、こんなにも先生に喜ばれるとは思わなかったので、とても嬉しくなり、

「学務課長さんが、これはすばらしい花だ、俺は県庁へ持つて行きたいからくれないか、なんて言わないともかぎりませぬね」

と言うと、

「案外、そんなことになるかもしれないよ。全くこれはすばらしい根なしかずらだからなあ」

この根なしかずらと大花瓶が、文語詩の段階で、野茨とメスシリンダーになつてはいることについては、すでに赤田（後掲）に指摘があるが、賢治を喜ばせたのは、単に平の思いつきの素晴らしさ、根なしかずらの美しさだけではなかつたと思う。

文語詩の二行目では、鐘がなつたとたん内務部長のありがたい訓辞が始まっているが、賢治としてはこうした訓辞をありがたく拝聴している気には、どうしてもなれなかつたのではないかと思ふのである。賢治は、修了式にも、なんとかして官製の国民高等学校でなく、自分が理想とするデンマーク式国民高等学校の側面を打ち出したのであろう。

そこでこの野茨とメスシリンダー（根なしかずらと大花瓶）を部長と並べたのではないだろうか。野茨とメスシリンダーとは農民の立場を象徴するものであり、それを国家権力と対決させるという構図である。

もちろん受講生であつた平にそんな認識はなかつただろうし、賢治にしても、平にそんなことを依頼したつもりもなかつただろう。しかし、それだからこそ、自分が十一回に渡つて講義してきた農民芸術論が、早くも成果を出したこと、そしてそれが、自分が思い描いてきたデンマーク的な国民高等学校の側面を輝かせただけでなく、これから歩んでいこうとする農村活動の成功を予感させてくれたことを嬉しく思つたのではないだろうか。もつとも賢治の講義について、「正直言つてよくわからなかつた。だれもそうだつたと思う」（大滝勝巳「現実との落差」『二〇一人の証言 啄木・賢治・光太郎』読売新聞盛岡支局 昭和五十一年六月）と評する受講生も少なくなかつたように思うが、それはまた別の次元の話である。

岩手国民高等学校は、これが最初で最後のものとなった。大正十五年四月に「青年ノ心身ヲ鍛練シテ国民タルノ資質ヲ向上セシムルヲ以テ目的トス」る青年訓練所令が公布され、賢治が忌避していた方向が露骨に強調されるようになり、昭和七年九月には軍馬補充部六原支部に六原青年道場も設立された。

「岩手県立六原道場規定」の総則には、次のようにある。

本道場ハ県下青年男女ヲ訓育シテ専ラ信念ト実力トノ啓培ニ努メ依テ祖先伝来ノ日本精神ヲ体现シ入テハ地方風教ノ作興及地方産業ノ進展ニ尽シ出テハ新領土及海外ヘノ発展ヲ図リ以テ本県ノ振興ト皇国ノ興隆トニ貢献スル地方中堅人物ヲ養成スルヲ目的トス

菊池忠二（前掲）の言うように、「ここにはもはや岩手国民高等学校で、わずかにみられた自主的なデンマーク式教育の、ひとつかからも見出すことができない」。

最晩年になって文語詩定稿を編む賢治は、かつての自分の行いに見出せる「慢心」を冷静に見つめ、ことに羅須地人協会時代の自分の言動については、苦々しい思いを抱いていただろう。しかし、かといつて、それと対立するような六原で進められていたような方向、高野一司らが進めようとしていた方向に賛成していたとは考えにくい。先行作品や関連作品の指摘もなく、わずか二行でしかない文語詩から語れることに限界はあるにしても、晩年の思想を考えるための可能性だけは指摘しておきたい。

先行研究

赤田秀子「文語詩を読む その8 「氷雨虹すれば」を中心に 人へのまなざし 天へのまなざし」（『ワルトラワラ19』ワルトラワラの会 平成十五年十一月）

島田隆輔 「20 「氷柱かゞやく窓のべに」（『宮沢賢治研究 文

語詩稿五十篇・訳注2」〔未刊行〕 平成二十三年五月）

81 「公羽一面 おもてとなして世経る
など」

翁面、 おもてとなして世経るなど、 ひとをあざみしそのひまに、
やみほゝけたれつかれたれ、 われは三十ぢをなかばにて、
緊那羅面とはなりにけらしな。

大意

翁面のようなおだやかな表情を、 表に見せながら年齢を重ね、他人の目をあざむいてきたがその間に、
病氣から逃れることもできずに心身は疲れ果て、 そんな私は三十も半ばとなると、
いつしか緊那羅のごとき顔となっていたことだよ。

モチーフ

文語詩制作当時の賢治の心境が描かれた異色の作品。「自嘲」というタイトル案があったことからわかるとおり、自分の人生に対する反省の色が濃いのが、「緊那羅面」とは「帝釈に奉仕して法楽を奏す神」（『漢和対照妙法蓮華経』）でもあることから、仏法を重んじながら、芸術に打ち込んだ自分の人生に対する或る種の満足感も感じられるように思う。

語注

翁面 能面の一つ。ひげをはやして笑みを浮かべた老人の面。不老長寿などを願った初期の猿楽にもあったと言われる。神が老人の姿で舞った姿ともされ、ご神体とする神社も多い。「翁

面」が登場し、あらゆる人に笑みを浮かべて接する好人物といった本作とほぼ同じ意味で用いた作品に「一百篇」の「暁眠」がある。

緊那羅面 仏法の守護神とされる天の楽神である緊那羅の面のこと。島地大等（「法華字解」『漢和对照妙法蓮華経』）は「帝釈に奉仕して法楽を奏す神」とし、『仏教語大辞典』には瑞方の『学道用心集聞解』にある「梵語にて人に似て頭上に角あるゆへに普門品には人非人と出たり、または牧神とも訳す」を紹介している。『春と修羅（第一集）』の「小岩井農場」には、ちらちらと瓔珞をゆらせて「これらはあるひは天の鼓手、緊那羅のこどもら」とする例もある。

評釈

黄野（220行）詩稿用紙の裏面に書かれた下書稿（一）（タイトルは「自嘲」）。その裏に書かれた下書稿（二）、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（三）（鉛筆で④）、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。先行作品に関する指摘はないが、「一百篇」の「暁眠」には共通する詩句が登場し、どちらも賢治自身の人生を顧みる内容が含まれているように思える。下書稿（一）には昭和六年一月九日の佐藤昌一郎宛書簡の下書きがあることから、それ以降に起筆されたものと思われる。また、下書稿（二）には自画像と思われる絵が五つ描かれている。

賢治の文語詩は定稿に近づくにつれ、賢治自身の経験であったりも第三者化されたり、虚構化されていく傾向が指摘されるが、本作は賢治自身の晩年の心境を、「われ」として描いたもののように極めて珍しい。下書稿（一）のタイトルであった「自嘲」、そして下書稿（二）に描かれた自画像などからも、自己を見つめる思いで描かれた作品だということがわかる。

共通する詩句が用いられる関連作品の「暁眠」から見てみたい。

① 微けき霜のかけらもて、
街の燈の黄のひとつ、
西風ひばに鳴りくれば、
ふるえて弱く落ちんとす。

② そは瞳ゆらく翁面、
かのうらぶれの贗物師、
おもてとなして世をわたる、
木藤がかりの門なれや。

③ 写楽が雲母を揉み削げ、
春はちかしとしかすがに、
芭蕉の像にけぶりしつ、
雪の雲こそかぐるなれ。

④ ちいさきびやうや失ひし、
あしたの風はとどろきて、
あかりまたたくこの門に、
ひとははかなくなほ眠るらし。

「冬のスケッチ」を先行作品とし、賢治と交流のあったキリスト者の斎藤宗次郎をモデルにした作品だとされているが、浮世絵に対する関心の深さは賢治に通じるところがあり、また、自らの生涯を自嘲した本作における「翁面、おもてとなして世をわたる」と詩句を共有することから、単に斎藤のみをモデルに描いただけの作品ではなく、自分自身の経験を託していたように思える。

さて、「翁面 おもてとなして世経るなど」であるが、こちらは どう見ても賢治その人の思いが描かれたものであるとしか読めない。内容については、原子朗（後掲）が、痛切で痛ましい自己像が描かれているとしたが、どこかに明るさが見えるようにも思う。たしかに「ひとをあざみしそのひまに、／やみほゝけたれ」といった詩句から明るさを見出そうというのは難しいように思われるかもしれないが、島田隆輔（後掲）が言うように、かつては自分自身を修羅であるとしていた賢治が、「法楽をもって帝釈に奉仕するもの」（『漢和对照妙法蓮華経』）に自己を規定できるようなったというのであるから、「やつと緊那羅の面を帯びるところまになつたようだなあ」という解釈には納得できる点が多い。

ただ、「翁面」として世を欺く自分が「緊那羅面」であったという本作の背景に能の世界が広がっていることについての言及が島田にない。奥田弘（「宮沢賢治の読んだ本 所蔵図書目録補訂」）『宮沢賢治研究資料探究』蒼丘書林 平成十三年十月）によれば、賢治の蔵書には大和田建樹『謡曲通解』（博文館 明治二十五年一月～十一月）の全八冊が揃っていたということだから、賢治は能についての興味と知識もそこそこにあったようだ。

「緊那羅面」というのは、原子朗（後掲）によれば、喝食面の異名なのだというが、そうした資料は確認できていない。そこで賢治が下書稿(一)に書いた「大喝食となりけり」から考えてみることにしたい。

「喝食」とは、「禅宗で、大衆に食事を知らせ、食事について湯飯などの名を唱えること。また、その役をつとめる僧」（『日本国語大辞典』）のことなのだというが、能になると、「前髪にえくぼ、女面風の口元の美少年。『自然居士』『東岸居士』のシテに用いられる」（『能・狂言図典』小学館 平成十一年七月）のだという。喝食面には、額に銀杏の葉のような前髪があるが、大きさによって大喝食、中喝食、小喝食というようだ。賢治は大喝食を称しているが、大人であることを示そうとしたのであろう。ただ、「その大・中・小を年齢の大・中・小に準じるものの如く取る解釈の仕方は必ずしも正しいとは言へない」（野上豊一郎『能面』岩波書店 昭和十二年）のだという。

さて、この喝食なのだが、喝食の登場する能を遊狂物といい、見せどころはシテである喝食が歌い、舞うことであるとされる。

『新版 能・狂言事典』（平凡社 平成二十三年一月）で、喝食の登場する演目について調べてみると、「東岸居士」については、「東岸居士が白河に架けた橋の普請勧進のため清水寺参詣の人を相手に舞う、遊狂物の典型的作品。△中ノ舞▽△クセ▽△鞆鼓▽と芸尽しを見せるのを専らとし、『自然居士』『花月』といった他の遊狂物がもつドラマ性はない」とあり、「自然居士」については、

「芸尽しの能で、前半の説法（古くはもつと長かった）から、人買いとこの緊迫した問答、それに△中ノ舞▽△クセ▽△鞆鼓▽△鞆鼓▽と続き息をつかせない。「花月」については、「親子再会物だが、内容的には芸尽しの能で、△小歌▽△弓の段▽△クセ▽△鞆鼓▽△山尽しの謡▽と見せ場が多い」とある。つまり、賢治が「大喝食」に自らをたとえたということは、賢治が自分自身の生涯を歌い、舞う「遊狂」として括ろうとしていたことに繋がるのではないだろうか。また、喝食が半僧半俗だと言われているところも、賢治にはうまく当てはまっている気がしたのかもしれない。

しかし、この「大喝食」のアイディアは、下書稿(一)の手入れの段階で「外道」に改められる。外道とは「仏教以外の教え。また、その教えを奉ずる者」（『広辞苑』）だが、仏教を極めることにも精進せず、歌ったり舞ったりすることにうつつをぬかした……ということなのだろう。

「大喝食」をやめたのは、おそらく先にあげた『能・狂言図典』にあるように、「女面風の口元の美少年」といったイメージが、自分とはかけ離れたものだという思いによるのではないかと思う。下書稿(二)には、賢治本人による自画像が描かれているが、アルパカというあだ名を生徒に付けられる元ともなった前歯の出方も著しく、髪も禿げ上がり、かなり「自嘲」的な描き方になっている。そんな自分を美少年とはさすがに書けなかったのではないだろうか。ただ、「外道」も、賢治が熱心に仏教を信じていたことから、あまり適切な比喩であるとは思えないし、歌や舞いに熱中するという側面が全くうかがえなくなってしまう。

そこで、『漢和对照妙法蓮華経』に「帝釈に奉仕して法楽を奏す神」とされる緊那羅が選ばれたのだろう。仏教と歌舞という二つの要素が含まれているからだ。原（後掲）によれば、緊那羅面というのは喝食面の別称なのだということなのだが、もしそのとおりであるのだとしても、あまり一般的なものではないようなので、冒頭の翁面と対照させて用いるのであれば、大喝食のままであつ

た方が、レトリックとしてはうまくいっていかもしれない。
さて、こうした検討の後で、改めて本作を読んでみると、八自
分は翁面のように柔和な表情で人々に接してきたが、病んでしま
った今になってみると、自分は結局、仏教と芸術ばかりを考えて
いる存在であつたVといった風になるだろうか。農学校の教員と
して、あるいは羅須地人協会の活動、碎石工場でのサラリーマン
生活（下書稿(-)が書かれたのはこの時期であろう）といった社会
的な活動をしてきたが、いずれも不徹底なままで、今となっては、
仏教と芸術のみに生きていたなあ。といった自覚である。原子
朗（後掲）によれば、これは痛切で痛ましい自己像だということ
のようだが、病みほうけた今になつても、仏教と芸術が自分と共
にあるという自覚なのだと思えば、必ずしも悲観的にばかり捉え
る必要はないと思う。賢治は、文語詩を「なつても（何もかも）
駄目でも、これがあるもや」と言い残し、遺言には法華経を友人
知己に配つて欲しいと頼んだと伝えられるが、そう思えば、誠二
賢治にふさわしい心境の吐露であつたようにも思えるのである。

先行研究

- 山口達子「賢治「文語詩篇定稿」の成立」（大谷女子大学紀要
2012）大谷女子大学志学会 昭和六十一年一月）
原子朗「ことば、きららかに」（十代17-12）ものがたり文化の
会 平成九年十二月）
島田隆輔「原詩集の輪郭」（宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛
筆・赤インク入写稿Vによる過程）広島大学博士論文 2011
ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00032003 平成二十二年九月）

82 氷上

①月のたはむれ薫ゆるころ、 氷は冴えてをちこちに、 さゞめ

きしげくなりけり。

②をさけび走る町のこら、 高張白くつらねたる、 明治女塾の
舎生たち。

③さてはにはかに現はれて、 ひたすらうしろすべりする、 黒
き毛剃の庶務課長。

④死火山の列雪青く、 よき貴人の死蠟とも、 星の蜘蛛来て網
はけり。

大意

月が火星と接近して空に浮かぶ頃、 氷はいつそう冷たく冴える
とあちこちから、 人々の喧嘩が高まつてきた。

大声を上げて走る街の子どもたち、 高張提灯が連なり、 明治
女塾の舎生たちも集まっている。

そこに突然現れ出で、 ひたすらに後ろ滑りをするのは、 黒々
とした坊主頭の庶務課長であつた。

死火山が並んで雪が青く、 身分の高い方の死蠟のように見え、
星が蜘蛛のように網を吐いている。

モチーフ

氷上運動会の練習に、近隣の学生たちが励んでいる。そこに県の
役人がやってくると、周囲の景色もすっかり不気味なものに転じ
てしまった。それだけの内容だが、人間の心の不思議を感じさせ
た事件として、中学時代の賢治に強い印象を与えたのだろう。ま
た、女生徒の華やいだ様子も添えることによって、性の意識が芽

生える思春期の心理を表現したい思いもあったように思う。

語注

月のたはむれ薫ゆるころ 下書稿(二)に「火星の月にこくすてふ」とあるとおり、月と火星が接近する会合の日時にスケートをしていたことがわかる。賢治はその天体ショーを「たはむれ」と書いたであろう。

高張 高張提灯のこと。明治女塾の舎生が持っていたようにも読めるが、外山正(後掲)が言うように、「推敲過程からいえば女学生は提灯に関わりがなく、言葉が省略されたため厳密に言えばこの連の各句はつながっていない」。

明治女塾 こうした名前の学校はなかった。外山(後掲)は、県立高等女学校(現・盛岡第二高等学校)を指すとするが、明治二十五年開学のカトリック系ミッションスクールである私立盛岡女学校(現・盛岡白百合学園高等学校)の方が「女塾」の語には合うかもしれない。

毛剃 外山(後掲)は、坊主頭のこととする。が、ヒゲ剃りあとが黒々としている意だったのかもしれない。

死火山の列 かつては火山活動の度合いから活火山、休火山、死火山に分類していたが、死火山と思われていた火山が爆発したことがあったことから、現在はこの分類はされていない。下書稿には乳頭山の名があるが、有史以来、噴火したとの記録はない。

貴人 下書稿には「あでびと」のルビがあるが、音数から言っても、そう読ませたかったのだろう。

死蟻 死体が外気から長時間遮断された結果、腐敗菌の繁殖を免れ、死体内部の脂肪が分解して脂肪酸となり、全体が蟻状・石鹼状になったもの。

評釈

黄野(222行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(藍インクで①)、同じ紙に鉛筆で手を入れた形で書かれた下書稿(二)、裏面に書かれた下書稿(三)(手入れ段階で「スケート」のタイトル)、黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(四)、裏面に書かれた下書稿(五)(鉛筆で②)、定稿用紙に書かれた定稿の六種が現存。生前発表なし。関連作品に「歌稿「A」「B」」の短歌22「あはれみよ月光うつる山の雪は／若き貴人の死蟻に似ずや。」(引用は「歌稿「B」」がある。同歌は赤インクで囲まれ、下部に「氷盤」のタイトルで「火星、公園下を放歌する群／あとすべりよくする内務部長、」とある。

「文語詩篇」ノート」の「中学一年」「第三学期」に「スケート 氷 月」とあり、「東京」ノート」の「盛中二年」の「三学キ」の欄に「スケート、月、氷 公園」とある。前者によれば一九一〇(明治四十三年)のできごとだということになり、後者によれば翌年の一九一一(明治四十四年)のできごととなるが、加倉井厚夫(後掲A)は、下書稿(二)の「火星の月にこくすてふ」の「こくす」を草下英明(「宮沢賢治の作品に現われた星」『宮沢賢治と星』学芸書林 平成元年七月)が「こくす」は「剋す」で「相接近する」という意味」としたのに従い、月と火星が接近する日を計算し、一九一〇年ならば一月十八日か十九日、一九一一年ならば二月二十五日であるとした。さらに下書稿(一)にある「弦月(半月)を重ね、一九一〇年一月一八日を最有力候補として挙げる(同年三月十六日も候補にするが、スケートの時期からははズれるのではないかという)。「歌稿「A」」によれば短歌22は「明治四十四年一月」の章の最後に収められているので、明治四十四(一九一一年)年であった方が都合がよいが、虚構化が施されていたり、いくつつかの経験を合わせて書いている場合もあるので、これ以上の追求はあまり意味を持ちそうにない。さて、下書稿(一)は次のとおり。

県庁の給仕水をば入れしとか
この弦月と火星とをうつし
鋼の板はいま成りて
首巻つけし学生ら
をちこち三五滑り居る

さあれ西ぞらうち亘す

乳頭山 源太森

葛根田の上のあたりには
なほ青くして古めける
水あかりこそあえかなれ

ときにはたちまちあらはれて
月夜の蟹のかたちして
もばらにうしろすべりする
毛皮まとへる紳士あり

(知るべしこれぞ部長なり
はじめは知事にしたがひて
辛く氷を渡りしに
はや人なみのわざに厭き
もばらにうしろすべりする)

師範の寄宿の方に
自修云ふラッパの鳴りて
灯まれなる公園下を
濁み声に歌ふ声あり
紳士いま興いよよにて
さらにまたあとすべりする

葛根田谷の上なる
水あかりはや納まりて
あはれ見よ月あかり照る
死火山のかの一行は
年若きその貴人の
死蟻とも見ゆるならずや
星の蜘蛛上に網せり

外山正(後掲)によれば、明治四十三年二月に盛岡の高松池で、盛岡中学校の氷上運動会が挙行され、県知事の笠井信一もリンクに立ったという記事が「岩手日報」に載ったという。そして、「本詩編はおそらくこの盛岡中学校の氷上運動会に先立つ、生徒のみならず知事まで登場しての自主練習の一こまと考えられよう。場所は岩手公園。夜、皆で繰り出して練習したのである」とする。さらに外山は、「岩手日報」の明治四十二年一月十八、二十一日、二月五日。明治四十三年二月六日などにも氷上運動会の記事が載ったことを指摘しているが、試みに明治四十三年一月二十二日の「岩手日報」の記事を見てみると「師範学校氷上運動会」の記事が載っており、ここにも笠井知事がいたとあって、「七八百人の男女学生が蜘蛛の糸を散した様に氷上を駆け回つて居るそれが次第に密集して来ると氷がミリくくと音をして割れる、キヤツと云つて女の児などは四方に散れる」と、賑やかな様子を再現し、「氷上に集つた人員は師範か男女で八百五十、高女生か三百、盛岡女学校か二百五十、其他農林や県庁などの人一般の見物まで合せると千四百五十のことである」と、他校の学生も多く集まっていたことが書かれている。

賢治がここに顔を出していたかどうかはわからないが、盛岡の学生たちが、この時節になると、入り混じつて氷上運動会に備えた練習(あるいは本番)をしていたことが想像でき、賢治が何年何月の経験を書いているかは限定できないものの、賑やか

にして、華やかな雰囲気を感じていたことが想像できる。

『新校本全集』の「年譜」によれば、大正十五年一月二十七日の「岩手日報 夕刊」に、「来月上旬／スケート大会」「花巻スケート／協会生まる」との見出しで、「花巻高女藤原教諭県立農学校宮沢白藤両教諭の外両町有志により新に創設された花巻スケート協会では第一回滑走試演を稗貫矢沢村三郎堤に開催し大いに氣勢をあげた」という記事が出たという。堀尾青史（『年譜 宮沢賢治 伝』中公文庫 平成三年二月）が、明治四十四年（十五歳）の「二月」の項に、「スケートに熱中したが、あまり上達しない」と書いていることから、賢治が率先してスケートをやりたがっていたとは考えにくいだが、当時の岩手の学生たちにとって、スケートは大きな関心事だったのだろう。

下書稿(一)には「首巻つけし学生ら」とあるが、下書稿(三)の手入れに「白の首巻つゝましく／をちこちやゝにうつれるは／師範生こそつゝましき」とあることから、岩手県師範学校の女子学生を想定しての記述だろう。スケートの楽しみの中には、女子生徒を間近に見ることができるといふことも含まれていたはずだ。

もつとも、井上章一（『受難の美人』『美人論』朝日文庫 平成七年十二月）によれば、師範学校に通う女生徒は器量が悪いといふことは公然と言われていたようで、永井荷風の『地獄の花』（金港堂 明治二十五年九月）には、「女教師と云ふやうなもの、畢竟望むやうな結婚も出来ない婦人、さうでなくば何か余儀ない事情から然う云ふ境遇に致された」とも書かれ、また「この美人師範生とは不思議なり。」（加藤熊一郎『世帯人情論』東亜堂 明治四十五年七月）といった川柳も知られていたというのだが、それでも男子のみの盛岡中学生には新鮮な光景だったのだろう。

ともあれ、そこに「月夜の蟹のかたち」のようにして「うしろすべり」をする紳士が登場する。この男は、カッコで字下げされた部分によれば県の部長であり、知事に従ってこわごわと氷を滑っていたのが、すぐに上達して、今はうしろすべりを披露してい

るといふのである。

外山（後掲）は、「前方すべりも（おそろく）おぼつかない賢治にとつて後ろすべりは異次元の存在」であったとするが、山本喜一の『氷滑術初歩』（後進の基本演習）宮坂日新堂 明治四十二年二月）にも、「前進は早く進歩し、後進は前進が余程に進歩してからでなければ、滑れないのが普通である」とのことなので、この「紳士」は、運動神経の鈍い賢治としては、よい感情を抱けない存在だったのだろう。下書稿(三)の手入れには「あとすべりしていきまける」という言葉もあるが、かなりやつかみが入っているようにも思える。

さらに、師範学校の寄宿舎の方向からはラッパが聞こえ、また「濁み声に歌ふ声」まで聞こえてきて、すっかりむさくるしい男世界が混入し、すっかり気分が削がれてしまったというのだろう。賢治にとつて、他校の女子学生にこれほど接近することは刺激的な出来事だったのだろうが、その気分も、うしろすべりの紳士や濁み声によつてすっかり消し去られ、「死火山のかの 一列」は「年若きその貴人の／死蠟」に転じ、「弦月と火星」が接近するという特別の夜空も蜘蛛が糸を吐く姿にしか見えなくなったということなのだと思ふ。

この後も細かく改稿しながら定稿に至るが、四連構成のうちの最初の二連では、高張提灯の光の中を「をさけび走る町のこら」と「明治女塾の舎生たち」によつて賑わっていた氷上の様子を描き、「転」にあたる第三連では「黒き毛刺の庶務課長」に後ろすべりをさせ、最終連で「貴人の死蠟」「星の蜘蛛」を登場させる形にしている。

外山（後掲）は、「内容にあまり劇的な展開はなく、特にメンタルな部分に立ち返って行くようなところもない」と書いている。しかし賢治は、まず短歌を詠み、自分の半生を省みて書き記した「文語詩篇」ノートと「東京」ノートにこの日のメモを残し、六種の現存稿を残したということから考えると、賢治にとつては

忘れられない事件であったということなのだろう。そこで推敲の過程をたどってみても変化していない部分から考えれば、賑やかな氷上の様子が、役人の登場をきっかけにして、急に色あせたものに見えてしまったことしか残らないことから、おそらく賢治はこの心象が移り変わったということを書きたかったのではなかったのだろうと思う。

「『百篇』の「心相」にも（下書稿（一））、賢治は心象の変化を次のように書いている。

たよりなきこそころなれ

はじめに森を出でしとき

おもはえて見し雪山を

いまはわづかにかゞやける

澱粉堆とうちわらひ

いたゞきすべる雪雲を

腐れし馬鈴薯とあざけりぬ

その上で本作の特徴を考えれば、女性を登場させたことだろう。森荘巳池（『春夜暁臥』の書かれた日）『宮沢賢治の肖像』津軽書房 昭和四十九年十月）が、ある時、賢治と小岩井農場にスケッチ旅行に出た際、次のようなやりとりをしたという。

——春になって、蛙は冬眠から覚め、蛙のいる穴へ、ステッキをつきさせば、穴から冷たい空気が出る。ほの暖かい桃いろの春の空気に……

私が、そのような詩を、その春に作ったことを宮沢さんに話した。すると、宮沢さんは、にわかには活発な口調になって、

「あ、それはいい、よい詩です」
と、言った。ほめられたのだなと喜ぶと、つづけて言った。
「実にいい。それは性欲ですよ。はっきり表われた性欲です」

ナ

私は詩をほめられたのではなかった。

「フロイド学派の精神分析の、好材料になるような詩です……」

スケートをする人々を描くこの小品に賢治がこだわった理由の一つには、ただ心象の変化というだけでなく、思春期の異性に対する思いを盛り込もうという意図もあつたように思えるのである。

先行研究

加倉井厚夫A「宮沢賢治のプラネタリウム」（『ワルトラワラ12』

ワルトラワラの会 平成十一年十一月）

外山正「氷上」（『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』 柏プラーノ平

成十二年七月）

加倉井厚夫B「宮沢賢治のプラネタリウム6 宮沢賢治の火星」

（『ワルトラワラ18』 ワルトラワラの会 平成十五年六月）

板谷栄城「スケート 運動苦手でも楽しむ」（『賢治小景』 熊谷印

刷出版部 平成十七年十一月）

83 「うたがふをやめよ」

① うたがふをやめよ、 林は寒くして、

いささかの雪凍りしき、 根まがり杉ものびてゆるゝを。

② 胸張りて立てよ、 林の雪のうへ、

青き杉葉の落ちちりて、 空にはあまた鳥なけるを。

③ そらふかく息せよ、 杉のうれたかみ、

鳥いくむれあらそへば、 氷霧ぞさつとひかり落つるを。

大意

うたがうのはやめよ、林は寒く、
少しばかりの雪も凍り、根曲がり杉も伸びて風に揺れている。

胸を張って立て、林の雪の上に、
青い杉の葉が落ち散って、空にはたくさんのカラスがないて
る。

大気を深く呼吸しろ、杉の梢は高くして、
カラスの群れが争いを始めると、氷霧がさつと光って落ちてき
たようだった。

モチーフ

「〔冬のスケッチ〕」に源流のある作品。稗貫農学校時代の賢治が、
おそらくは恋愛と宗教（そして妹の病氣）の間で悩んでいたとこ
ろを、自分自身に勇気を持って自分が決めたとおりの道を進むべ
きだと叱咤している内容だろう。「うたがふをやめよ」は、「小岩
井農場」〔春と修羅（第一集）〕における「もうけつしてさびし
くはない／なんべんさびしくないと云つたとこで／またさびしく
なるのはきまつてゐる／けれどもここはこれでいいのだ」を思い
起こさせ、「胸張りて立てよ」は、同じく「さあはつきり眼をあ
いてたれにも見え／明確に物理学の法則にしたがふ／これら実在の
現象のなかから／あたらしくまつすぐに起て」を思い出させる。
取材日と賢治が小岩井農場に出かけた日は近いが、晩年の賢治が、
若き日の決意を語った詩を、どういうつもりで文語化したのかに
ついてはいろいろな解釈ができそうだ。

語注

うれたかみ 杉の木の梢（うれ）が高いので、の意味。ただ、後

に続く鳥の争いの理由が杉の木にあるとは考えにくい。

氷霧 「細かな氷晶が多数空気中に浮かんで、霧のようにあたり
がぼんやり見える現象。顕微鏡で氷晶を調べると、針状、柱状、
板状などさまざまな形をしている。普通、気温が氷点下10℃あ
るいはさらに低いときに発生する。氷霧を通して太陽が見える
ときは、その周りに暈が現れたり、上下に延びる光柱が見えた
りする。氷晶の数が比較的少ないときは細氷とよばれる」〔日
本大百科全書〕。「二百篇」の「岩頸列」等にも登場する。また、
鳥が争うと、氷霧がさつと落ちたというのは、先行作品である
「〔冬のスケッチ〕」の同一紙葉を元にしたと思われる「一百
篇」の「嘆願隊」に、「二羽の鳥の争ひて、さつと落ち入る杉
ばやし、／このとき大気飽和して、霧は氷と結びけり。」とも
あった。鳥の争いが自然現象に影響を与えたように感じられた
ということだろう。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」第十七葉と第三八葉として書かれた下書稿
(一)、黄野(260行)詩稿用紙に書かれた下書稿(二)(タイトル案と
して「林中」?)鉛筆で①、その裏面に書かれた下書稿(三)(鉛筆
で②)、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。下
書稿(三)の手入れ段階で「ナリトナリアナロ」「アナロナビクナビ」
「ナビクナビアリナリ」とあるが、「未定稿」の「祭日(二)」に
も登場する法華経の陀羅尼品第二十六にある呪文によるもの。
先行作品とされる「〔冬のスケッチ〕」第十七葉と第三八葉は次
のような内容である。

かなしみをやめよ
はやしはさむくして

(第十七葉)

からすそらにてあらそへるとき
あたかも気圏飽和して
さとかゝれる 氷の霧。

(第三八葉)

『新校本全集』に「この二葉が本来連続していたことは明らかである」とするが、基本的にはそのとおりでろうと思う。しかし、島田隆輔（後掲A）も言うように第三七葉も先行作品にあたるのではないかと思うし、第十七・三八葉についても指摘されている以外の箇所も、直接詩句として残ってはいなくても、モチーフとしては定稿成立にいたるまで影響を与えていたのではないかと思う。

からす、正視にたえず、／また灰光の桐とても／見つめんとし
てぬかくらむなり。
※／たましひに沼気つもり／くろのからす正視にたえず／やす
からん天の黒すぎ／ほことなりてわれを責む。
※／きりの木ひかり／赤のひのきはのびたれど／雲ぐもにつむ
／カルボン酸をいかにせん。
※／かなしみをやめよ／はやしはさむくして

(第十七葉)

はやくも酵母西をこめ／白日輪のいかめしき／（からすはなほ
も演習す。）
※／あまりにも／こゝろいたみたれば／いもうとよ／やなぎの
花も／けふはとらぬぞ。
※／凍りしく／ゆきのなからやせたおほぼこの黄いろの／穂
がみな北に向いてならんでゐます。
※がけ／杉ばやし／けはしきゆきのがけをよち／こゝろのくる
しさに／なみだながせり。

※

からすそらにてあらそへるとき／あたかも気圏飽和して／さと
かゝれる 氷の霧。
※／眩ぐるき／ひかりのうつろ、のびたちて／いちじくゆるゝ
／天狗巢のよもぎ。
※／ながれ入るスペクトルの黄金／ひかりかゞやくよこがほよ
／こころもとほくおもふかな。
※ストウブのかげらふのなかに／浸みひたる 黄いろの靴した。
※電信のオルゴール／ちぎれていそぐしらくもの／つきのおも
てをよぎりては

(第三八葉)

こうしてあげてみると、「冬のスケッチ」から文語詩化された
「一百篇」の「肖像」、「猥れて嘲笑めるはた寒き」、「塀のかな
たに嘉兎治かも」、「四時」、「黄昏」、「嘆願隊」、また「未定稿」
の「卑屈の友らをいきどほろしく」など、稗貫農学校時代の鬱
屈、鳥や杉のモチーフなどに共通点のある作品群が関連している
ことに気付く。ただ、細かな検討をしようにも文語詩では表現が
抑制され過ぎており、「冬のスケッチ」では断片的であり過ぎ、
また、実体験と虚構が入り混じっていることを考えれば、誰もが
納得のできる方法で整理するのはきわめて困難であるように思う。
ところで、「かなしみをやめよ」あるいは「うたがふをやめよ」
とある冒頭の詩句は、何に對する「かなしみ」あるいは「うたが
ひ」なのだろうか。文語詩の定稿をいくら読んでみても、杉林や
鳥の記述しか出てこないが、本作の先行作品と思える「冬のスケ
ッチ」第十七葉と第三七葉から成り立ったと思われる『春と修羅
（第一集）』の「恋と病熱」（制作日付は大正十一年三月二十日）
との関連について考えてみたい。

けふはぼくのたましひは疾み
鳥さへ正視ができない

あいつはぢやうどいまごろから
つめた青銅の病室で

透明薔薇の火に燃される
ほんたうに、けれども妹よ
けふはぼくもあんまりひどいから
やなぎの花もとらない

賢治がこの頃、特定の女性に対して恋心を抱いていたことは、伝記的にもたしかなことのようにだが、そんなことに熱中している間に妹は病臥についているという自分に対する戒めを詠んだ作品であると読まれているようだ。

この頃の恋をテーマにしたものだと思われる「一百篇」の「猥れて嘲笑めるはた寒き」は、次のようなものである。

①猥れて嘲笑めるはた寒き、
かへさままた経るしろあとの、
凶つのみみをはらはんと
天は遷ろふ火の鱗。

②つめたき西の風きたり、
栗の垂穂をうちみだし、
あららにひとの秘呪とりて、
すすきを紅く燿やかす。

「ひとの秘呪」とは、下書稿に「かなしく君が名を呼べば」ともあることから、思っていた相手の名前だということがわかるが、「猥れて」、「嘲笑める」、「凶つのみみ」、「火の鱗」、「秘呪」といったプラスのイメージでは捉えにくい語句が多出することからも、「小岩井農場」(『春と修羅(第一集)』)で展開した「じぶんとひとと万象といっしょに／至上福しにいたらうとする／それをある宗教情操とするならば／そのねがひから碎けまたは疲れ／じぶん

とそれからたったもひとつのたましひと／完全そして永久にどこまでもいっしょに行かうとする／この変態を恋愛といふ」と書いた認識に近いように思う。だとすれば、本作の背景にも恋愛や宗教の問題にまつわる煩悶があったのだと考えることもできるのではないかと思う。

「うたがふをやめよ」と「小岩井農場」の関係といえは、「胸張りて立てよ」という好日的な言葉は、「小岩井農場」における「さあはつきり眼をあいてたれにも見え／明確に物理学の法則にしたがふ／これら実在の現象のなから／あたらしくまつすぐに起て」に近いように思うし、「うたがふをやめよ」も、「もうけつしてさびしくはない／なんべんさびしくないと云つたところで／またさびしくなるのはきまつてゐる／けれどもここはこれでいいのだ」という、無理に自分を納得させようとした言葉遣いに似ているようにも思えてくる。ただ、全編の解明には、まだまだ時間がかかりそうだ。

また、下書稿(三)には、「未定稿」の「祭日(二)」にある「ナリトナリアナロ」「アナロナビクナビ」「ナビクナビアリナリ」の呪文(法華経陀羅尼品)が組み込まれているが、おそらくはこれも自分を戒め、言い聞かせるための呪文であり、恋愛や性欲に負けそうになる自分をコントロールするためのものであったようにも思える。島田(後掲B)は、この呪文の翻訳として「うたがふをやめよ」「胸張りて立てよ」「そらふかく息せよ」が対応しているのではないかと興味深い指摘をしている。

賢治は森莊已池にむかって、「禁欲は、けつきよく何もなりませんでしたよ、その大きな反動がきて病気になったのです」。「何か大きないいことがあるという、功利的な考えからやっただのですが、まるつきりムダでした」と語り、また「草や木や自然を書くようにエロのことを書きたい」とも語ったという(昭和六年七月七日の日記)『宮沢賢治の肖像』津軽書房 昭和四十九年十月)。文語詩を編む賢治は、いったい何を考えていたのだらう。若い時代

の決意を、岩手に生きてきた一人の人間のサンプルとして第三者的に扱って提供したつもりなのか、それとも変わらぬ思いがあったのだろうか。ともあれ、新資料の発掘、または、新しい視点が生れることを待ちたいと思う。

先行研究

島田隆輔 A 「冬のスケッチ散佚稿／《文語詩稿》への過程から迫る試み」(『島大國文26』 島大國文会 平成十年二月)

赤田秀子 「文語詩を読む その9 鳥のいる風景「鳥百態」ほか冬のスケッチから文語詩へ」 「ワルトラワラ20」 ワルトラワラの会 平成十六年五月)

中谷俊雄 「イーハトーブの野道6 雪(三) カラス」(『賢治研究94』 宮沢賢治研究会 平成十六年十一月)

島田隆輔 B 「定稿化の過程」(『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク△写稿▽による過程』 広島大学博士論文 2003.11.11. Hiroshima-u. ac. jp/ja/00032003 平成二十二年九月)
島田隆輔 C 「訳注篇 12 「祭日」」(『宮沢賢治研究《文語詩稿》 未定稿 信仰詩篇の生成』 ハーベスト社 平成二十七年六月)

84 電 電 工 工 大

① (直き時計はさまざま頑く、
さはあれ攀ぢる電塔の、
憎に鍛えし瞳は強し)
四方に辛夷の花深き。

② 南風光の網織れば、
艸火のなかにまじらひて、
ごろろと鳴らす碍子群、
蹄のたぐひけぶるらし。

大意

(正確で頑丈そうな腕時計をしながら、憎悪を蓄えたかのような眼をしている)
しかし電柱をよじ登っていくと、四方にはコブシの花が色濃く咲いている。

南風がそよぐと電線は光の網が織られたようで、碍子の群れもごろろと音をたて、野焼きの火の中にまじって、牛馬や豚たちも煙の中に見えるように見えた。

モチーフ

先行作品では、名譽村長なる人物が農作業をしているところを、年老いた農夫が幾分か冷ややかな目で笑っているという作品であった。この案が一旦は文語詩に引き継がれるが、定稿では二人の人物が消えて、電気工夫だけが登場する。当時は高級品だった腕時計を所有する電気工夫は、仕事への不満から目つきも悪い。が、そんな近代的労働者が、高所に登った際に眺めた農村の風景の美しさに直面する瞬間を描くことを、賢治は目指したのだと思う。

語注

直き時計 下書稿に「正しき時計」とあることから、時刻の正確な時計の意。黒塚洋子(後掲)は「すぐき」とするが、「なおき」かもしれない。電塔によじ登っている電気工夫が所有していたことがわかるものだと思われることから、懐中時計ではなく、大正末年に一般化した腕時計であろう。

憎に鍛えし瞳は強し 長く憎しみを感じているために、目に強い力がこもっているように見える、ということだろう。ここでは電気工夫が仕事に対する不満から、目つきまで悪くなっているということだろう。

南風 下書稿では「北風」とする段階もあったが、手入れで「南

風」に改められる。「かけつ」のルビは『定本語彙辞典』に東北方言だと書かれているが、佐藤政五郎編『南部の言葉 第二版 増補新版』（伊吉書院 昭和六十二年七月）や小松代融『『岩手方言集』（国書刊行会 昭和五十年六月）などにも見あたらない。『ごろろと鳴らす 島田隆輔 A・B（後掲。ただしほぼ同内容）が、

「三二七 清明どきの 駅長 一九二五、四、二一、」（春と修羅 第二集）の下書稿（-）の手入れ形における「六列展く春のグラ ンド電柱に／青くわなく金属線が渡されて／碍子もみんなご ろごろ鳴れば」とあることを指摘しているが、ここでも雷鳴な どではなく、碍子が鳴っている音だと思われる。

碍子群 絶縁のために電柱や鉄塔に取り付ける陶磁器や合成樹脂 でできた器具のこと。

艸火 野焼きのことだろう。春先に草がよく生えるようにと草を 焼いている。

蹄のたぐひ 下書稿に「豚」とあり、先行作品には「馬か山羊か の蹄も焼けば」とあった。

評釈

無罪詩稿用紙に書かれた下書稿（手入れ段階でタイトル案が 「退耕」、ついで「電気工夫」に改められる。紙面右肩に赤インク で①、詩稿の上に鉛筆で②）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が 現存。生前発表なし。

黒塚洋子（後掲）は、『新校本全集』に指摘はないが、先行作品 を「詩ノート」の「二〇五一」「あっちもこっちもこぶしのはなぎ かり」一九二七、四、二八、」だとする。

あっちもこっちもこぶしのはなぎかり

角をも蹄をもけぶす日なかです

名誉村長わらってうなづき

やなぎもはやくめぐりだす

はんの毬果の日に黒ければ
正確なる時計は蓋し巨きく
憎悪もて鍛へられたるその瞳は強し

小さな三角の田を

三本鋤で日なかに起すことが

いったいいつまで続くであらうか

氷片と光を含む風のなかに立ち

老ひし耕者もわらひしなれ

関係は決定的だろう。文語詩下書稿の最初期の形態は次のとお り。

四方は辛夷の花盛りあがり

赤楊の毬果の日に黒ければ

艸を燃すとて蹄もけぶし

名誉村長うなづき行けり

正しき時計はそのさま頑く

憎悪にきたえし瞳は強し

楊の花芽らひそかに熟し

蛙のたまごもほごれて啼けば

北風氷とひかりを吹きて

老いたる耕者もしづかにわらふ

口語詩段階の内容は、ほぼそのまま受け継がれているようだが、 手入れ段階で名誉村長も、野良仕事がいままで続くかと笑う耕者 も姿を見せなくなり、電気工夫のみを描いた作品になる。

島田隆輔（後掲）は、さらに「春と修羅 第二集」の「三四〇

「あちこちあをじろく接骨木が咲いて」一九二五、五、二五、」 の下書稿に、その源流があったのではないかという。まず下書稿 (二)には「草を焼かうとして／馬か山羊かの蹄も焼けば／名誉村長

わらってすぎる」とあり、下書稿(三)には「塵あぐたを燃やすと蹄も焼けば／老いたる耕者のはるかに忿る」ともあるからだ。島田は「名譽村長の笑い」と「耕者の忿り」を対立的に捉え、一九二五年当時の社会状況から、名譽村長のモデルが遊興の地である花巻温泉の誘致と開発を推進した湯本村長の吉田諭か千葉節郎、そして、それを快く思わない老いたる耕者の対立であったと読んでいる。

賢治は花巻温泉の開発について批判的で、例えば賢治はこゝを「賤舞の園」(「歳は世紀に曾て見ぬ」)「未定稿」と呼び、また「魔窟」(「一〇三三 悪意 一九二七、四、八、」)「春と修羅第三集」とも呼んだ。島田は名譽村長が「憎に鍛へし瞳」を持つていたのは、「専横な為政に対する村民の批判ものともしなかった」からだとするのだが、納得できる部分の多い見解だと思う。

しかし、名譽村長のモデルについては、他にも候補がいるように思う。小林俊子(「宮沢賢治の文語詩における風の意味 第2章

その2」 <http://cc9.easmyweb.jp/member/michia/> 平成二十五年六月十八日)も指摘する通り、「五十篇」の「さき立つ名譽村長は」にも「名譽村長」として登場し、そのモデルであると思われる湯口村の阿部晃である。阿部については佐藤隆房(「阿部晃先生という人(1)」)『新版 宮沢賢治 素顔のわが友』平成八年三月 桜地人館)が、「堂々たる体躯、広い天庭(額のこと)、秀でた鼻、強い顴骨、炯々たる眼、赭顔に白髯を靡かせ、談論は風を発し、侃々諤々の主張を述べて褒貶を意としません。そしてまた優れた逸話の持主です」と書いていることから、「憎悪にきたえし瞳」にふさわしいように思える。「岩手毎日新聞」の大正十三年六月十五日にも、「湯口村長を排斥／消防組織に關連して／村民大会を開く」といった記事が掲載されている。六月十八日には「湯口村民大会」の記事が載り、二十四日になると村民の要求を受け入れるどころか、暴言を吐いたとして「阿部村長に／辞職勧告の決議」。しかし、七月七日には「仮令勅令でも俺は承知が出来ぬ」と阿部は強弁したと報道され、七月十七日になって、ようやく一

段落したと報じられている。息子で岩手県知事にもなった阿部千一は、自分が県庁に来たときは頑固者だと言われていたが、父を知る人たちは「あの親父よりはいいよ」と言われたという(阿部千一「幼年・学生時代」『回花仙史随談』岩手放送株式会社昭和三十三年九月)。

モデルについて長々と論じてしまったが、湯口村の村長であったにしろ湯本村の村長であったにしろ、村の権力者であったことに違いはない。「正確なる時計は蓋し巨きく／憎悪もて鍛へられたるその瞳は強し」という詩句から、本作において村長を称賛する思いが窺いにくいことが確認できれば十分だろう。

では、その名譽村長と耕者のやり取りが、なぜ電気工夫に置き換えられたのだろうか。島田(後掲)は、電気工夫が農村出身の下層労働者であり、電気工夫としての誇りや余裕といったものを喪失した存在だとし、「彼が身につけている「直き時計」は、労働の要件である時間の束縛そのものを象徴するとみえ、「憎に鍛えし瞳」とは、労働環境の酷薄さ(労働条件、生活の貧しさや差別的な人間関係など)に対する抵抗の現われだ、ともみえる」とした。たしかに電気工夫を登場させたことにより、名譽村長と耕者を登場させなくても近代化と農村を対立的に描くことの説明はつきそう。しかし、彼が持っていた時計というのは、果して島田のいうような「時間の束縛そのものを象徴する」ものだったのだろうか。

工夫が電柱によじ登っていた時にも、時計を身につけていることが確認できたのだとすれば、腕時計であったとするのが自然だろう。腕時計の普及について、大正十四年十二月六日の読売新聞には、「今から三四年前までは下げる風のいはゆる懐中時計が多かった」が、「それが今日は最も控目の奥さんさへ平気で腕時計をあらはにつけるやうになり、懐中時計は一割前後になり、残り九割は腕時計となるに至った」とある。

服部時計店(現・セイコーウォッチ株式会社)のカタログによ

れば、大正十三年発売の「パリス形七石入アンクル」の値段は次のようなものであったという (TIMEKEEPER 古時計どつとコム http://www.kodokei.com/www_012_1.html)。

プラチナ側	金七十九円
十八金二号厚側	金二十二円
同A号薄側	金二十円
銀側	金十六円五十銭
ニッケル側	金十六円
銀側コイン形	金十六円五十銭
ニッケル側ビサウ形	金十六円
同カスケツト側	金十六円

『物価の文化史事典』によれば、大正末年の東京の公立小学校教員の初任給が四十〜五十円の時代だから、プラチナ側や金側でなくても、腕時計は月収の半分ほどの金額だったことになり、かなり高価なものであったということになる。

童話「耕耘部の時計」(大正十二年頃)では、農場の柱時計が一日のうちに進んだり遅れたりするのを怪訝に思った新入りの農夫が、しきりと自分の腕時計を気にする様子が描かれている。伊藤眞一郎(「耕耘部の時計」 「国文学 解釈と教材の研究 宮沢賢治の全童話を読む 48・3」学燈社 平成十五年二月)によれば、彼は舞台となった近代的農場である小岩井農場にふさわしい自由な近代的労働者であり、「△郷国▽も前任地の△六原▽も△陰気でないやだから▽という理由で離れ、△腕時計▽を携え△赤シャツ▽を着込んで」いる存在で、仲間たちからは、何度も時計を眺めたり、ゆるんだ時計の針を直したりすることから、「あいつは仲々気取ってるな」、「汝、時計屋にみたな」などと囁かれる存在であった。都会であれば九割の人が身につけるようになった腕時計だが、農村では、まだまだ縁遠い存在だったのだろう。つまり、この電

気工夫とは、きわめてハイカラな目立った存在であり、時に羨望の対象となり、また批判の対象ともなるような人物であったことになる。

それでは、電気工夫とは、当時、どのような存在だったのだろうか。昭和二年版の『労働統計要覧』(「賃金」 内閣統計局 昭和二年三月)によると、「大正十三年十月十日第一回労働者統計実地調査に依る工場労働者数百三十二万六千二百八十九人の一人一日平均賃金は一円四十四銭」であったとのことで、工場労働者の産業種ごとの賃金は次のようであったという。

機械器具製造業	二円四十五銭
瓦斯電気及天然力利用に関する業	二円四十一銭
皮革、骨、角、甲、羽毛品類製造業	二円三十七銭
金属工業	二円三十四銭
製版印刷製本業	二円十三銭
土木建設業	一円九十七銭
木竹に関する業	一円八十銭
窯業	一円七十三銭
学芸娯楽粗食品製造	一円六十七銭
化学工業	一円五十九銭
紙工業	一円四十五銭
飲食品嗜好品製造業	一円四十四銭
被服身の廻り品製造業	一円四十二銭
繊維工業	九十七銭

電気工夫そのものの賃金ではないが、同じ労働者であっても電気に関連する会社の賃金が高かったことが予想できよう。

ところで、賢治は『春と修羅(第一集)』に「電気工夫」という作品を残し、「詩ノート」の「二〇〇二」「氷のかげらが」一九二七、二、一八、」や『新校本全集5』に収められた口語詩「(もう

「二三べん」、童話「種山ヶ原」にも電気工夫を登場させている。ことに重要だと思うのは「もう二三べん」である。というのも『新校本全集5』所収の口語詩は、文語詩化される場合が多く、「一百篇」だけに限っても、「夜」「医院」「けむりは時に丘丘の」「山躑躅」「日本球根商會が」などがあり、この口語詩の延長線上に文語詩「電気工夫」が誕生したと考えることも可能だからだ。少し長いが、引用してみよう。

おれは甲助をにらみつけなければならん
山の雪から風のびーびー吹くなかに

部落総出の布令を出し

杉だの栗だのこちやまぜに伐つて

水路のへりの楊に二本

林のかげの崖べり添ひに三本

立てなくてもいゝ電柱を立て

点けなくてもいゝあかりをつけて

そしてこんどは電気工夫の慰労をかね

落成式をやるといふ

林のなかで呑むといふ

幹部ばかりで呑むといふ

おれも幹部のうちだといふ

なにを！ おれはきさまらのやうな

一日一ぱいかたまつてのろのろ歩いて

この穴はまだ浅いのこの柱はまがつてゐるの

さも大切な役目をしてゐるふりをして

骨を折るのをごまかすやうな

そんな仲間でないんだぞ

今頃煤けた一文字などを大事にかぶり

繭買ひみたいないな白いずぼんをだぶだぶはいて

林のなかで火をたいてゐる醜悪の甲助

断じてあすこまで出掛けて行って

もいちどにらみつけなければならん

けれどもにらみつけるのもいゝけれども

雨をふくんだ冷い風で

なかなか眼が痛いのである

しかも甲助はさつきから

しきりにおれの機嫌をとる

にらみつければわざとその眼をしょぼしょぼさせる

そのまた鼻がどういふわけか黒いのだ

事によつたらおれのかういふ憤懣は

根底にある労働に対する嫌悪と

村へ来てからからだの工合の悪いこと

それをどこへも帰するところがないために

たまたま甲助電気会社の意を受けて

かういふ仕事を企んだのに

みな取り纏めてなすりつける

過飽和である水蒸気が

小さな塵を足場にして

雨ともなるの類かもしれない

さう考へれば柱にしても

全く不要といふでもない

現にはじめておれがこゝらへ来た時は

ぜんたいこゝに電燈一つないといふのは

何たることかと考へた

とにかく人をにらむのも

かう風が寒くて

おまけに青く辛い煙が

甲助の手許からまつ甲吹いてゐては

なかなか容易なことでない

酒は二升到豆腐は五丁

皿と醤油と箸をうちからもつてきたのは
林の前の久治である

樺はばらばらと黄の葉を飛ばし

杉は茶いろの葉をおとす

六人も来た工夫のうちで

たゞ一人だけ人質のやう

青い煙にあたつてゐる

ほかの工夫や監督は

知らないふりして帰してしまひ

うろろしてゐて遅れたのを

工夫慰勞の名義の手前

標本的に生け捕つて

甲助が火を、

しきりに燃してねぎらへば

赤線入りのしゃつぽの下に

灰いろをした白髪がのびて

のどぼねばかり無暗に高く

きうくつさうに座つてゐる

風が西から吹いて吹いて

杉の木はゆれ樺の赤葉はばらばら落ちる

おれもとにかくそつちへ行かう

とは云へ酒も豆腐も受けず

たゞもうたき火に手をかざして

目力をつくして甲助をにらみ

了つてたゞちに去るのである

ここでは、電気工夫が「立てなくてもいい電柱を立て／点けなくともいいあかりをつけて」、落成式で酒を飲もうとする存在だとして批判されている。つまり、島田がいう電気工夫観とは全く逆の存在として電気工夫が登場している。伊藤眞一郎は「耕耘部の

時計」を、自由な近代的労働者の物語であるとしたが、高級品だった腕時計をつけている本作における電気工夫も、必要な仕事をしつては、不必要な出費をする自由な近代的労働者だとして登場している可能性は高い。

ところで、「もう二三べん」が興味深いのは、電気工夫の「ことを書いていたはずの「憎に鍛えし瞳は強し」が、「おれ」、つまり賢治自身が「甲助」をにらみつける恨みのこもつた眼のことであったとも考えられそうなことである。甲助を批判する自分自身の眼が、いつしか電気工夫の眼に置き換わつた可能性も考えておきたい。

話を元に戻そう。大正末年から昭和初年にかけての電気工夫は、農村の疲弊により、やむなく工夫となつたという気の毒な存在であつたという側面もあるにせよ、高い賃金を得て、必要のない仕事によつてあぶく銭を手に入れ、高価な腕時計を買い、しかし、自分の仕事に愛着を持たず、不平不満ばかりを言うような人間だつたとも解釈できる。当初は村の権力者たる名誉村長を批判的に見る内容であつたが、文語詩において、賢治は新しいタイプの悪ともいふべき電気工夫に批判の矛先を向けることにしたということになりそうである。

しかし、作品全体としては電気工夫批判で終わらせていないことを忘れてはなるまい。電気工夫が電柱に登つたことから、農村風景が遙か先まで見渡すことができ、そこで展開された風景こそ賢治は描くつもりであつたのだと思われる。近代化による新しい自然美の発見である。

賢治は「一百篇」の「「かれ草の雪とけたれば」」で、「人民の敵」ともされた税務吏、馬喰、三百代言を登場させ、彼らが壮大な雪解け水の風景を見て恍惚としている様子を描いているが、ここにも通じるものがあるように思う。

賢治はこの壮大な景色を彷彿とさせようと、辛夷の花、罍子の音、艸火の音と匂い：と、五感に訴えながら読者に伝えようと

しているのだが、残念ながら現代の読者には、一読しただけではなかなかイメージの湧きにくいものになってしまっているようだ。

先行研究

水上勲「宮沢賢治文語詩に関する二、三の問題」(『帝塚山大学人文科学部紀要1』 帝塚山大学人文科学部 平成十一年十一月)
黒塚洋子「電気工夫」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』 柏プラーノ 平成十二年九月)

吉本隆明「再び宮沢賢治の系譜について」(『初期ノート』 光文社 平成十八年七月)

島田隆輔「命名の意図 文語詩稿「電気工夫」生成の一面」(『論 攷宮沢賢治10』 中四国宮沢賢治研究会 平成二十四年一月)

85 「すゝきすがるゝ丘なみを」

すゝきすがるゝ丘なみを、
窪てふ窪はたちまちに、
古きミネルヴァ神殿の、
ゲートルきりと頬かむりの、
萱のつぼけを負ひやめて、

にはかにわたる南かぜ、
つめたき渦を噴きあげて、
廃址のさまをなしたれば、
闘士嘉吉もしばらくは、
面あやしく立ちにけり。

大意

ススキが末枯れている丘々に、急に南風が吹いてくると、窪という窪はたちまちに、たまっていた冷たい空気を渦のように巻きあげて、
古代のミネルヴァ神殿の、廃墟のような様子になったので、ゲートルをきりりと巻いて頬かむりをした、闘士の嘉吉もしばらくは、
萱の束を背中からおろし、不思議そうな顔をして立ち尽くした。

モチーフ

ススキの丘を急に南風が吹いてくると、空気が舞い上がってススキがまるでミネルヴァ神殿の柱のように見えたことを「事件」(先行作品のタイトル)として描いた作品。解釈の上で難解な点はないが、口語詩の段階ではただの農夫であったのが、文語詩になると「戦士」や「闘士」と書かれるようになっていく。戦争の影が少しずつ迫っていることを意味するのかもしれない。

語注

すがるゝ 「末枯れる」「闕れる」とも書き、盛りを過ぎてしおれること。

ミネルヴァ神殿 ミネルヴァは、古代ローマの知恵・工芸・芸術・戦術の女神。この女神を祀った神殿がアッシジにあるサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会。紀元前一世紀に建てられたとされ、三角形の切妻型の壁を六本のコリント式の柱頭と台座が支えている。教会の名前は「ミネルヴァの上の聖マリア教会」の意味。

ゲートルきりと 脚を保護し、行動しやすいように足の甲から膝近くまで巻いた布製品。日本でも古くから使われ、脚絆と呼ばれたが、扱いやすさから西洋式の巻脚絆が多く使われるようになった。盛岡中学在学中、賢治もゲートルを巻かされたが、同級だった葛精一(『幼少年時代盛岡中学校時代』『宮沢賢治とその周辺』川原仁左エ門 昭和四十七年五月)は、「ゲートル巻きも下手で手こずりよく笑っていた」と書いている。「きりと」はゲートルをきりりと巻いたの意。

萱のつぼけ 『定本語彙辞典』や赤田秀子(後掲)、三上敬子(後掲)のいずれも、「屋根を葺くための萱を刈って、幾束かを末広がりに寄せて立てておくもの」(三上より引用)とする。

評釈

黄野(240行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(タイトルは「奇異」。藍インクで①)、黄野(240行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(二)、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。先行作品は『新校本全集5』所収の口語詩「事件」。先行作品の口語詩「事件」から見てみたい。

Sakkyā の雪が 澱んでひかり
野はらでは松がねむくて
鳥も飛ばないひるすぎのこと

いきなり丘の枯草を
南の風が渡って行った
すると窪地に澱んでみた
つめたい空気の界面に
たくさん渦が柱に立って
さながらミネルヴァ神殿の
廃址のやうになつたので
窪みのへりでゲートルもはき
頬かむりもした幸蔵が
萱のつぼけをとる手をやめて
おかしな顔でぼんやり立った

制作年次はわからないが、一読して「事件」の内容がわかり、
楽しめる作品になっている。幸蔵と第三者を登場させているが、
驚き立ちすくんだのは、おそらく賢治であっただろう。羅須地人
協会時代の作品だと思われる。

「Sakkyā」は、『新語彙辞典』で意味不明としながら、「昨夜の
雪が」というところを、釈迦または釈迦の属していた部族、釈迦
族を意味するサンスクリットの Śākya、パーリ語の Sākya¹音
が近似するので、わざとそれらしく横文字にしたのではあるまい

か」という(『定本語彙辞典』では、「さつくやのゆき。意味不
明。」とのみある)。

赤田秀子(後掲)は、「文語化されたことでユーモラスな雰囲気
がなにやら重々しくなってしまった。だが、自然現象の不思議さ
に出会ったとき、人が心奪われる一瞬を鮮やかに捉えている」と
するが、その通りだろう。「五十篇」の「川しろじろとまじはり
て」には、「蒼茫として夏の風、草のみどりをひるがへし、
ちらばる蘆のひら吹きて、あやしき文字を織りなしぬ」とあつ
たが、これも同じような現象を書いたものである。

口語詩では「頬かむりもした幸蔵が」であつたのが、文語詩化
されると「さすがの戦士幸蔵も」(下書稿(一))となり、以降は「闘
士嘉吉」となっている。戦士や闘士が出てきたのは、三上敬子
(後掲)の言うように、「ゲートルをきりりとまいた農夫が、古い
ローマ時代観客の前で闘士として闘った人物のように見える」か
らかもしれないが、ここで「ゲートル」の言葉を使っていること
について考えてみたい。

『新校本全集』の索引によれば、「ゲートル」の使用例は本作と
先行作品の「事件」、「春と修羅第二集」の「三三三 遠足統率 一
九二五、五、二五」、「しかないのに比べて」、「脚絆」の使用例は
「春と修羅第二集」の「七五 北上山地の春 一九二四、四、二
〇」、「五十篇」の「麻打」の下書稿、童話「種山ヶ原」、童話
「耕耘部の仕事」、童話「ポランの広場」などがあり、日本風の脚
絆の方が使用例が豊富なことがわかる。おなじく日本風の「はば
き」の用例が二例、「はむばき」も四例あつた。

『日本大百科全書』で「ゲートル」を調べてみると、「昭和初期、
軍事教練が中学や大学で行われるようになって普及し、満州事変
(1931〜32)後は一般家庭にも普及、男子の生活必需品となつた」
とある。軍事教練は、大正十四年四月に陸軍現役将校学校配属令
が公布されて即日施行されたが、これによって中学校以上の学校
に現役将校が配属されて教練が行われるようになった。また、大

正十五年には青年訓練所令が公布されて、小学校を卒業した青年を対象にした訓練が青年訓練所で行われるようになっていく。「萱のつぼけ」を持っていることから、嘉吉は農民だと思われるが、賢治のように中学校で訓練を受けたわけではなく、青年訓練所で訓練を受けたために、普段の農作業からゲートルを履くようになったのだと思う。

賢治が「闘士嘉吉」と書いたのは、おそらくユーモアのつもりで、特に時代の風潮を批判するつもりはなかったように思うが、『定本語彙辞典』には「活動家のこと」とあったが、これはさすがに深読み過ぎるか？、戦争への準備が着々と進められていた昭和初期の農村を、はしなくも描いてしまったのではないかと思う。

先行研究

赤田秀子「「かれ草の雪とけたれば」を中心に」（『ワルトラワラ 15』ワルトラワラの会 平成十三年十一月）
三上敬子「「すゝきすがるゝ丘なみを」（『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』柏プラーノ 平成十四年七月）

86 「乾かぬ赤きチョークもて」

- ① 乾かぬ赤きチョークもて、
いらかを覆ふ黒雲を、
文を抹して教頭は、
めがねうつろに息づきぬ。
- ② さびしきすさびするゆゑに、
そらの輻射の六月を、
ぬかほの青き善吉ら、
声なく惨と仰ぎたれ。

大意

まだ乾いていない赤いチョークで、
教頭が英文に線を引いて抹

消すると、
窓外の瓦屋根の上を覆っている黒雲が、
眼鏡をぼんやりと息づかせる。

教頭のさびしい行為をきっかけに、
額をほの青くさせた善吉たちは、
太陽の光が雲を通して輻射してくるこの六月に、
声もなく悲惨な黒板の様子を仰ぎみていた。

モチーフ

盛岡中学在学中の賢治が体験した一コマ。善吉が黒板に英文を書くとき、教頭はそれを乾かない赤のチョークでスッパリと抹消した。賢治はそれを黒板が傷つけられたように感じたようだ。本作に先行する短歌には「黒板は赤き傷受け雲垂れてうすくらき日をすすり泣くなり。」とあるが、賢治は黒板のすすり泣きを聞いた気がしたのでろう。黒板が泣くはずがないことは賢治にもわかるが、そのように思えてしまったという心的な事件をこそ書いているのだらう。文語詩では歌稿の生々しさが消えているが、自らの文学的出発期の経験について書き残しておきたかったのだと思う。

語注

乾かぬ赤きチョークもて 「濡れた手や濡れたチョークで黒板を使用すると、クレヨンで描いているようになり、チョークの粉が黒板表面の凹凸に入り込み、目詰まりを起こしたり、黒板表面を研磨することにもなります」（いわま黒板製作所 <http://www.iwanakokuban.co.jp/>）という。チョークが濡れていたのは、窓外には黒雲が拡がる六月であることから、湿気や雨漏りによるものだったかもしれないが、生徒のいたずらによるものだったのかもしれない。賢治は「ぬれし赤きチョークにて」（下書稿（一）、「チョークのインクなほぬれて」（下書稿（二）、「あはれ乾か

ぬ赤チヨーク」(下書稿③)、「乾かぬ赤きチヨークもて」(下書稿④)、「乾かぬ赤きチヨークもて」(定稿)というように、水分を含んでいたことに執着している。赤色であるために黒板の板面が血糊のようになったのかもしれないし、黒板の表面がはがれ、そこに血がにじんだように見えたのかもしれない。

教頭 盛岡中学校で英語を担当していた米原弘のこと。小川達雄

(後掲)の著書を元に記述すれば、明治十年に生まれ、明治二十三年に島根県尋常中学校(同年九月からラフカディオ・ハーンが赴任)に入学し、明治二十八年に熊本第五高校に進学(翌年に夏目漱石が赴任)。東京帝国大学文学科に進学して英文学を修め、卒業後は宮城県第一中学に赴任。ついで明治三十七年十月に盛岡中学に赴任してきた。同校では教頭を務め、大正九年に弘前高校教授となつて盛岡を去つてゐる。

さびしきさび 生徒がさびしきさび(いたずら)をしたのではなく、教頭の行為をそう表現しているのだろう。
輻射 中央から周囲に向けて、車の輻のように光や電磁波、熱などを放出すること。太陽の光が雲に遮られながらも感じられる様子を書いているのだろう。

評釈

「歌稿〔B〕」32への書き込みが下書稿(一)、黄野(220行)詩稿用紙に書かれた下書稿(二)(赤インクで①)、その裏面下部に書かれた下書稿(三)、その上部に書かれた下書稿(四)、定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存。生前発表なし。

まず、先行作品である「歌稿〔B〕」32と32^a33をあげよう。

32 黒板は赤き傷受け雲垂れてうすくらき日をすすり泣くなり。
32^a33 この学士英語はとあれあやつれどかゝるなめげのしわざもぞする。

「歌稿〔B〕」では「明治四十四年一月より」の章に収録されていることから盛岡中学校二年の三学期以降の歌だということになるが、「歌稿〔A〕」を見ると「四十五年四月」の章に含まれていることから、これらを信じれば、盛岡中学校四年の一学期以降の作歌だということになる。

中学三年の時に、賢治と寮の同室だった宮沢嘉助(「賢さんの思い出」)「宮沢賢治全集9 月報4」筑摩書房 昭和三十一年七月)は、「賢さんは学校の成績はあまりよくなかった。というより寧ろ悪かつた様に思う。悪い筈だ、賢さんは学校の教科書などは殆ど勉強しなかつた」と書いており、そうした時期の歌だと思われる。この頃の賢治は、どうせ自分には家業を継ぐ以外の選択肢がないものと思つて、学校や教師に対する反抗心も高まり、四年の三学期には寮の舎監排斥運動に加担し(首謀者であつたともいう)、退寮を命じられてもいる。

「歌稿〔B〕」の欄外には、「32^a33」と同じ鉛筆で次のように書かれ、『新校本全集』では、これを下書稿(一)としている。

◎教頭黒板を截る

このくらき
雲垂れし日を
いかなればとて
さはぬれて赤きチヨークに
黒板を傷つくるや。

下書稿(二)では、作品の背景がいつそう明らかになる。

南の紺の地平より
雲怪しき縞なして
川三つどふこの市の
幾冬のタール黄に染めし

館にひくくたれこめぬ

一人壇にそびらして

短き英の文書けば

教頭は今日額おもく

頬あほじろく見まもりぬ

生徒礼して下り来れば

教頭赤のチョークして

一線描けばあなあやし

チョークのインクなほぬれて

をぞにまくろきボールドは

まあかき傷を受けにつゝ

たゞ漱々となきしかば

生徒ら惨と見まもりぬ

手入れ段階に「白聖の館」とあることから、「白聖城」の異名のある盛岡中学校が舞台であったことがはっきりする。教頭が担当する英語の授業中に、一人の生徒に短い英文を黒板に書かせた（「そびらして」は背を向けさせて、の意だろう）。生徒が礼をして降壇すると、教頭は水分を含んだ赤チョークで抹消したため、黒板は赤い傷を受けてすすり泣いているように見え、生徒たちはその悲惨な様子を見守った、という意味だろう。

盛岡中学校で英語を担当していた米原弘は、「盛中の名教頭として今に伝はる二先生は瀬戸虎記氏と米原弘氏である瀬戸先生は威力で生徒を畏服したが之に反し米原氏は学識で生徒を敬服せしめた」（「岩手日報」昭和五年五月十三日）と言われ、また、盛岡中学から第二高等学校を経て東大に進学し、鉾山学で東大の教授となった俳人・山口青邨も、「それから米原という英語の先生です。

できるんだ、特に英文法は得意なんだ―その先生で英文がわかるようになったな―。」「真面目なよい先生でしたね。忘れませんね」（「良き師そして良き友 座談会・明治期の思い出」『白聖校九十年史』盛岡一高創立90周年記念事業推進委員会 昭和四十五年十月）と語られるような教師であったようだ。

その一方、「この先生はひどく英語の出来る先生だとかねがね先輩から聞いてみた。／英語がひどく出来る関係か、先生の日本語までも英語みたいに聞えてサツパリ判らなかつたそれにひどく早口なので猶のこと判りにくかつた。英語のつもりでポカンとして聞いてるとそれが日本語だつたり、またその逆だつたりした。この先生の笑つた顔を滅多に見たことがない」と語る高橋康文（盛岡高等農林学校教授）のような生徒もいた（「新岩手日報」昭和十五年五月十二日）。

賢治と同級だった葛精一（「賢治の彫刻」『宮沢賢治とその周辺』川原仁左エ門 昭和四十七年五月）は、

私が中学四年の時、賢治さんは隣りの席であつた。英語の米原文学士の授業の時に、リーダーを立て、ナイフで一生懸命に自分の机に岩手山を彫つていて、先生に講読をあてられて、まごついて私に聞いた事があつた。それが英語の時間が済んでも、次の数学の時間も続けて彫つていた。斯様に熱中する性質があつた。

と書いているから、賢治は米原に親しめない方だったのだろう。

さて、黒板の前で英文を書かされた生徒は、下書稿(四)と定稿で「善吉」という名になつている。研究者の宮沢賢治（後掲）や小川達雄（後掲）は、これを賢治と同年だった駒井善吉であるとしているが、「歌稿（B）」の「明治四十四年一月より」（中学二年三学期より）を信じると「六月」という季節が合わない。「歌稿（A）」の「四十五年四月」（中学四年一学期）なら、季節は合う

が、善吉が同じクラスであった保証がない（駒井善吉は原級留置か退学したため、賢治と同時に卒業してはいない）。が、文語詩定稿では、人名などの固有名詞がそのまま使われることがあまりないことから、実在のモデル探しにとらわれすぎてはいけないように思う。これは虚構化された一生徒、あるいは賢治自身のことであると思う。

小川によれば、教頭は授業中に「さびしきすさび」（小川によれば内職）をしていた「善吉」に英文を書くように指示するが、その内容から赤いチョークで英文を抹消され、友情に篤い賢治としては、心無い教頭の振る舞いによつて、友人と黒板が赤い傷を付けられたと感じたのではないか、という。

研究者の宮沢賢治（後掲）も、善吉が「さびしきすさび」をしたと解釈しており、下書稿(四)の下の余白に「病妻」とあることから、「教頭の逆鱗にふれるような英語の文をそこに書いたのである。おそらくは教師の一人上の内面を曝露するような事柄であったのだろう」とし、また、「あらかじめ、チョークを濡らしておいたとか先生自体を濡らしたといったたぐいのいたずら」をしたのかもかもしれないとも書いている。

島田（後掲）の調査によれば、大正二年の「岩手毎日新聞」に盛岡中学校の学校評判記が連載され、その第三（十月二十六日）・四回（十月二十八日）は上下分載で米原弘を扱っていたという。そこには「服は夏冬各一着の外見たことがない、そして昼飯も食はんで青くなつてお居になる」「問題の起りは先生の妻だ、彼女は吝な奴で最愛の夫にすら昼飯をも与へぬし服も一着の外呉れぬ」と書かれている。また、その理由として、「米原さんはそれ程貧でもなかつたが大学を卒業するには充分ではなかつた」「折柄、当時貞淑振る一人の芸者が某所にあつて妾が学資を出さんと英文ではなかつたがすなりと書いた長文が先生の宿に舞込んだ、先生は飲んで直ちに快諾した」「斯うして目出度優等で赤門を卒業したんだからいや応なしに其貞淑がる奴を妻に迎へた其れだから我儘

が出来ぬも無理がない」とあつた。歌稿の日付けよりも後だが、賢治も在学中の報道である。こうした噂は中学校内ではすでに囁かれており、それをちやかす生徒もいたかもしれない。

こう考えてみると、生徒が先生に「さびしきすさび」をしたと解釈することは十分に可能であるように思える。しかし、下書稿を見ても、生徒が「さびしきすさび」をしたと思えるような様子は見当たらない。それどころか、下書稿では、生徒は一礼して降壇するくらいに礼を尽くしている。もしも生徒が悪事を働いたために米原教頭が荒々しく黒板に赤線を引いたのであれば、いくら賢治が英語の授業や米原に反感を持っていたとしても、全面的に生徒に肩入れするような記述はできなかっただろう。

さらに、定稿では「善吉ら」と複数になっているのも気になるところだ。たしかに下書稿段階では、「一人壇にそびらして」（下書稿(二)、あるいは「ひとりの生徒ポールドに／短き英の文書きて」（下書稿(三)）とあつたが、定稿では、生徒が指名されたということさえ書かれていない。生徒が指名もされていない状態で「善吉ら」、つまりクラス全員が「声なく惨と仰」いだのだとすれば、先生が「さびしきすさび」をしたのだと解する方が自然であると思う。

32・33 この学士英語はとあれあやつれどかゝるなめげのしわざもぞする。

「歌稿〔B〕」に戻れば、この「なめげのしわざ」こそ「さびしきすさび」であり、それは米原教頭が黒板に傷をつけた行為を指しているようにしか思えないのだが如何であろうか。

さて、島田（後掲）は、米原が盛岡中学を去つて後、大正十三年には高知高校に転任し、そこで盛岡中学時代の賢治の同級生であった阿部孝と同僚になったことも発掘している。

阿部（「賢治と私」『ばら色のばら』高知新聞社 昭和四十年

八月)は、「賢治と私の間に、手紙の往復が一番ひんぱんだった時代は、だいたい大正三、四年から昭和三、四年までの間」だったとしていることから、米原が同僚になったこと、米原の妻が死去したこと(『高知高知あゝ我母校 旧制高知高等学校五十年史』に記述があるという)などについて、阿部は賢治に報告しているはずだし、そうした情報から下書稿(四)の余白に「病妻」のメモを書いたのだろうという。そして島田は、本作を中学校時代の生徒たちのいたずらに對して、病める妻を持ちながら教壇に立っていた米原の気持ちを思い起そうとしたものだという。

たしかに「病妻」のメモからすると、米原を攻撃するより、相手の立場を組み取ろうとした思いがあったことは確かのように思うが、「歌稿〔B〕」に「32^a 33」この学士英語はとあれあやつれどかゝるなめげのしわざもぞする。」という短歌を書きこんだのは、島田も書いているように昭和四、五年頃であり、すでに阿部から米原の情報を得た後である。この段階で米原を「この学士」呼ばわりをし、「英語はとかくあやつれど」「なめげのしわざもぞする」と批判的な言葉を書いた賢治が、その後、特に米原と接触したという事実もないのに、下書稿(四)にメモする段階になると態度を改めていたというのは考えにくい。

さて、細かな詮索を続けてきたが、賢治がこだわっているのは、生徒が悪いか教師が悪いかということではなく、濡れた赤いチョークが黒板に傷を負ってすすり泣いているように感じられたという心象上の一事件の方であつたと思う。

先に「序論 宮沢賢治の手ざわり 文字から声へ」(信時哲郎『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』朝文社 平成二十二年十二月)で、賢治の創作の原点である短歌には、次のような不思議な表現を含むものがあると書いた。

26 白きそらは一すぢごとになが髪を引くこゝちにてせまり来りぬ

- 32 黒板は赤き傷受け雲垂れてうすくらき日をすゝりなくなり
59 ブリキ鐘がはらだゝしげにわれをにらむつめたき冬の夕暮のこと
68 われ口を曲げ鼻をうごかせば西ぞらの黄金の一つ目はいかり立つなり
69 西ぞらのきんの一つ目うらめしくわれをながめてつとじむなり
79 うしろよりにらむものありうしろよりわれらをにらむ青きものあり
94 ちばしれるゆみはりの月わが窓にまよなかきたりて口をゆがむる

いずれも、本来ならば生命を持たないはずのものたちが、命を吹き込まれて、賢治に迫ってくる様子を描いたものばかりだ。その中に、本作の先行作品である「32」も含まれている。賢治でなくとも、レトリックとしてこうした方法を使うことはあるが、どうも賢治の場合はそういうものではなく、あらゆるものが生氣に満ち溢れ、自分に向かって迫ってくるように感じられたり、動植物と会話ができるように感じられることが起こりやすいという持前の感覚がそう思わせていたように思える。福島章(『狂気と創造性』『機械じかけの葦 過剰適応の病理』朝日出版 昭和五六年二月)によれば、次のような状況である。

有情体験は、離人体験と反対の状態で、自分と対象の距離が非常に近くなる状態です。見るもの聞くものすべてが、生き生きと生命をもつもののように感じられます。太陽、月、星、石、山など、本来は生命をもっていないはずのものが、あたかも生命をもっているかのように、自分に語りかけ、笑いかけ、あるいは怒り脅かす存在として感じられるのです。木や草などのように、生命はもっているが、本来は心がない存在も、自分の感

情を表現したり、話しかけてきたり、人間の喜怒哀楽に共感したりすると感じます。

賢治はものが命を吹き込まれたように思える瞬間を目ざとく感じ、それを世界が本当の姿を見せたとして文章に定着させたかったのだろう。

童話「どんぐりと山猫」でも、賢治は「まはりの山は、みんなたつたいまできたばかりのやうにうるうるもりあがつて、まつ青なそらのしたにならんでゐました」と、周囲の山が、たつたいま生れたばかりであるはずがないことを百も承知した上で書いているし、童話「鹿踊りのはじまり」において、「わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてゐた風が、だんだん人の言葉にきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行はれてゐた鹿踊りのほんたうの精神を語りました」と書き始め、「それからさうさう、苔の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすきとほつた秋の風から聞いたのです」として締めくくつたのも、レトリックであるというよりは、持ち前の感覚がさせたのだと思う。賢治はこうして多くの恐怖を感じ、また、多くの喜びや一体感を感じ取ってはそれらを書き続け、それを「ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたままです」「〔序〕 『注文の多い料理店』」として発表したのだからと思う。

賢治が、傷を受けた黒板がすすり泣いているように感じたのは、友情に起因するところもあったかもしれないし、教頭に対する嫌悪感、また、「雲垂れてうすくらき日」であつたことも関係したかもしれない。しかし、そうした分析も判断も行われる前に、見えてしまったもの、感じてしまったことをできるだけ忠実に記述したというのがこの短歌なのだと思う。

ただ、こうした表現が後年の作品から見えにくくなっているのも事実である。本文語詩についても、短歌ほどには当初のインパ

クトがうまく再現できているとは思えないのだが、やはり賢治は晩年になつても賢治であり、自分の文学的出発の記憶について、書き付けないわけにはいかなかったのではにかと思つたのである。

先行研究

宮沢賢治「赤い傷をうけた黒板をめぐつて 歌稿32の意味するもの」(『宮沢賢治12』 洋々社 平成五年二月)
宮沢健太郎「文語詩稿一百篇」(『国文学 解釈と鑑賞65-2』 至文堂 平成十二年二月)
小川達雄「黒板の傷」(『盛岡中学生宮沢賢治』 河出書房新社 平成十六年二月)
小林俊子「詩歌」(『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』 勉強出版 平成二十三年八月十日)
島田隆輔「八米原弘Vの肖像／「乾かぬ赤きシヨークもて」稿の生成」(宮沢賢治文語詩研究会資料 平成二十七年八月)

87 「腐植土のぬかるみよりの照り返し」

①腐植土のぬかるみよりの照り返し、 材木の上のちいさき露店。

②腐植土のぬかるみよりの照り返しに、 二銭の鏡あまたならべぬ。

③腐植土のぬかるみよりの照り返しに、 すがめの子一人りんと立ちたり。

④よく掃除せしラムプをもちて腐植土の、 ぬかるみを駆夫大

股に行く。

⑤風ふきて広場広場のたまり水、
いちめんゆれてさざめきに
けり。

⑥こはいかに赤きずぼんに毛皮など、
春木ながしの人のいち
れつ。

⑦なめげに見高らかに云ひ木流しら、
鳶をかつぎて過ぎ行き
にけり。

⑧列すぎてまた風ふきてぬかり水、
白き西日にさざめきたて
り。

⑨西根よりみめよき女きたりしと、
角の宿屋に眼がひかるな
り。

⑩かつきりと額を削りしすがめの子、
しきりに立ちて栗をた
べたり。

⑪腐植土のぬかるみよりの照り返しに
二銭の鏡売るゝともな
し。

大意

腐植土のぬかるみに反射した光の中、材木の上に小さな露店があ
る。

腐植土のぬかるみに反射した光の中に、二銭だという鏡がたくさ
ん並べられている。

腐植土のぬかるみに反射した光の中に、斜視の子が一人毅然とし
て立っている。

よく磨かれたランプをもって腐植土の、ぬかるみを駅員が大股で
歩いていく。

風が吹いて駅前広場のたまり水は、いちめんゆれてさざめいて
いる。

どうしたとか赤いズボンに毛皮など、春木ながしの人々の一列
が通りかかった。

無作法で高みから物を言うような木流しの人々は、鳶口をかつい
で行き過ぎてしまった。

列が過ぎるとまた風が吹いてきてぬかるみの水は、白い西日の中
でさざめきたっている。

西根から美しい女が来たとのことで、角の宿屋で男たちが眼を光
らせている。

かつきりと額のところで髪を切った斜視の子は、立ったまままし
きりに栗を食べている。

腐植土のぬかるみに反射した光の中に、二銭の鏡が売れる気配は
まるでない。

モチーフ

比較的多くの下書稿が残っているが、内容的にはあまり大きな変
化がない。関連作品である「一百篇」所収の「市日」の評釈に書

いたように、松尾鉦山の盛況によって町が変化していくことを批判も込めながら書いたのであろう。ただ、注目すべきは「腐植土のぬかるみよりの照り返し」が何度も繰り返される十一行十一連という形式である。ミニマル音楽のステイヴ・ライヒの作品のように、同じフレーズが繰り返されているだけのようで、実は個々のフレーズが少しずつ変わっていくために、長く聞いているうちに別のフレーズが立ちあがってくるといった効果を狙った実験的な作品であったように思う。

語注

腐植土のぬかるみ 植物の葉などが腐って栄養分をたくさんたくわえた黒土（フイーマスとも言う）が水たまりになつていふこと。賢治は盛岡高等農林学校の得業論文（卒業論文）で、「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」を書いている。腐植土はリン酸を多く含んでいるが、その下にある粘土層が水を通さないために、すぐに植物が利用できる可給態とはなつておらず、土壌は農業に向かない瘦せたままなのだとした。腐食土がぬかるんでいるということは、粘土層が水を込みこませないために、水たまりとなつていつまでも水を湛えていることを言うのだから。賢治は岩手の瘦せた土壌を象徴する言葉としてこれを繰り返して使っているのであろう。

すがめ 片目、斜視、あるいは横目という意味もあるが、子どもの形容であることから斜視と捉えた。天沢退二郎（後掲）は、「この子は少女である」とし、二銭の鏡を売っているのだとすがめ、下書稿(二)には「すがめののをのこ立ちてけり」「りんと立ちたる男の子」とあることから、男の子がイメージされていたと思われる。鏡を売っていた露店と関係があったとも読めるが、駅前風景を羅列したのみで無関係であったと読みたい。

春木ながし 岡沢敏男（賢治の置き土産）七つ森から溶岩流まで
60 「盛岡タイムス <http://www.morioka-times.com> 平成二十年

六月十四日）は、本作を橋場線の橋場駅をモデルにしたのだとし、春木ながしは「御明神地方の山村民俗」を取り入れたものだとして解しているが、春になって谷川が増水した頃に、冬の間伐採した木を流し出すことの一般的な名称であり、現・花巻市の葛丸川や黒沢尻町（現・北上市）でも春木流しは行われていた。山形県米沢市田沢で木流しに従事していた古老は、「禪一丁にちゃんちゃんこ着た男たちが木場川に入って木を引き揚げでつと、周りの道路は黒山の人だかり。女性の見物客、とくに女学生が多がつたんじゃないか。まるでまつりのようににぎわいだつた。／夜になつど、木流ししている連中は居酒屋に集まつて、毎晩酒飲んでだんだ。寒い中での大変な作業だから息抜きも必要だつたんだべなあ。」（「置賜の「宝」」じつちゃんの昔語り 米沢市田沢の木流し」置賜文化フォーラム <http://office.oki-bun.jp/mukasikatari01/> 平成二十二年一月掲載）と語っていることから、地域差もあつただろうが一大イベントだったのだから。

評釈

黄野（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿(一)（藍インクで①）、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿(二)（断片）、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿(三)（鉛筆で②）、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿(四)（断片）の「こらはみな手を引き交へて」の定稿裏に書かれた定稿断片、定稿用紙に書かれた定稿の七種が現存。生前発表なし。「二百篇」所収の「市日」には同じ詩句が使われ、習字稿には両作が書かれていることなどから、『新校本全集』では「両者の間に連関があるのかもしれない」としており、どちらが先行していたかの判断はむずかしい。最初に「二百篇」の「市日」から見てみたい。

① 丹藤^{タンポ}に越ゆるみかげ尾根、
うつろひかればいと近し。

② 地藏菩薩のすがたして、
栗を食うぶる童^{わらはべ}と、
鏡欲りするその姉と。

③ 丹藤に越ゆる尾根の上に、
なまこの雲ぞうかぶなり。

また、「(冬のスケッチ)」の第二八・二九葉も関連する作品としてあげてよいように思う。

※

気圏かそけき霧のつぶを含みて
東京の二月のごとく見ゆるなり
腐植質のぬかるみを
あゆみよりしとき
停車場のガラス窓にて
わらひしものあり
又みぢかきマント着て
税務属も入り来りけり。

兄弟の馬喰にして
一人はこげ茶
一人は朝のうぐいすいろにいでたてり
ひげをひねりてかたりたり。

※

白きそらにて 電燈いま消えたり
されば腐植のぬかるみをふみて
ひとびとはたらしいでしなり。

これは「一百篇」所収の「(かれ草の雪とけたれば)」の先行作品として取り上げられているものだが、「腐植質のぬかるみを」に加え、「停車場」までが登場するとなると、やはり「腐植土のぬかるみよりの照り返し」の関連作品であったとしないわけにはいかない。何度かの経験に基づき、自分が気に入ったフレーズを繰り返したのかもしれないし、一回きりの経験をさまざまな作品で書いたのかもしれない。

さて、本作の舞台を岡沢敏男(賢治の置き土産 七つ森から溶岩流まで)盛岡タイムス 平成二十年六月七、十四、二十一、二十八日、七月五日)は、橋場線の橋場駅だとしている。が、おそらくは東北本線の好摩駅であろう。

岡沢は盛岡高等農林学校時代の同人誌アザリアの仲間たちとの徒歩旅行(通称・馬鹿旅行)の記録である「秋田街道」に、「フィーマスの土の水たまりにも象牙細工の紫がかつた月がうつりどこかで小さな羽虫がふるふ」とあることや(フィーマスは腐植土のこと)、「春木ながし」を「御明神地方の山村民俗」だとしたところからそう判断するのだが、本作および関連が深い「市日」を検討してみると、やはり好摩であったように思われる。

「春木ながし」については語注で指摘したとおりだが、腐植土について検討してみたい。

賢治は得業論文において、実験用の土壌を高等農林学校の実験農場のあった上田、同じく経済農場のあった御明神、自宅にほど近い根子村大谷地、そして好摩(賢治によれば「岩手郡渋民村好摩駅南端ノ原野ノ土壌」)の四か所から採取している。どこの土壌も腐植質が十%程度あるが排水が悪いという点で共通性が高い。高農の二つの農場、自宅近くから土壌を採取したのはともかく、なぜ好摩を選んだのかといえ、おそらくは『春と修羅(第一集)』の「小岩井農場」で「向ふの畑には白樺もある／白樺は好摩からむかふですと／いつかおれは羽田県属に言つてゐた／ここはよつほど高いから／柳沢つづきの一帯だ／やつぱり好摩にあたる

のだ」と、高度と緯度の関係から、ちょうど植生が変わる地点として記憶に残っていたからではないかと思われる。

高農時代の同人誌「アザリア6」（大正六年十二月）で、賢治は「好摩の土」というタイトルのもとで十首を発表しているが、その中には「熱滋くこゝろわびしむ、はれぞらを、好摩に土をとりに行く」とある。大正六年度とは得業論文を提出した年度であることから、この時に取った土で得業論文の実験をしたのだと思われる。橋場線沿線の御明神も、アザリアの仲間との馬鹿旅行の思い出の残る忘れがたい場所だったかもしれないが、関連作品の「市日」に登場する「丹藤」は岩手郡川口村（現・盛岡市）であり、御明神からすると、小岩井農場などを隔てたはるか向こう側となって、あまりにも遠い。

また、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」に登場する「西根」について、『定本語彙辞典』でも、本作の西根は岩手郡雫石町（橋場線沿線）にある西根を指すのだとしているが、岩手郡の西根（現・八幡平市）を指すとした方が無理がない。また、本作の下書稿(二)に「硫黄山」が登場しているが、それは東洋一の硫黄山と言われた松尾鉦山（岩手郡松尾村、現・八幡平市）を指すこととすべきだろう。岡沢（前掲）は、「硫黄山からみめよき女」が来たことを西岩手火山から来たとし、女神を暗喩しているとするが、おそらくは鉦山の人々を相手にした酌婦といった職業の女性であったろう。

もちろん描かれた場所が好摩であったと特定できたとしても、橋場線沿線の記憶、あるいは盛岡や花巻、また、その他の鉦山における記憶が混じったり、虚構が混じっている可能性は十分にある。ただ、実在の地名をそのまま取り入れていることを考えると、どうしてもその地でなければならぬ事情があった可能性についても考えておくべきだと思う。

さて、ここで「百篇」の「市日」の評釈で書いた内容を簡単に書いておきたい。「市日」に描かれているのは「丹藤」や「みか

げ尾根（姫神山）」であり、北上川の左岸（東側）である。一方、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」に描かれているのは「白き西日」や「西根」であって、北上川の右岸（西側）である。つまり両詩は、舞台をきつちり描き分けているのである。

東側を描いた「市日」では、鏡を欲しがる姉が描かれ、西側を描いた「腐植土のぬかるみよりの照り返し」では、「みめよき女」が登場しているが、こちらでは、おそらくは安っぽすぎて鏡が売れ残っている（売るゝともなし）。東洋一の硫黄鉦山があったことによつて西側は経済的な余裕があり、人々の暮らしも豊かで、それを目当てにした見目のよい女性も集まってくる。そんな女性が二銭の鏡などに見向きするはずがない、ということなのだろう。松尾鉦山は、昭和七年に鉦毒事件が表面化し、文語詩制作時の賢治は、当然これを知っていたと思われるが、聖書の創世記にあるソドムとゴモラの街が、神の怒りに触れて「硫黄の火」によつて滅ぼされたことなども、賢治の頭には浮かんできたかもしれない。

ところで、「腐植土のぬかるみよりの照り返し」の十一行十一連という文語詩の形式についても一考する必要があるだろう。というのも、この十一行が五七五七七の短歌形式であり、賢治が最晩年に至りついた文語詩の一つでありながら、中学入学後から書き始めた短歌、ことに数種の連作短歌の形式への逆戻りであるとも考えられるからだ。

平沢信一（宮沢賢治における文学の発生・序説）『宮沢賢治《遷移》の詩学』蒼丘書林 平成二十年六月）は、「歌稿〔B〕」所収の連作短歌「アンデルゼン白鳥の詩」を引いて、「もうほとんど一首一首の自立性を持たないこの連作」とし、ここに待遇法と連続反復という文体の特徴を示す。

690 「聞けよ」(s. Here, 4)

また、

- 695^a
696 青白き
ほのほは海に燃えたれど
かうかうとして
鳥はねむれり
- 695 わだつみに
ねたみは起り
青白きほのほのごとく白鳥に寄す。
- 694 ましろなる羽も融け行き
白鳥は
むれをはなれて
海にくだりぬ。 ※
- 693 おゝさかな、
そらよりかるきかゞやきの
アンデルゼンの海を行くかな。 ※
- 692 みなそこの
黒き藻はみな月光に
あやしき腕を
さしのぶるなり。 ※
- 691 海あかく
そらとけじめもあらざれば
みなそこに立つ藻もあらはなり。 ※
- 月はかたりぬ
やさしくも
アンデルゼンの月はかたりぬ。

- 696 あかつきの
琥珀ひかればしらしらと
アンデルゼンの月はしづみぬ。 ※ ※
- 697 あかつきの琥珀ひかれば白鳥の
ころろにはかにうち勇むかな。 ※
- 698 白鳥の
つばさは張られ
かゞやける琥珀のそらに
ひたのぼり行く。

一首(連)ごとの独立性が低く、前後の歌(連)から少しずつ変化させていくことよって、流れてゆく時間をコマ送りで見られるようにする手法は、他の連作短歌「青びとのながれ」などにも通じる。あるいは「疾中」詩篇の中の「病床」を思い浮かべてもよいかもしれない。

たけにぐさに
風が吹いてゐるといふことである
たけにぐさの群落にも
風が吹いてゐるといふことである

一連めと二連めの情報は、ほとんど同じである。しかし、二つの連の内容がほとんど等しいということは、読み終わった後に訪れるのであって、読んでいる最中に、そうした思いは浮かばない。

或るフレーズがある、それは起承転結をもたず、展開するほど充分な情報をもっていない。これをどうにかするとは、何か新しいものをもってきて付け足すか、故意に貧しくするために差し引きするかしない。

このフレーズはすぐにまた繰り返かえされる。間髪を入れず、繰り返かえされる。記憶しておこうと思う暇もなく、つぎつぎにやってくる。しかしそれはつぎつぎにやってくるが、累積することはない。前にあった、同じものではあるが、ひとつのフレーズを引き受け、そのうえで新たなものが出てくるのではない。それはあたかもその度ごとに新しいもの、はじめてのもののように、やってくる。聴き手は、ここで、前のフレーズを自分のなかで反復している余裕はない。つぎつぎに現前するフレーズをそのまま受け取り、そのまま対処するのみだ。何かが加わったり減ったり、変化するどこか・なにかがあった瞬間に、記憶にあるフレーズとの差異を聴きだし、「ちがう」ことを認識するが、それはまた新たなフレーズの反復のなかに薄まっていつてしまう。一瞬記憶し、忘却する、という矛盾した作業を同時に行なうこと。そうした変化が何度かあるだけで、最初に与えられたフレーズはほとんど記憶から消えてしまい、逆に再現は失われてしまう。

今あげてきたような賢治の作品を読むこと（聞くこと）とは、このような経験であろうかと思う。こんな風と同じフレーズ（あるいは小さな変化が加えられたフレーズ）を連続して読まされると、読者は作者による何らかのメッセージを聞き取るのではなく、読者自身が能動的に作品自体のメッセージを構築することになる。実は先の引用は賢治作品に対してのものではない。アメリカの音楽家・ステイヴ・ライヒ（一九三六〜）をはじめとするミニマル・ミュージックについて小沼純一（「反復／差異／プラトー」『ミニマル・ミュージック』青土社 平成九年十月）が書いたも

のである。

例えばライヒは、十六分音符十二個のフレーズを二台のピアノに延々と反復させる。一台は同じ速さのまま、しかし、もう一台は少しずつテンポを速め、十二個の音は少しずつズレて演奏される。ズレはだんだんとひどくなり、一台目のピアノが第一音を発する時、二台目は第三音を、さらに時間が経過すると、一台目のピアノが第一音を発するとき、二台目は第四音を発するようになる。さらに時間が経過すると一回転して、第一音を二台のピアノが同時に発することになり、そこで曲が終了する（『ピアノ・フェーズ』一九六七）。聴者は聞いているうちに、二台のピアノの音のズレがモワレ（規則正しい繰り返しを複数重ね合わせた時に、それらの周期のズレが発生させる新しい縞模様）を起こし、最後にまた元に戻る過程を鑑賞するようになる。

賢治の連作には、これらミニマル・ミュージックの方法に著しく似ているように思う。
ウイム・メルテンは、「ミニマル・ミュージックの基本的思想」
（『アメリカンミニマル・ミュージック』細川周平訳 冬樹社 昭和六十年五月）で次のように言う。

反復音楽では、聴き手はもはや完成された作品を知覚するのではなく、能動的にその構築に参加するため、知覚はその音楽的プロセスの総合的、かつ創造的部分を成す。絶対的な言及点がないため、多数の解釈のパスpekティブが可能だ。その結果、想起と予測にもとづく方向性をもった聴取はもはや不適当であり、ランダムで無目的な聴取を可能にするために、過去の伝統的な想起は「未来への想起」のようなもの、つまり構築的ではなく現前化に席を譲らなくてはならない。この「前方に向けての想起」は、記憶の特権的地位を剥奪する。

もちろんライヒと賢治に影響関係などないが、「腐植土のぬかる

みよりの照り返し、材木の上のちいさき露店」に始まり、二行目で「腐植土のぬかるみよりの照り返しに、二銭の鏡あまたならべぬ」と反復しながら言葉を支ラし、同じようにして「すがめの子」「駅夫」「春木ながし」「みめよき女」とたどって、最終行で再び「腐植土のぬかるみよりの照り返しに 二銭の鏡売るゝともなし」に戻って終わるといふのは、ライヒの「ピアノ・フェーズ」の構造にとても似ているように思う。

ライヒをはじめとする音楽家たちは、西洋のクラシック音楽のように「聴かれるべきメッセージを正しく聴く」という方法を相対化してしまった。とすれば、賢治もミニマル・ミュージックと似た方法で、詩人のメッセージを押しつけようという意図とは縁を切る表現を試したのかもしれない。つまり詩が生まれる現場に読者を立ちあわせようとしたとも考えることができそうだ。

ちなみに賢治の作曲だといわれる「太陽マヂックのうた」や「牧歌」は、短いフレーズを延々と繰り返し返すのみで、ミニマル音楽に近いように思われる。カノンやフーガ法に学ぶところがあつたのかもしれないが、同じフレーズを繰り返しながら、少しずつ言葉を変えて、少しずつ雰囲気を変える効果を狙っていたようにも思えるのである。だとすれば、やはりミニマル・ミュージックに通じるころがあつたとも思えるのだが、いかがであるうか。

先行研究

岡井隆「賢治 詩と短歌の間」(『短歌研究 53』8) 短歌研究社

平成八年八月)

佐藤栄二「市日」(『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』 柏プラーノ

平成十四年七月)

天沢退二郎「詩人、詩篇、そしてデモン 宮沢賢治の文語詩篇における「売る行為」を読む」(『宮沢賢治』のさらなる彼方を求めて) 筑摩書房 平成二十一年七月)

88 中尊寺寸「一」

①七重の舍利の小塔に、蓋なすや緑の燐光。

②大盗は銀のかたびら、をろがむとまづ膝だてば、
緒のまなこたゞつぶらにて、もろの肱映えかゞやけり。

③手触れ得ず十字燐光、大盗は礼して没^きゆる。

大意

七重の小さな舍利塔に、蓋のように緑の燐光が輝いている。

大盗賊は銀の帷子で、拜んで早々に膝を立てると、赤い眼はひたすらつぶらで、両方のひじは映えかがやいた。

十字に光る燐光には手を触れることもできず、大盗賊は礼をして消えて行った。

モチーフ

明治四十五年五月に盛岡中学校の修学旅行として平泉を訪ねた時の作品とされる。中尊寺のあまりの威厳から奥州藤原氏を滅ぼした源頼朝も、中尊寺に關しては篤く保護したと言われるが、燐光を放つ仏舍利塔に触れることもなく去って行った「大盗」は頼朝を指すとされることが多い。ただ、賢治作品に登場する「盗ること」について改めて考えてみれば、「取ること」とほとんど同義であり、鉱物の採集や、詩句のスケッチ、食物の摂取、経済活動までも含んでいることに気付く。だとすれば、「とること」をたためらう「大盗」は、人間の活動全般に対して、本質的な疑いを抱いていた賢治自身だとすべきかとも思う。また、「中尊寺」のタイト

ルは途中から付されたものであることから、モデル論議はともかく、賢治自身の所感を書いたものだという点に立って考える必要もあるように思う。

語注

中尊寺 平安初期の八五〇年に慈覚大師（円仁）が開創した弘台寿院を始まりとする。八五九年に清和天皇の命によって中尊寺と改称され、一一〇五年に藤原清衡が堀河天皇の命を受けて再興した。一一二六年には落慶供養を大々的に行い、その発願文では平和を祈念し、奥州に仏国土を作ろうという意図が記されている。奥州藤原氏による華やかな文化の中心地として栄え、堂塔四十、僧坊は三百を下らなかつたとされる。しかし一一八九年には源頼朝により藤原泰衡が殺されて奥州藤原氏は滅亡。平泉は戦火に焼かれたが、頼朝は仏教を重んじてもいたため、中尊寺は庇護された。高館にある判官館（義経館）は、この地に身を寄せていた義経が滞在していたところだが、義経はここで泰衡に誅されたとされる。古くは西行が訪ね、江戸には芭蕉が訪ねて「夏草や兵どもが夢のあと」等の句を詠んだことでも知られる。賢治が中尊寺を訪れたのは年譜によれば一度きりだが、大正十二年三月四日、稗貫農学校の同僚だった堀籠文之進と一関に行った際、最終列車もなかったために平泉まで歩き、駅の待合室で夜明けを待ったという。「文語詩篇」ノート」の「12冊 28 19231」は「二月 一ノ関より平泉へ夜行く」とあって赤い枠で囲がしてある。三月と一月の違いはあるが、同じ体験を書いており、本作と関係があるのかもしれない。平成二十三年六月には「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界遺産（文化遺産）として登録された。

大盗 「銀のかたびら」を着ていることから、並大抵の盗賊ではないようだ。後述するように悪路王や源頼朝、豊臣秀吉に準える説、賢治自身と捉える説がある。

評釈

「冬のスケッチ」の第六葉として書かれた下書稿①、「雨ニモマケズ手帳」に書かれた下書稿②、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿③（タイトルは「中尊寺」。鉛筆で④）、定稿用紙に書かれた定稿の四種が現存。生前発表なし。

「未定稿」の「つめたき朝の真鍮に」に共通の詩句があり、また、同じく「未定稿」に「中尊寺」「二」があり、これは「歌稿」「A」「B」の8、9から文語詩に改作されたもの。「文語詩篇」ノート」に、「中尊寺、偽ヲ云フ僧義経像青キ鐘」と記して制作済と思われる抹消の跡が残されているが、それが「中尊寺」「二」であろう（「東京」ノート）には「修学旅行」とのみある。

明治四十五年五月、盛岡中学校四年生の賢治は石巻・仙台方面の修学旅行に参加する。賢治は初めて海を見たほか、教師の許可を得て、単独で伯母の平賀ヤギを訪ねるといった貴重な経験をしている。最終日の五月二十九日、一行に合流した賢治は、ともに平泉を訪れている。平泉を詠んだ短歌二首を「歌稿「B」」から引用する。

- 8 中尊寺／青葉に曇る夕暮れの／そらふるはして青き鐘鳴る。
9 桃青の／夏草の碑はみな月の／青き反射のなかにねむりき。

小川達雄（「中尊寺の鐘」『盛岡中学生宮沢賢治』河出書房新社平成十六年二月）によれば、平泉見学は当初の予定に入っていなかったというが、午後四時五十四分に平泉駅に到着したらしい。賢治の友人であった阿部孝が「校友会雑誌20」（大正元年十二月）に載せた「四年級旅日記」によれば、金色堂の他、「経堂、宝蔵、その他の諸堂」を見学し、判官館で午後六時の鐘を聞き（短歌8）、毛越寺で芭蕉の句碑「夏草や兵共が夢のあと」を見て（短歌

9)、「かけ足で帰路をステーションに急いで又汽車に乗」(「四年級旅日記」) ったのだという。盛岡に到着したのは十二時二十五分だというが、小川によれば、これに該当する平泉発の下り列車はないので、六時二十二分に上り列車に乗って一関に向かい、夕食等を取ってから、盛岡に向ったのではないかという。現代の修学旅行に比べると、途中での予定変更や個人行動、そして徒歩や駆け足の連続には驚かされる。ただ、小川は「この盛岡中学の修学旅行隊ほどの短い時間で、寺領内を通り過ぎた団体はなかったのではあるまいか」としていたが、国会図書館デジタルコレクションに秋田県師範学校の『第三回修学旅行記』(港多記 明治36年5月) が収められており、これによれば平泉駅に十六時三十分に着いた一行は、義経堂、金色堂、毛越寺などを見学したあと、十八時五十分に出発したという。当時の列車の本数や時間等から考えれば、案外スタンダードな日程だったのかもしれない。

さて、本作の下書稿(一)は「(冬のスケッチ)」の第六葉として書かれている。

ぬすまんとして立ち膝し、
その膝、光りかゞやけり

ぬすみ得ず 十字燐光
やがていのりて消えにけり。

「(冬のスケッチ)」の成立年代については未だに確定されていないが、稗貫農学校に勤務し始めた大正十年の前後であることについては間違いないだろう。ただ、その中に明治四十五年の修学旅行の経験が入っているということは異例だと思う。もともと中尊寺の文字はないし、農学校勤務期に明治四十五年の修学旅行のことを思い出した可能性もないわけではない。

さらに異例と言うべきは、下書稿(二)が昭和六年十月から翌年初

め頃に使われたとされる「雨ニモマケズ手帳」に書かれていることだろう。下書稿(三)になると、「中尊寺」のタイトルが書かれるが、手直しはなく、ルビも多めに振られたものが残されているため、発表を考えていたのかもしれない。内容は定稿に近いものだが、掲げておく。

七重しゅうの舍利こたうの小塔こたう
蓋がなすや緑の燐光

大盗は銀のかたびら

をろがむとまづ膝だてば

緒おのまなこたゞつづらにて

もろの肱は映えかゞやけり

手触たふれ得ね舍利こたうの宝塔

大盗は礼して没ゆる

ここでいう舍利は仏舍利、釈迦の遺骨を塔に収めたことを指すが、「雨ニモマケズ手帳」には、やはりシャリと呼ばれる米に対する「疾ミテ食撰ルニ難キトキノ文／コレハ諸仏ノオン舍利ナレバ／一粒ワガ身ニイタゞカバ／光明身ウチニ漲リテ／病カナラズ癒エナンニ」というメモが残っている。これは「未定稿」の「つめたき朝の真鍮に」にも関わるものと思われる。

つめたき朝の真鍮に

胸をくるしと盛りまつり

こゝろさびしくおるがめば

おん舍利ゆゑにあをじろく

燐光をこそはなちたまへり

『新校本全集』では、「つめたき朝の真鍮に」も「中尊寺
「一」と「共通する詩句が見られる」として言及していたが、や
はり先行作品は「冬のスケッチ」であるから、一種の作品群を
なしていたように思う。

さて、「中尊寺「一」」に関する先行研究は比較的多く、大盗と
は誰であるかを中心にさまざまに論議がなされてきた。

簡単に紹介していききたい。小倉豊文(後掲)は大盗を坂上田村
麻呂と闘った蝦夷の悪路王からの幻想ではないかとする。宮城一
男・対馬美香(後掲B)は、能の「舍利」、「太平記」の「谷堂炎
上事」、「法華経」の「見宝塔品第十一」などに源流があるのでは
ないかとし、大盗については、平泉の藤原家を滅ぼしながら、金
色堂の保護を命じて鎌倉に去った源頼朝をあてはめようとしてい
る。しおはまやすみ(後掲)は、「大盗」とは云うまでもなく宮
沢賢治自身のこと」とし、仏舍利に手を出せないのは、阿耨多羅
三藐三菩提という至上の真実に対する心の顛えを示しているのだ
という。佐藤弘弥(「宮沢賢治の文語詩「中尊寺」について
http://www.st.rim.or.jp/~success/kennji2_ye.html 更新日・平
成六年一月二十七日)は、「大盗」とは「大統」、つまり天皇の系
譜とも考えられ、また、奥州仕置によって東北を奪った豊臣秀吉
であった可能性も指摘し、秀吉の意をうけた浅野長政が、中尊寺
にあった金銀字交書一切経を持ち去って、高野山に寄進してしま
ったことについても言及する。森義真(後掲A、B)もこれに賛
同しているようだ。牛崎敏哉(後掲)は、平泉文化が単に奈良・
京都の貴族文化を模倣したものではなく、「すべての生き物が皆平
等に存するという思想を見ることができ」ことを理想としたと
指摘。その上で、源頼朝を「大盗」と喝破したとする。

悪路王に頼朝、秀吉と、まことに豪華な顔ぶれだが、水上勲
(後掲)が書くように、「歴史的に見て、頼朝が平泉の財宝を狙っ
たということは言えても、大盗というイメージとはぴったり合わ
ないのではないか。誰か特定のモデルをあてはめるといふより、

先の西藏(「五十篇」の「月のほをかたむけて」)に登場する
人物。貧しい山村で盗みを働こうとしながら、何も盗まずに消え
ている・信時注)のような変幻自在、一夜千里を行く怪盗をイメ
ージすべきだと思ふ」という意見にも一理あると思う。

浜垣誠司(「動画で見る賢治の推敲」<http://www.inator.cc/doc/suikou.html> 平成十四年七月二十七日の宮沢賢治学会イーハトー
ブセンター主催夏季特設セミナー報告)も、本作と「五十篇」の
「月のほをかたむけて」における西藏を対比するアイディ
アを書いているが、本作では「盗賊が宝物の尊さに畏れかしこま
ってしまったため」に何も盗っていないのに対して、「月のほの
ほをかたむけて」では「貧しそうな様子を見て、何も盗らずに去
っていった」という差について指摘していた。

小川達雄(前掲)は、賢治たちが修学旅行で平泉を訪ねたのと
ちようど同じ頃に平泉を訪ねた電翁なる人のエッセイを明治四十
五年五月十日の「岩手日報」に見つけている。そこには、盛岡中
学校の一行も訪れた判官館で、「ズツと前に窃盗に、へいられやして
龍頭の兜と、ズエー(采配のことならん)は取られヤシテガス、
其取れたのは余程是よりはジエーのでガシタ」という説明があっ
たとのこと、小川はこれが「文語詩篇」ノートに「中尊寺、
偽ヲ云フ僧 義経像 青キ鐘」と賢治が記したところの「そらご
と」にあたるのではないかとするが、このエピソードが「大盗」
の出処だったのかもしれない。

それぞれの論を簡単に紹介してきたが、今、特にどの説に対し
て賛成であるとも反対であるとも言うだけの準備はできていない。
ただ、ここでは盗むことについて考えてみることにしたい。

水上(後掲)は、『春と修羅(第一集)』に、やはり「冬のスケ
ッチ」に原点のある「ぬすびと」が登場すること、また、童話
「龍と詩人」には、「洞に封ぜられてあるチャーナタ老龍の歌をぬ
すみ聞いて」称賛を受けるエピソードが登場することに言及し、
「病床にある賢治の自由へのあこがれ、世間を騒がせて楽しんで

いるユーモア、権力への不屈さ、無頼不逞の輩に対する共感等（むろん、その反面の罪の意識や怖れなども）を読み取りたい」としている。

「ぬすびと」を初版本から引用すると、次のとおり。

青じろい骸骨星座のよあけがた
凍えた泥の乱反射をわたり
店さきにひとつ置かれた
提婆のかめをぬすんだもの
にはかにもその長く黒い脚をやめ
二つの耳に二つの手をあて
電線のオルゴールを聴く

「ぬすびと」が、具体的に何を示すのかはわからないものの、賢治の原初的な感覚としてあったようで、恩田逸夫（「脚注」『日本近代文学大系36 高村光太郎・宮沢賢治集』 角川書店 昭和四十六年六月）が、「盗賊」という行為には、すばらしいものを取り入れようとする情熱がある。知識欲や享受の欲望も同じである。手をつかねていないで、他から奪ってくる積極性、行動性に、賢治は共感するのである」としていたのは鋭いと思う。

狭義の「ぬすむ」についてなら、「他人のものをひそかに奪いとる。かすめとる」（『日本国語大辞典』）ことかもしれないが、「とる」との境界は微妙だ。「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹にじや月あかりからもらってきたのです」（「序」『注文の多い料理店』）とは、自分の「おはなし」は、自然界から「とってきたもの」だと宣言しているに等しい。「龍と詩人」も詩を「とる」かどうかをめぐる話だ。

ただ、「春と修羅 第二集」所収の「三二四 夜の湿気と風がさびしくいりまじり」一九二四、一〇、五、に「わたくしは神々の名を録したことから／はげしく寒くふるえてゐる」とあること

から、人間がとってはいけないもの（使ってはいけないもの）もあるようだ。

「とる」をテーマにしているものとしては、童話「よだかの星」をあげることでもできる。よだかは、自分がカブトムシや羽虫を毎日たくさん捕食していたことに気付くが、別れを告げに立ち寄った弟のカワセミのところで、「そしてお前もね、どうしてもとらなければならぬ時のほかはいたずらにお魚を取ったりしないようにして呉れ」と言っていた。生きていくとは、他の動物の命を「奪る」ことなのだ。「フランドン農学校の豚」でも、他の動物の命を奪うことによつて、我々が生きているのだという事実がつきつけられる。

童話や詩も書かず、たとえ肉を食べなかつたとしても、我々の日常生活は「とる」ことなしに成立しない。

田中智学は「道と食」（『日本国体の研究』 真世界社 大正十一年四月 昭和五十六年八月復刻）の中で「食」について次のように書いているが、その範囲も同じように広範に渡っていた。

「食」を基調とした食欲争奪は一般的であると共に徹底的である、いよ／＼「食」を得られないとすると、命がなくなるから、死物狂ひになつて争う様になる、俗に「食ひものゝ意趣は恐ろしい」といふことを言ふが、これは軽いところで言つたのであるが、推し及ぼせば、世界の戦争にまでも及ぶ。かくの如く争ひの伴つて居る「食」を人生の土台として事物を判ずることは、直に世を争ひの中へ投げ出して、これに伴う猜疑や嫉妬や、陥穽や残忍等の害毒性の限りなき発達を幫けて、永久の不安を現出するのである。

個人でも国家でも世界でも、其目的が「道」になくて、「食」に在る間は、どうしても争ひは免れないものと思はねばならぬ、今の世はどの方面も、先づ食物本位の組織たるを認めない、それであるから年百年中、世に争ひが絶えない、国と

国との争ひも、人と人との争ひも、みんな是れが根だ、この根本を始末づけることをしないでいくら道徳だの哲学だのと騒いでも、所詮世は永久の春とならない、こゝに於てか「道」本位の大旗幟を世界人類の上に打樹てねばならぬのである。

人間が他者から何かをとる（盗る／取る／撰る）ことよってしか生きていけない存在だとしても、それをとらない（盗らない／取らない／撰らない）で済む生き方もあるのではないか。智学のいうところの「道」を模索する生き方とは、本作における「大盗」、すなわち宝物を目の前にしながら、それに手を付けずに去る者の思いに通じていよう。

しかし、賢治は「とる」ことの恐ろしさを知るとともに、「とる」ことの喜びをも知っていた。しおはま（後掲）は、「大盗」とは云うまでもなく宮沢賢治自身のこと」と書き、原子朗（後掲）も言葉を盗む詩人であった賢治こそが盗賊ではないのかとしている。本論でも、中尊寺伝説めかして第三者風に書きながらも、実際はやはり賢治自身が「大盗」であったように思う。そして、本作では、たまたま「大盗は礼して没」えたかもしれないが、賢治という大盗は、まだまだこれで「とる」ことを諦めきつたわけではないとも思う。

ところで、本作の下書稿(一)にも下書稿(二)にも、中尊寺との関係を匂わせる要素は何もない。そもそも大正十年頃に書かれたと思われる「冬のスケッチ」に、突然、修学旅行中の経験が現われるというのは不自然である。本作は「未定稿」の「中尊寺(二)」と共に扱われることが多く、関係の深い作品であるように扱われてきたが、修学旅行との結びつきが強く、「文語詩篇」ノートや「東京」ノートに関連するのは「中尊寺(二)」の方であって、本作は、おそらく修学旅行と直接の関係はないように思う。もちろん、結果的に「中尊寺」と名付けられた以上、中尊寺と全く無関係ではないにしても、本作は「ぬすびと」や「冬のスケッチ」

チ」に近い地点で書かれた詩であったことは、もう少し重視されてもよいように思う。

先行研究

- 森莊巳池「賢治の中尊寺詩碑」『宮沢賢治の肖像』津軽書房昭和四十九年十月）
小倉豊文「山上の堂のくらやみ」『二雨ニモマケズ手帳』新考』東京創元社 昭和五十三年十二月）
山口達子「賢治」文語詩篇定稿』の成立』（大谷女子大学紀要 2012）大谷女子大学志学会 昭和六十一年一月）
宮城一男・対馬美香 A 「文語詩」中尊寺」考』（弘前・宮沢賢治研究会会誌 4）弘前・宮沢賢治研究会 昭和六十一年五月）
宮城一男・対馬美香 B 「平泉の奇蹟 文語詩」中尊寺」(一) (二) 考』（宮沢賢治 7）洋々社 昭和六十二年十一月）
しおはまやすみ 「編者あとがき」『宮沢賢治詩ノート集』あるちざん 平成二年一月）
田口昭典「文語詩に見る縄文」『縄文の末裔・宮沢賢治』無明舎 平成五年三月）
原子朗「賢治と中尊寺」『関山 3』中尊寺 平成八年十月）
牛崎敏哉「中尊寺」(一) (二) 『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月）
水上勲「宮沢賢治文語詩に関する二、三の問題」(帝塚山大学人文科学部紀要 1) 帝塚山大学人文科学部 平成十一年十一月）
吉田精美「西磐井郡平泉町・中尊寺金色堂拝観受付所裏」『新訂 宮沢賢治の碑・全国版』花巻市文化団体協議会 平成十二年五月）
関宮治良「東稲山・駒形山と平泉」(第 9 回グスコープドリの大 学校報告書) 石と賢治のミュージアム 平成二十一年一月）
森義真 A 「宮沢賢治と平泉 「大盗」に新説」(宮沢賢治センター通信 16) 宮沢賢治センター 平成二十四年十一月）

森義真B 「宮沢賢治と平泉 「大盗」とは誰か？」（『賢治学2』
東海大学出版部 平成二十六年六月）

89 嘆願隊

①やがて四時ともなりなんを、 当主いまだに放たれず、
外の面は冬のむらがらす、 山の片面のかゞやける。

②二羽の鳥の争ひて、 さつと落ち入る杉ばやし、
このとき大気飽和して、 霧は氷と結びけり。

大意

そろそろ四時になろうとしているのに、 当主はまだ陳情にやっ
てくる人々から解放されることなく、 山の片面だけが輝いている。
窓の外には冬の鳥が群れており、

二羽の鳥が争って、 さつと杉林の中に落ちていったかと思うと、
ちようどこの時に安定していた大気が弛んで、 霧は氷となって
いった。

モチーフ

「『冬のスケッチ』」を元にした作品で、おそらく四時の終業を間
際に控えた稗貫郡役所の事務官が見た鳥と大気との織りなした自
然現象。杉林の中に二羽の鳥が落ちていくと、その拍子に、霧が
氷結したという状況を詠んでいる。

語注

嘆願隊 赤田秀子（後掲）も書いているように、嘆願隊という表
現は他では見かけられないもので、賢治の造語であろう。『広辞苑』

には、嘆願が「事情を述べて願うこと」、陳情は「実情を述べて、
公的機関に善処を要請すること」とあり、「陳情団」の言葉も載
っているが、嘆願隊はない。四時まで当主が解放されないとい
うことから、役所に対して様々な人が嘆願や陳情を述べにやっ
て来るということではないかと思う。また、文語詩制作中の昭
和七年には、松尾鉦山の鉦毒をめぐって、大更村（現・八幡平
市）から嘆願書が岩手県知事あてに提出され、東京日日新聞岩
手版には数度にわたって報じられ、盛岡大衆党も動き出すこと
があった（早坂啓造「松尾硫黄鉦山鉦毒害問題と山本弘」『近
代日本社会発展史論』。ぺりかん社 昭和六十一年三月）。賢治は
松尾鉦山を「『百篇』の「腐植土のぬかるみよりの照り返
し」で扱っていると思われることから、この件については知っ
ていたはずだ。まだ「公害」という言葉もなかった時代の新し
い動きとして、取り入れるつもりがあったのかもしれない。

四時 佐藤清（『四時』『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』 柏プラ
ーノ 平成十二年九月七日）が、賢治の時代は「人は日の出と共に活動し、日没で終業、就寝が現在よりもずっと早かった。官
庁の終業時間は四時であった」と書いているとおり。

当主 「その家の現在の主人。当代の戸主」（『日本国語大辞典』
下書稿には「センダチ」のルビが残っていたことを『新校本全
集』は伝えている。「先達」のことと思われるが、『日本国語大
辞典』には、「学問・技芸・修行などで、先にその道に達し、他
を導くこと。また、その人。先輩。せんだち」とある。

評釈

黄野（222行）詩稿用紙に書かれた下書稿（鉛筆で㊸）、定稿用
紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。

赤田秀子は「『冬のスケッチ』」の第三八葉を先行作品ではない
かとする。

からすそらにてあらそへるとき
あたかも気圏飽和して
さとかゝれる 氷の霧。

『新校本全集』は、この指摘を行っていないが、決定的だと思
う。ただ、『新校本全集』では「一百篇」の「うたがふをやめ
よ」の先行作品として、第三八葉を第十七葉と共にあげている。

①うたがふをやめよ、 林は寒くして、
いささかの雪凍りしき、 根まがり杉ものびてゆるゝを。

②胸張りて立てよ、 林の雪のうへ、
青き杉葉の落ちちりて、 空にはあまた鳥なけるを。

③そらふかく息せよ、 杉のうれたかみ、
鳥いくむれあらそへば、 氷霧ぞさつとひかり落つるを。

「〔冬のスケッチ〕」中の一つの詩句が二つ以上の文語詩に使わ
れた例の一つであろう。ただ、どちらの詩についても背景にすぎ
ず、両詩が深くかわりあっている印象もない。

また、「四時」が登場するとなれば、「一百篇」所収の「四時」
も無関係であるとは言えまい。四時という時間、つまり近代以降
に導入された定時法による時間は、農民をはじめとした多くの
人々に、まだ受け入れられていなかった。明治以前の日本では、
日の出と日の入りの時間をもとに時間を六つに分け、夏と冬とで
長さが違う不定時法が採用されていた。常に時計を手放すことな
く、定時法にもとづいた生活を送る必要があったのは、「二百篇」
の「四時」で取り上げられたような鉄道駅、官庁、学校であった。
本作もこの三つの機関が集中していた鳥谷ヶ崎駅近辺を舞台にし
た作品である。

「〔冬のスケッチ〕」が取材された頃、賢治は稗貫農学校に勤務
していたが、同校は大正十二年三月まで鳥谷ヶ崎駅前にあったか
ら、その頃の心象風景を描いたものだろう。「二百篇」の「四時」
や、その直前に収録された「〔塀のかなたに嘉菟治かも〕」も、や
はり同じ時期の作品だということになりそうだ。「〔塀のかなたに
嘉菟治かも〕」には、「あかつちいけにかぐまりて、鳥にぐりの水
のめり」とあるから、鳥の繋がりにおいても、本作との関連が指
摘できそうだ。

二羽の鳥が空中を争いながら飛んでいる光景は、よく目にする
が、その鳥たちが共に森の中に落ちていった時に、ちょうど霧が
氷になったように見えたというのだろう。童話「鳥の北斗七星」
には、「若い声のいゝ砲艦」の夢の中の記述として、次のようにあ
る。

鳥の大尉とたゞ二人、ばたばた羽をならし、たびたび顔を見
合せながら、青黒い夜の空を、どこまでもどこまでものぼつて
行きました。もうマヂエル様と呼ぶ鳥の北斗七星が、大きく
近くなつて、その一つの星のなかに生えてゐる青じろい苹果の
木さへ、ありありと見えるころ、どうしたわけか二人とも、急
にはねが石のやうにこぼはつて、まつさかさまに落ちかゝりま
した。マヂエル様と叫びながら愕ろいて眼をさましますと、ほ
んたうにからだ枝から落ちかゝつてゐます。

過冷却とは、「液体が固まる温度（凝固点）を下回っていても、
固体化せずに液体のままである状態。分子が極めて安定している
状態で起こる現象のため、振動を与えると即座に凍結する。たと
えばボトルに入った水が過冷却状態の場合、0℃以下であっても
液体のままだが、グラスに移し替えようとすると、注いでいる最
中から凍り始める」(「Jintax」)とで、霧状の水蒸気が、突然飛
び込んできた鳥によって、凍りついたように見えたということだ

ろう。賢治が気に入って使っていた化学用語の一つで、童話「インドラの網」に、「こいつは過冷却の水だ。氷相当官なのだ」とあり、また『新校本全集5』所収の口語詩「阿耨達池幻想曲」にも同じ表現が登場する。

舞台は鳥谷ヶ崎駅前にあつた稗貫郡役所だろうとしたが、「嘆願」の処理に忙しい事務官が、冬の鳥と大気の織り成す過冷却現象を喜んだというのは現実的ではない。役場に隣接していた稗貫農学校の教師・宮沢賢治が、一日の終わりに見かけた窓外の光景が、さまざまな記憶と結びついたり、離れたりしながら、本作が編み上げられたのであろう。

先行研究

赤田秀子「文語詩を読む その9 鳥のいる風景「鳥百態」ほか冬のスケッチから文語詩へ」 「ワルトラワラ20」 ワルトラワラの会 平成十六年五月

90 「一才のアルプ花崗岩を」

① 一才のアルプ花崗岩を、 おのも積む孤転車。

② (山はみな湯噴きいでしぞ) 髪齧きわらべのひとり。

③ (われらみな主とならんぞ) みなかみはたがねうつ音。

④ おぞの墓みちをよぎりて、 にごり谷けぶりは白し。

大意

一立方尺になる高山の御影石を、 自分でも積もうと一輪車を持ち出す。

(全部の山から温泉が湧いているみたいだぞ) 髪の毛の赤い子供の一人が言う。

(おれたちがこの山の王様だぞ) 上流からは鑿を打つ音が聞こえてくる。

のっそりとヒキガエルが道を横切り、 にごり谷にはけむりが白く漂う。

モチーフ

「アルプ花崗岩」とは何か、舞台はどこかという論議がなされたが、前者については「高山をなしている花崗岩」、後者については姫神山ではないかと思う。ただ、実際は岩手県内の様々な鉱山や石切場での経験を組み合わせ、虚構も加えたものであると思う。石切場で働く父と、その周りで遊ぶ子どもたちを前面に出すようになったのは、文語詩化の過程でのようだが、岩手に住む様々な人の生活や思いを収録しようという意図によるものではないかと思われる。

語注

一才 積み荷や石材の体積を量る単位で一立方尺のこと。一尺×一尺×一尺。約二十七・八二六リットル。重さにすると七十kgほどになり、とても「わらべ」が持てる重さではない。多田実(後掲)が言うように屑石を運んだのだと思う。

アルプ花崗岩 『新校本全集』には、昭和四十二年版全集では半花崗岩の「アプロ花崗岩」の書き誤りであろうとして校訂していたが、「半花崗岩の意味の「アプロ」の方が自然かとも思われるが、下書稿・定稿ともはっきり「アルプ」と書いてあるので、本文も「アルプ」のままにする」とある。ただ細田嘉吉(後

掲)や加藤碩一(『宮沢賢治地学用語辞典』)も書く通り、半花崗岩では大きな石材として切り出すことはできないようなので不適当だろう。多田(後掲)は、「アルプス造山運動に伴う火成活動によって生成した花崗岩」の略称であろうとし、『定本語彙辞典』も多田説に従っている。細田(後掲)は、多田のいうアルプス造山運動説(造山運動は褶曲山地や地塊山地ができる運動と考えられていたが、火成活動や対流論をも対象に含められるようになったとする)の日本での認知は一九四〇年代以降であり、賢治在世当時に発表された報告書等も市中に出回っていることはほとんどなかったことから、受け入れていない。そして細田は「アルプ花崗岩」を「高山をなしている花崗岩」のことだろうとするが、本論でも細田説に従いたい。

孤転車 土石運搬に用いる手押し式の一輪車、ねこ車のこと。下書稿(一)では、「木ぐるま」、下書稿(二)では「孤輪車」、書き直した段階で「孤輪車」とルビ付きになっている。定稿では、『新校本全集』によれば「孤転車」と、輪の字が転の字に変わっているが、おそらくは書き誤りだろう。細田(後掲)は、「孤転車」について、「この字、この読みをあてたのは語感をととのえるための賢治の創意か」とするが、『日本国語大辞典』では「孤転車」はないが、「孤輪車」について、「荷物運搬などに用いる一輪の手押し車」とし、『慶応再版英和对訳辞書』(慶応三年)にも barrow の訳語として、また、石橋思案の『寧馨児』(明治二十七年九月)の用例をあげ、「こりんしゃ」と読んでいる。朝日新聞の「聞蔵Ⅱ」で用例を検索したところ、「孤転車」はゼロであったが、「孤輪車」については、明治四十年四月一日に「赤坂区東京興農園の農業用孤輪車」が東京博覧会に出展されたとの記事が見つかった。

おぞの墓 「おぞ」について、細田(後掲)は、「おぞましい。いやな感じ」とするが、「鈍い」であろう。にぶい、おそい、愚かといった意味で使われる。墓はヒキガエルのこと。鈍重でのつ

そりとヒキガエルが道を横切ったのであろう。

評釈

黄野(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、その裏面に書かれた下書稿(二)、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。『新校本全集』に指摘はないが、多田実(後掲)は、「歌稿〔B〕の「18 そら耳かいと爽やかに金鈴の／ひゞきを聞きぬしぐれする山」を赤インクの枠で囲み、その下部に赤インクで次のような断片を書き、抹消してあり、それを本作の先行形態であろうと指摘する。

赤みかげ石 ひき
霧降る林と濁り水
坂のぼり行く石切たち
雲たちまへる前山

赤みかげ石、ひき、濁り水、石切等、本作と関連する語が多く、また、赤インクによる枠や、○によって消去された短歌は文語詩化されているものが多いことから、先行作品だとしてよいように思う。

下書稿(一)は次のようなものだ。

にぎり谷雨はくらきを
みなかみのいづこにかあれ
ひとあまたたがねうつ音

髪緒きわらはべひとり
木ぐるまに切石のせて
橋のべにぼうとたゞずむ

何鳥ぞ朱の尾せるもの
いくめぐり谷をのぼりて
にごり水白くけぶりす

さらにまたわらはべひとり
みね這へる雲をゆびさし
温泉ぞ湧くと叫び出でくる

花崗岩の石切り場で遊ぶ子どもたちの様子を書こうとした詩に変えたようだ。「歌稿〔B〕」の18や、その下にかかれたメモには子どもたちの姿がないが、雲が湧き立っている様子を温泉のようだと思った賢治が、その思いを子どもが感じたようにして登場させたのかもしれない。

多田（後掲）は、「文語詩篇」ノート」の「14 1909」（明治四十二年。中学一年時）に、「夏休み、西鉛温泉、母疾ム、熊堂、マガ玉／植物採集、蛇、蜂、岩絵具、」等とあることから、西鉛温泉にも近い豊沢ダム堰堤附近での経験をしたのではないかとする。この一帯に肉赤色カリ長石を伴う花崗岩類があったと思われること、地元で「前山」と呼ばれている山があること、白沢という名前の川があり、「濁り水」を思わせることなどから、ここが舞台だとする。ただ、石切場の存在については、地元の人たちも知らないとのこと。

また、細田嘉吉（後掲）は、語注にも記したとおり、「アルプ花崗岩」を「高山をなしている花崗岩」と解釈しているが、岩手県内で花崗岩でできた高山として薬師岳、五葉山、姫神山をあげ、このうち古くから石切り場があったことで知られる姫神山を舞台であろうとする。また、細田は石切場の近くに「濁川」という川が流れていることも指摘する。

盛岡高等農林学校時代の友人・高橋秀松（「賢さん」）『宮沢賢治とその周辺』川原仁左エ門 昭和四十七年五月）によれば、二

年の頃に姫神山まで賢治と登ったことがあるというが（「丹藤川」／「家長制度」の体験をしたのはまた別の機会）、細田はそれが原体験なのだろうという。そして、七十キロもの石を「わらべ」が運べるはずはなく、また、石切場で働く若年労働者だとするのにも、「橋のべにぼうとたぐずむ」という描写からは考えにくいいため、本作における二人の「わらべ」は、賢治と高橋であろうという。

まず多田説から検討してみたい。多田説の最大のネックは、地元の人も石切場について知らないことであろう。多田も書くように短期間だけのものだった可能性もあるうし、虚構だったと言われればそれまでだが、先行形態にも「石切たち」と複数で登場し、下書稿（一）には「ひとあまたたがねうつ音」ともあったことからすると、なかなか苦しいところだと思ふ。また、『昭和六年 岩手県統計書 第三編 産業（其ノ二）』（岩手県 昭和八年二月）によれば、昭和六年のデータではあるが、花崗岩の産出量は、岩手郡（五四、〇三五才）、和賀郡（六、五〇〇才）、江差郡（五、六三〇才）、東磐井郡（三三、三四六才）、気仙郡（八一、三三〇才）、上閉伊郡（二四、二〇〇才）、下閉伊郡（五〇、五一〇才）、九戸郡（二、三六〇才）、二戸郡（一〇〇才）と、花巻町や湯口村を含む稗貫郡の産出がゼロであることから、この説は採用しにくい。白沢や前山の名前も、決定打にはなりにくいと思ふ。

細田説については、「ひとあまたたがねうつ音」にもふさわしい石切場が姫神山に存在したこと（『岩手県統計書』のデータで岩手郡の産出量は県内二位）、「歌稿〔B〕」に赤インクで書かれた先行形態には「赤みかげ石」とあったが、姫神山では石英がうすら桜色になつていることから「姫神小桜」と呼ばれる花崗岩を産出したことなどから、かなり信憑性が高いように思ふ。「一百篇」の「市日」で姫神山を「みかげ尾根」と呼んでいたことも参考になる。ただし、高農時代の取材にもとづくのではないかという点については、「歌稿〔B〕」の18の短歌が中学時代のものであることから、にわかには採用しがたい。二人の「わらべ」を賢治と高

橋だとするものも、少々強引すぎるように思う。

「文語詩篇」ノート」の「14 1909」には、鬼越山（玉髓採取？）、のろぎ山（のろぎは、蠟石のこと）等と書かれているが、同級生だった阿部孝（「賢治と私」『ばら色のばら』高知新聞社昭和四十年八月）は、中学時代の賢治について次のように書いている。

中学一年生のころ、遠足や郊外散歩に出かけるときの彼の腰には、かならず愛用の金づちが一ちよう、たばさまれていた。彼の詩によくでてくる、七つ森、南昌山、鞍掛山、その他、盛岡近在の山や丘で、彼のこの金づちの洗札を受けていない所は、ほとんどあるまい。こうして、方々から集められた岩石の標本が、彼の机の上や、引き出しから、押し入れの中まで、いつぱいに埋めていた。中学一年生で、あれだけ石に興味の持てる子供は、古今東西を通じて、あまり類がないかもしれない。あの調子でいったら、彼はおそらく、第一級の鉱物学者か、地質学者にもなり得たであろう。

阿部の書く通りなのだと思えば、賢治が、いつ、どこに出かけた際に本作のモチーフを得たのかを突き止めるのは至難の業だということになりそうだ。ことに本作には特に大事件に遭遇した経験を書いているわけでもないで、様々な時期の、様々な場所での記憶、そこに虚構も重ねられた上で成り立つたと考えるのが妥当であるように思う。

地質学的な話が長くなったが、文語詩定稿を読む限り、本作は石切場で働く父と、その周りで遊ぶ子どもたちについて書いた詩のようである。先にも書いたように、彼らを前面に出すようになったのは、文語詩化の過程においてであったようだが、これは賢治の文語詩が、集全体の傾向として、岩手に住む様々な人の生活の様子や思いをできるだけ広く、深く収録しようという意図で構

成されているためではないかと思う。

また、石切場で働く父とその子という組み合わせは、「風の又三郎」における鉱山技師とその子どもである高田三郎の関係を思い出させる。高田三郎が「赤い髪の子供」とされていたのと同じく、ここでも「髪緒きわらべ」となっているが、案外、原風景は共通していたのかもしれない。

先行作品

多田実「「一才のアルプ花崗岩を」考」（『宮沢賢治研究Annual15』

宮沢賢治学会イーハトーブセンター平成七年三月）

細田嘉吉「「一才のアルプ花崗岩を」」（『宮沢賢治 文語詩の森第

三集』柏プラノー平成十四年七月）

91 「小きメリヤス塩の魚」

①小きメリヤス塩の魚、

雲の縮れの重りきて、

藻草花菓子鳥賊の脳、

風すさまじく歳暮るゝ。

②はかなきかなや夕さを、 なほふかぶかと物おもひ、
街をうづめて行きまどふ、 みのらぬ村の家長たち。

大意

子ども用のメリヤスに塩辛い魚の干物、 海藻に花、菓子、イカの塩辛、
縮れた雲がどんよりとして、 冷たい風が吹きすさぶ年の暮れ。

ものがなく見えるのは夕暮れ時に、 まだ物思いにふけるようにして、
町をうづめるようにして行き惑っているのは、 収穫なく終わっ

た村の家長たちである。

モチーフ

年末の町の風景である。町には正月用の商品が並び、「みのらぬ村の家長たち」も、正月らしい気分を家族に感じさせたいと思うが、暮れ方になっても町中を行き来するばかり。わびしい風景だが、ここに登場する家長たちには、家族があり、正月を祝おうというだけの経済力もある比較的余裕のある層だろう。中農層の喜怒哀楽も、きちんと文語詩に描いておこうとしたのだろう。

語注

メリヤス 糸をループさせた編目の集合により、伸び縮みするよう編まれたものこと。対して、縦横の二本の糸でつくられているのが織物。「莫大小」と書かれることもあるが、これは大も小もないこと、つまり伸縮自在であることだからだという。日本に持ち込まれたのは江戸初期。使用する糸に制限はなく、用途としては肌着、靴下、上着等で、密着性や伸縮性が求められるものが多い。『日本国語大辞典』は、伸縮自在ということから、「相手次第でどのようにもなる人という俗語」という語義も載せている。

藻草 赤田秀子（後掲）は、「もそうと読む。ふのり、昆布、ワカメなど海藻類」とするが、「もぐさ」の方が一般的な読み方のようである（下書稿に指示はないが、手近な辞書類には「もぐさ」はあっても「もそう」は載っていない）。

烏賊の脳 イカの肉や内臓を塩漬けして発酵させた塩辛のこと。

赤田（後掲）は、『聞き書き岩手の食事』（農山漁村文化協会 昭和五十九年九月）から、「とりたての赤腑（スルメの肝臓）と味噌を入れてぐつぐつ煮たものを腑味噌と言って珍味だそうである」という。岩手県の内陸部では新鮮な海産物が手に入る機会は稀だった。

評釈

無罪詩稿用紙に書かれ、『新校本全集』で「逐次形」とされる下書稿(一)、その余白に書かれた下書稿(二)、裏面に書かれた下書稿(三)、その余白に書かれた下書稿(四)（タイトルは「戸主」「家長」の案も示される。紙面右肩に青インクで⑦、上部余白に青インクで⑧）、定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存。生前発表なし。ただし、後述するように島田隆輔（後掲B）が、校異に対する異論を発表している。

『新校本全集』では、「本篇下書稿と関連ある下書断片と見られる語句「塩の」「鱈と塩鮭 赤き足袋」が、「作品断章・創作メモ」創4の用紙裏面に残っている」とする。この他の先行作品や関連作品についての指摘はしていないが、赤田秀子（後掲A）は、『新校本全集5』所収の口語詩「（こっちの顔と）」や、「春と修羅第二集補遺」の「雪と飛白岩の峯の脚」（二五〇八 発電所一九二五、四、二、）の発展形）に共通する詩句があることを指摘している。

また、下書稿(二)には「林光左」とのメモがあるが、「文語詩篇」ノート」の「33138」には、「林光左」とあり、それを生かしたと思われる「二百篇」の「来々軒」には「林光文」が登場し、また「未定稿」の「馬行き人行き自転車行きて」には「林光原」が登場する（同詩の先行作品である『新校本全集5』所収の口語詩「湯本の方の人たちも」では「林光左」）。これらは冬の花巻を描いており、本作の下書稿と同じように、警察や活動写真の楽隊も登場する。また、「ちづれ雲西に傷みて」や「雲は傷れて眼痛む」といった詩句もあって、本作と似た部分が多い。

先述の通り、島田（後掲B）は、『新校本全集』の校異に異議を唱えて、次のような流れを示す。

下書稿(一) ↓ 下書稿(三) (⑦) ↓ 「作品断章・創作メモ」創4裏面 ↓

下書稿(四) (㊟) ↓下書稿(二) ↓定稿

使われている詩句や導線の指示、筆記用具の種類等からの判断で、妥当な指摘だと思われる。よって、ここでは島田説に従いながら校異を追いかけてみることにしたい(ただし混乱を避けるために「下書稿」の名称は『新校本全集』のままとする)。まず下書稿(一)から見よう。

はるばると露店はならび
烏賊の脳 歪める陶器
塩鮭や 数の子ふのり
茶餅とメリヤスのシャツ
ちぢれたる雲のま下を
魚類の 包みをになひ
うちきほひ人押し分けて
米とれる農夫は急ぎ
けらや縄藁沓を吐き
かなしげに行きかふものは
堰下の早地の農夫
活動の遠き楽隊は
がたびしに雲にひゞけば
太き剣さげし巡查や
開空の家長の会は
しみじみと夕暮に入る

ここで描かれているのは花巻の町の賑わいであろう。下書稿(二)に書かれたメモには「林光左」とあり、これは花巻の町を描いたと思われる文語詩「一百篇」の「来々軒」や「未定稿」の「馬行き人行き自転車行きて」の登場人物であり、描かれた町の様子の類似からもそのように言えそうだ。ただし下書稿(三)の手入れでは

「この峡」ともあることから、花巻よりももう少し小さな山間の町(大迫あたり?)を想定していたのかもしれない。

下書稿(四)は次のとおり。

歪める陶器烏賊の脳
小きシャツや 赤き足袋
露店はならぶ雪の雲

みのれる村のをのこらは
魚こもつみ一つきの
酒にほこりてみな去りぬ

ひでりつゞける村人は、
いくたび町を行きかへて
罪あるもののがたなり

さびしきかなやたそがれて
こらのすがたを胸にして
なほ行きまどふ戸主の群

連で区切ることによって、「みのれる村のをのこら」と「ひでりつゞける村人」の差が見えやすくなったが、「ひでりつゞける村人」を賑やかな町の中を「罪あるもののがた」だと書いて、コントラストをつけているのが特徴的である。

島田(後掲B)は、この段階で「小／ちいさき／小き」という修飾が、はじめて登場する」とし、「家」のなかで本来強者たる家長／戸主が守るべき弱者、子どもが存在が詩の場にはつきりととらえられて、強者も弱者もなくもるともに苦悩のなかに沈みこんでいく家族、そして村の存在、というものに、詩人の視線は到達している」とする。賢治の「初期短編綴等」に「家長制度」と

いう作品があり、土性調査の際、賢治が山間の家で体験した家長制の強固さについて書いているが、その時の「家長」にくらべると、ずいぶんと家族思いで心優しい存在のように見える。下書稿(二)（島田の想定による冒頭の三行を省いた形態）をあげてみる。

みのらぬ村の家長たち
ふかぶかおもひ旧臘の
まちをうづめて行きまどふ

歪める陶器烏賊の脳
小きメリヤス塩の魚
露店はならび客はなき

雲の縮れの重りきて
楽隊の音がたびしに
はるかのまちをめぐらし

はかなきかなや暮れそめて
なほ物おもひ行きまどふ
みのらぬ村の家長たち

「みのらぬ村の家長たち」に始まり、そして同じ詩句で終わるという構造で、みのれる村と早害の村の対比を捨て、島田によれば「早害の村の「家長」たちの苦悩に向き合って、そこに集中して」いる詩稿となっている。

関連作品である「詩への愛憎」（「雪と飛白岩の峯の脚」の雑誌発表形）は、はじめは発電所を見学した際の経験を綴る作品であったが、昭和初期に大幅に改変され、発電所の技師の夢想の中に脚本家である令嬢が現われ、技師が令嬢の芸術観を批判すると

いう内容になっている。

やつぱりあなたは心臓を、三つももつてみたんですねと、技手がかなしく啣つて言へば、佳人はりうと胸を張る、どうして三つか四つもなくて、脚本一つ書けるでせう、技手は思はず憤る、なにがいったい脚本です、あなたの雑多な教養と、愚にもつかない虚名のために、そこらの野原のこどもらが、小さな赤いもゝ引や、足袋をもたずに居るのです、旧年末に家長らが、魚や菓の市へ来て、溜息しながら夕方まで、行ったり来たりするので、さういふ犠牲に値する、巨匠はいつたい何者ですか、さういふ犠牲に対立し得る、作品こそはどれなのですか、もし芸術といふものが、蒸し返したりごまかしたり、いつまで経つてもいつまで経つても、無能卑怯の遁げ場所なら、そんなものこそ叩きつぶせ

島田（後掲C）によれば、「近代化や芸術（理想）がムラを救うには及んでいない」ということであり、「小きメリヤス塩の魚」は、「さういふ犠牲に対立し得る」ものを立ちあげようとする試みだったといえる、そこには、「無能卑怯の逃げ場所」ではない「芸術」の成立が志されているであろう」という。

「詩への愛憎」の発表は昭和八年三月（「詩人時代313」）だから、これは「はじめに 文語詩はどこに向かっていたか」（『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』（信時哲郎）の中で指摘したような晩年の認識、すなわち自分が書いてきた心象スケッチをハインテリ向けの作品で、生活を故意に没した美しいものVとして捉え直し、文語詩を大衆向けの作品で、生活を積極的に取り入れた素朴なものVとして書いていこうとする姿勢とも合致するように思う。しかし、そうした思いをほかならぬ口語詩で書いているというあたりが、「詩への愛憎」という両義的なタイトルを付けざるを得なかった賢治自身のたどり着いた地点であったのかもしれない

い。

それはともかくとして、島田（後掲B）が「夕暮れとともに黒々とひろがり、押し迫ってきていたのは、あまりにも冷酷な現実の方だった」というのは基本的にはそのとおりであったにしても、家長たちが夕刻までうろろしていたのは、島田自身も書いているように「正月という節目の贅沢」をするためのものであったということについては強調しておく必要があると思う。

関連作品である口語詩「ごっちの顔と」には、「殊にも塩の魚とか／小さなメリヤスのもゝ引だとか／ゴム沓合羽のやうなもの／かういふものについて共同の関心をもち／一諸にそれを得やうと工夫することは／じつにたのしいことになった」とあり、これは赤田（後掲A）も言うように、「つつましくも楽しい豊かな生活の具体的指標であった」わけである。また、下書稿④には「赤き足袋」とあり、「詩への愛憎」にも「足袋」が出てきていたが、赤田が引用する森口多里「衣食住」〔日本の民俗3 岩手〕第一法規昭和四十六年十一月）では、足袋について、「農家では足袋はめつたにはなかった。町でも自家製の足袋は甲と底の縫い合わせ目がそとに出ているアワビタビであった」「農民は草鞋を素足にはき、冬は藁沓のツマゴをはいた」とある。正月用の食品や雑貨を、自分の思ったとおりに買うことができないというのは、たしかに悲劇というべき状況かもしれない。しかし、彼らを夕刻までうろろさせたのは、少しでも安くてもよいものを、少しでも効率よく、より多く手に入れようとしたからであって、所持金もなく、何を買うあてもなく歩いてたわけではない。

大正十三年に岩手県の三陸で生まれ育った山下文男（昭和五年（1930）世界恐慌の直撃）『昭和東北大凶作 娘身売りと欠食児童』無明舎 平成十三年一月）は、たった一人の女の子であった自分の姉は、借金のために隣の旅館に女中奉公に出され、風呂に入るのは一週間か十日に一回。それでも自分は「まだ恵まれた方であった」という。そんな山下は、自分の幼年時代の年末

を次のように書いている。

父は、師走になると、きまつて元気がなくなり、怒りっぽくなった。両手で頭を抱え、じつと炉端の火を見ながら考え事をしている風で、無言だった。母は、まるで腫れ物にでもさわるように、そんな父を扱った。気配を察して、子どもたちも、このときばかりは父の顔色をうかがい、おとなしくした。煩い子どもたちがフトンに入ってから、両親に長男が加わったのひそひそ話が始まる。「利子あげ」をして、いかに、この暮れを切り抜けるかの、いわば借金対策会議であった。「利子あげ」とは、利息だけを納めて元金は待つてもらおうというものであった。

伊原西鶴の「世間胸算用」の時代から近代まで、借金を抱えた者にとつて年末が大変な時期であったのは変わっていない。石川啄木も、明治四十年の大晦日について、「遂に大晦日の夜となれり。妻は唯一筋残れる帯を典じて一円五十銭を得来れり。母と子の衣二三点を以て三円を借る。之を少しづつ頒ちて掛取を帰すなり。さながら犬の子を集めてパンをやるに似たり。／かくて十一時過ぎて漸く債鬼の足を絶つ」と書いていた。そう思えば、年末に、夕暮れまで町をさまようことができる層というのは、ヒデリの害を受けていたにしても、比較的余裕があった人々だという見方もできると思う。

もっと不幸な人もいたはずだ、などと言って、賢治の認識の甘さを実こうというつもりはない。ただ、金持ちは金持ちの悩みを抱え、中程度の人たちは中程度の、最下層の人たちも彼らなりの悩みがあったということ、賢治の文語詩は、こうしたさまざまな立場の人の、さまざまな感情を描こうとしていたのではないかと言いたいまでである。

文語詩の登場人物の多さ、バラエティの広さについてはしばしば指摘されるが、社会の上層部に属するような人々に対してであ

つても、賢治はいつも批判ばかりをしていたわけではない。「五十篇」でいえば老先生に哀愁が漂う「著者」、「一百篇」では異郷で静かに生きる西洋人を描いた「岩手公園」や「浮世絵」、慎ましく地方で生きる医師を描いた「医院」、銀行家が息子に向って経営の苦勞を漏らす「水楢松にまじらふは」などがあり、プロレタリア文学とは大きな開きがあるように思う。もちろん賢治が社会的弱者の味方であり続けようとしたのは確かであり、そうした作品の方が印象深く、数も多いかもしれないにしても、賢治の文語詩のおもしろさの一つは、弱きを助け強きを挫くだけではないところ。その層の厚さやバラエティの多様さにあるように思う。

島田（後掲C）は「実景の「家長たち」とは、一部の自作農も含められようが、農家戸数の4割を占めていた小作自作農など、村の中層にある人々のすがた」を描いたものだとするが、そのとおりであって、最下層ではないのである。上を見れば、たしかに下書稿(一)や下書稿(四)で書かれていたような羽振りのよい者もいたかもしれないが、ここではあくまで中層の農民たちの、中層なりのわびしい姿を描いたものなのだ、言っておきたい。

先行研究

- 中村稔「鑑賞」(『日本の詩歌18 新訂版 宮沢賢治』 中央公論社 昭和五十四年九月)
赤田秀子A「「小きメリヤス塩の魚」」(『宮沢賢治 文語詩の森』 柏プラーノ 平成十一年六月)
赤田秀子B「文語詩 語注と解説」(『林洋子ひとり語り 宮沢賢治』 クラムボンの会 平成十二年二月)
島田隆輔A「「写稿」論」(『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』 朝文社 平成平成十七年十二月)
島田隆輔B「藻草花菓子」(『小きメリヤス塩の魚』(『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』 朝文社 平成平成十七年十二月)
島田隆輔C「原詩集の輪郭」(『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛

筆・赤インク「写稿」による過程」広島大学博士論文 EThp://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00032003 平成二十二年九月)

92 「日本球根商△△が」

① 日本球根商△△が、
いたつきびとは窓ごとに、
よきものなりと販りこせば、
春きたらばとねがひけり。

② 夜すがら温き春雨に、
黒き葡萄と噴きいでて、
風信子華の十六は、
雫かゞやきむらがりぬ。

③ さもまがつびのすがたして、
朝焼けうつすいちいちの、
あまりにくらきいろなれば、
窓はむなしくとぎされつ。

④ 七面鳥はさまよひて、
小き看護は窓に来て、
ゴブルゴブルとあげつらひ、
あなやなにぞといぶかりぬ。

大意

日本球根商△△が、いいものだと売ってよこしたもので、病人たちは窓ごとに、春が来てくれたなら、とねがっていた。

夜からの温かい春雨に、ヒヤシンスの十六の花々は、
黒いブドウのように花を噴きだし、
滴もかがやかしく花に溜ま
っている。

まるで不吉な神のような姿で、
あまりにも暗い色なので、
朝焼けを映した一つ一つの、
窓はむなしくも閉じられてしまっ

た。

七面鳥がさまよい歩き、ゴブルゴブルと論議でもしているように鳴き、まだ幼い看護婦たちは窓辺に集まっては、何があったのだろうかと言いつげである。

モチーフ

宮沢家との親交も深かった花巻共立病院の花壇設計をした際の経験にもとづく詩。病院の花壇には、賢治が種苗店に頼んだのとは異なつて、黒いヒヤシンスが咲いてしまった。花を楽しみにしていた患者たちは、ガツカリして窓を閉めてしまったというユーモラスな作品。が、作品の舞台、動物や看護婦の登場、凶事の予感、不吉な色としての黒：といった点から考えると、賢治が岩手病院に入院していた時の経験を書いた「五十篇」の「血のいろにゆがめる月は」と極めて似ていることに気付く。ユーモアの中の不吉さ、不吉さの中のユーモアを漂わせる作品である。

語注

日本球根商会 先行作品である口語詩「病院の花壇」では、実在した東京農産商会とあったものが、定稿では虚構の日本球根商会に変わっていることを栗原敦（『文語詩稿』試論）（『宮沢賢治 透明な軌道の上から』新宿書房 平成四年八月）が指摘している。東京農産商会について、例えば時事新報社学芸部（白木正光）の「草花の種子まき」（『美しい草花と球根の作り方』時事新報社 昭和七年三月）には、東京農産商会は「今日世間に最も広く知られてゐる種苗店のうちで、わたくしの記憶にあるもの」としてあげた九店にあげられている。
夜すがら温き春雨に 孟浩然の有名な絶句「春曉」は、「春眠曉を覚えず 処処啼鳥を聞く 夜来風雨の声 花落つる知る多少」

というもので、夜すがら降る春雨に花、鳥の声に共通性があり、賢治は参考にしたかもしれない。ただ、テーマに共通性は見出しにくく、醸し出される情緒も異なっている。

風信子華

「ふうしんしか」と読ませたかったのだろう。下書稿には「ヒアチント」のルビも振られていた。ヒヤシンスのこと。ユリ科の球根草で、花期は三月から四月。ギリシヤからシリア、レバノンが原産だが、オランダでさかんに品種改良が行われ、豊富な花色、芳香から広く知られ、愛されるようになった。『日本国語大辞典』によれば、「明治五年頃、フランス人サバティエが持ち込んだヒヤシンスに対し田中芳男は「飛信子」とあてた。以後、「風信子」「玉簪花」「夜香蘭」などの表記が見られる。この中で「風信子」は広く用いられたようであるが、結局どれも一般名称となるに至らず、大正までに「ヒヤシンス」「ヒアチンス」に落ち着いた」という。「黒き葡萄」とも形容されているが、本作に関連する短篇「花壇工作」に登場するムスカリは、ブドウヒヤシンスとも呼ばれる。

まがつびのすがた

「まがつび」は、日本神話にみえる神の名。マガはよくないこと、ツは助詞で「の」の意味。ヒは神霊を示す。古事記や日本書紀によれば、伊弉諾尊が黄泉国のけがれを清めるための禊をした際に生まれたとされる。凶事を引き起こす神とされるが、後にこの神を祀ることで災厄から逃れられると考えられるようになり、厄除けの守護神として信仰されるようにもなった。まがつび（あるいは禍津日）の語は、「五十篇」には登場しないが、「百篇」のみに本作をはじめ「みちべの苔にまどろめば」、「早俣」に登場する。

七面鳥

キジ目キジ科の家禽。北アメリカ原産で、食用として広く飼育され、クリスマスや感謝祭の料理に使われる。興奮すると、頭から首にかけて裸出している肉イボのある皮膚が、青や赤に変化することから七面鳥の名がある。あごの下には肉ダレもあり、あまり愛玩されるような面貌ではないが、本作の舞台

となった花巻共立病院では患者を癒すために飼育されていたのだという。

ゴブルゴブル 七面鳥の鳴き声。七面鳥は一夫多妻制だが、雄は数羽の雌を集めて、尾を扇状に広げて体を膨らませ、ゴロゴロ鳴くのだという。『定本語彙辞典』では英語の動詞「gobble」（ガツガツ食う、うのみにする）との関係を示唆するが、赤田（後掲）は、「英語圏では七面鳥の鳴き声を一般的に gobble と表記するのは普通である。賢治は英語の慣用表現に通暁していたようだ。gobbler（原文はgobbler・信時注）といえ

ば、オスの七面鳥のこと」という。

小き看護 作品の舞台となった花巻共立病院（現・総合花巻病院）は、稗貫農学校が移転した跡地に、佐藤隆房を院長として設立された。大正十四年三月には花巻産婆看護婦学校（現・花巻高等看護専門学校）を置いたが、院長の佐藤隆房「花巻共立病院の創立」（『医は心に存する』佐藤進 昭和五十七年一月）によれば、「病院における看護要員の補充の必要性と、小学校卒業と同時に学業を廃止する者が大多数であったので、これに幾分なりとも教育の道を開きたいという念願から」があったためのものだという。伊藤光弥（後掲）は、このことから「小き看護」とは、小学校を卒業してからまだ間もない見習いの看護士のことを言ったのだろうとする。また、関連作品の短篇「花壇工作」には、「十三歳の聖女テレジアといった風の見習い看護婦たち」とも書いていた。聖女テレジアとは、テレーズ・マルタン（一八七三〜一八九七）のことで、フランス北西部のリジュールにあったカルメル会修道院に入り、「外面的にはなんら目だたない祈りと観想の生活を送り、みずから小きき道」と呼んだ、幼子の単純さと、英雄的な犠牲の甘受が一体となった信心に徹する。死後に公表された自叙伝《小きき花》は全世界で大きな感動を呼んだ（『世界大百科事典』という。『小きき花』は日本でも広く読まれたようなので、賢治も手に取ることがあった

のだろう。

評釈

先行作品である『新校本全集5』所収の口語詩「病院の花壇」が書かれた黄野（24行）詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、「一篇」所収の「病技師(一)」の下書稿(三)が書かれた黄野（260行）詩稿用紙の裏面に書かれた下書稿(二)（タイトルは「病院の花壇」。鉛筆で⑨）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。先行作品は「病院の花壇」。「短編梗概」に収められた短篇「花壇工作」は関連作品。赤田秀子（後掲）も指摘するように「未定稿」の「モザイク成り」とも関連が深く、語句や内容に一致する点が多いことから関連作品とすべきだろう。また、これまでに指摘されたことはないようだが、「兄妹像手帳」にある「岩手医事への寄稿材料」というメモとも関係が浅くないように思われる。

先行作品の「病院の花壇」は、宮沢家との親交が深かった花巻共立病院院長の佐藤隆房の依頼によって、賢治が病院の花壇を設計した際のことを詩化したものである。初期形態を示してみる。

夜どほしの温い雨にも色あせず

あんまり暗く薫りも高い

この十六のヒアシンス

まっ白な石灰岩の方形のなかへ

水いろと濃い藍靛で

すつきりとした折線を

二つ組まうとおもったのに

東京農産商会は

たとえば春の吊旗のやうな

このまつ黒な品種をよこし

花梗もいまは伸び過ぎて

半分屈んでゐるのもあるし

どれにも雨はいっぱいだ
今朝こそ截つて

あちこちへみな配ってやらう

外科と内科へ五つづつ

事務所と産科へ三つづつ

レントゲンではいままで見たし

眼科はいまは医員が居ない

みんなあちこちやってしまつて

こゝへは白いキャンデタフトを播きつける

ところが外科へ五つもやれば

神経質の院長は

あんまり薫りが高すぎる

看護、こいつをおまへの室へ持つてけと

さういふことは明かだ

村からやつと出て来たばかりの

こどもの見習い看護婦が

これ何の花だべや と云つて

ちやうどにはかに豚の白肉のお菜に遭つたときのやう

気味悪さうにコップをさゝげ

じぶんの室へ廊下を行けば

コップの中ではこの雨つぶも春の水もひかる

鉢をとりに出掛けよう

つめくさの芽もいちめんそろつてのびだしたし

廊下の向ふで七面鳥は

もいちどゴブルゴブルといふ

女学校ではピアノの音

にはかにかつと陽がさしてくる

これを文語詩化しようとしたのが「未定稿」の「モザイク成
り」であろうか。

モザイク成り、

住人は窓より見るを

何ぞ七面鳥の二所をけちらし窪めしや、

何の花を移してこゝを埋めん

然りたゞ七面鳥なんぢそこに座して動かざれ

然り七鳥面動くも又可なり

なんぢ事務長のひいきする
花

賢治は花巻共立病院のためにドイツトウヒの花壇、エプロン型
花壇、幻想曲風花壇を作った。短篇「花壇工作」によれば、「富沢
先生」と呼ばれる話者の「おれ」は、「おれはおれの創造力に充分
な自信があった。けだし音楽を図形に直すことは自由であるし、
おれはそこへ花で Beethoven の Façade を描くこともできる」と気
負いこんで病院に乗り込み、設計図なしに花壇を作ろうとする。
たくさんの病院関係者が見守る中、意気揚々とするが、そこに院
長がやってくる、「おれ」を差し置いててきぱきと指示を始め、
「おれ」が思っていたのとは違った方向で仕事が進みそうになる。

だめだだめだ。これではどこにも音楽がない。おれの考へて
ゐるのは対称はとりながらごく不規則なモザイクにしてその境
を一尺のみちにして煉瓦をジグザグに埋めてそこへまっ白な石
灰をつめこむ。日がまはるたびに煉瓦のジグザグな影も青く移
る。あとは石灰からと鋸屑で花がなくてもひとつの模様をこさ
えこむ。それなのだ。もう今日はだめだ。設計図を拵えて来て
院長室で二人きりで相談しなければだめだと考へた。
おれはこの愉快な創造の数時間をめちやめちやに壊した窓の
たくさんの顔をできるだけ強い表情でにらみまはした。ところ

が誰もおれを見てみなかった。次におれはその憐れむべき弱い精神の学士を見た。それからあんまり過剰な感応体おれを撲つてやりたいと思った。

宮城一男・高村毅一「賢治が設計した花壇」(『宮沢賢治と植物の世界』築地書館 昭和五十五年四月)によれば、宮城・高村が佐藤隆房に向かつて、作品を読むと賢治と佐藤院長の間で意見が対立したようだが、実際はどうだったのかと問うと、「いやまあ、対立ちゆうほどじゃありませんで、まあ、いってみれば、意思の疎通を欠いたといったところでしような」と答え、作品にあるとおりの「相談」の際には、「賢治君、妥協したんでしような。そして、正方形という限界のなかでいろいろと工夫したわけでしょう。賢治君はそんな人でした。争いごとがあると、自分が身を引くというようなね。もつとも、そのかわり、作品で仇をとったところでしょうかね」と答えている。

佐藤は賢治よりも六歳の年長。賢治が佐藤を崇敬していたことは、「疾中」の「眼にて云ふ」で、「あなたは医学会のお帰りか何かは知りませんが、黒いフロックコートを召して、こんなに本気にいろいろ手あてもしていただけば、これで死んでもまづは文句もありません」とあることからもうかがえるが、そんな町を代表するような有力者に向つて、しかも、「こゝには観る人があつた。北の二階建の方では見知りの町の人たちや富沢先生だ富沢先生だとか云つて囁き合つてゐる村の人たち、南の診察室や手術室のある棟には十三才の聖女テレジアといった風の見習ひの看護婦たちが行つたり来たりしてゐた」ために、賢治はてきぱきと自己主張するということができるのであつたのである。その悔しさ。しかし、それ以上に「あんまり過剰な感応体」である自分自身への悔しさから、賢治はこの文章を書いたのだろう。さて、そんな経緯でできた花壇に花が咲いてからの話が本作である。

宮城・高村(前掲)による佐藤院長へのインタビュによれば、「ちよつとしたトラブルがありましてね」、「東京の種屋から送られてきたチューリップのなかに、黒いのがあつたんですね。どうも不吉だというんで、しかも、それを賢治君は各病室に配つたんです」という。ヒヤシンスではなくチューリップとなつてるのは気になるところだが、赤田秀子(『イーハトーブ・ガーデン』こぼれ話(1))「ワルトラワラ37」ワルトラワラの会 平成二十六年三月)によれば、「賢治の時代にサットン商会の窓口になつていた横浜植木という老舗の園芸会社の担当者から、「戦前は黒いヒヤシンスといえるものはなかったと思う。黒いチューリップなら分りますが」とのことなので、佐藤院長の記憶違いというわけではないのかもしれない。

先行作品の「病院の花壇」では、院長が「神経質の院長は、あんまり薫りが高すぎる／看護、こいつをおまへの室へ持つてけと／さういふことは明かだ」と院長の言動を想像するだけに終わつているが、文語詩の下書稿(一)に、「辛くも起きしいたつきびとは／あなやなにぞといづかりつ」ともあることから、赤田(後掲)も書くように、「推察すれば、おそらく不吉な黒い花を各病室に配つた賢治はひんしゆくを買つたのであろう」。院長が「トラブル」と書いていることから、おそらくは院長と賢治だけの問題ではなく、病院で働くスタッフや入院していた患者たちから直接・間接にクレームがあつたのではないかと思われる。

その次の段階にあたるのは、昭和六年九月頃から十月頃まで使用したと思われる「兄妹像手帳」に書かれた「◎岩手医事への寄稿材料」というメモではないかと思われる。

岡村民雄(『宮沢賢治資料49』「岩手医事」第六号) 宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報47 アンドロメダ星雲 宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成二十五年九月)によれば、「岩手医事」とは、「日々の所感、ユーモアに富んだ事柄」(岩手医事の使命、第二条)を求めるといふ文芸同人誌的な雑誌であり、佐藤

隆房もメンバーであったことから、花壇設計の経験に基づく文の寄稿を考えていたようだ（改行等は元の手帳どおりではない）。

◎岩手医事への寄稿材料

病院花壇設計に関する覚書

- 一、 一草一花も苟にすべからざること
- 二、 色彩に関する覚、
 - イ、色の種類
 - ロ、色の配合
- 三、 花 後の目立たぬもの
- 四、 形に関する
- 五、 数に関する 予備
- 六、 芳香に関する
- 七、 之を要説するにそれ花壇の患者に対するや病癒ゆとせば何の花が明るからざらんや 病癒えずとせば何の花か暗からざるを得ん然らば即ち花壇の設計の如き医療看護の完否に対しては遂に何物にもあらずと云はざるべからず然らばすなわち斯の如き論をなすの要またなし云はん然りこの論 一茶話西邦謂所呉須布の類のみ

共立病院の花壇設計の経験を踏まえたものであることは明らかで、病院における花壇の効用などはゴシップの類だ、と言っている。佐藤医院長との「相談」で解決したはずなのに、心の中では全く解決していなかったということだろう。

実際にこれが発表されることはなかったようだが、おそらくは佐藤の紹介による執筆であろう文章が、完全に佐藤を批判する内容となっており、「ユーモアに富んだ事柄」を載せる雑誌であったにしても、少々ブラックユーモアが効きすぎている感は否めない。

ところで、文語詩には「さもまがつびのすがたして」とあるが、語注で「まがつび」について、「まがつび（あるいは福津日）の語は、「百篇」のみに登場し、本作をはじめ「みちべの苔にまどるめば」、「早俚」に登場すると書いた（「狎れて嘲笑めるはた寒き」には「凶つのみみ」が登場）。そのことは確かなのだが、「凶事」という言葉なら、「五十篇」にも登場している。それが「血のいろにゆがめる月は」である。

「血のいろにゆがめる月は」は、賢治が盛岡中学を卒業した後、慢性副鼻腔炎、つまり蓄膿症で岩手病院に入院し、その後も感染症によって熱が下がらなかつたというが（仙石規「血のいろにゆがめる月は」、『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』 柏プラーノ 平成十二年九月）、この頃の賢治は、中学を卒業しながらも自分は進学が許されず、看護婦へ淡い恋心を抱きながらも両親からは許されないという鬱屈した日々を送つたと言われている。

- ① 血のいろにゆがめる月は、 今宵また桜をのぼり、
患者たち廊のはづれに、 凶事の兆を云へり。
- ② 木がくれのあやなき闇を、 声細くいゆきかへりて、
熱植多し黒き綿羊、 その姿いともあやしき。
- ③ 月しろは鉛糖のごと、 柱列の廊をわたれば、
コカインの白きかほりを、 いそがしくよぎる医師あり。
- ④ しかもあれ春のをとめら、 なべて且つ耐えほゝえみて、
水銀の目盛を数へ、 玲瓏の氷を割きぬ。

本作と「血のいろにゆがめる月は」は、病院を舞台にしていること、そして、まがましい兆しが作品中に現われる点が共通している。まがましい兆しとは、「血のいろにゆがめる月は」

において、黄砂によって月が血の色のようになったことと、本作において黒いヒヤシンスが病院内に活けられるということである。しかし、よく読んでみると、岩手病院の庭に「黒き綿羊」が細い声をあげながら行き来しているのに対して、花巻共立病院でもやはり異様な相貌ともいふべき七面鳥がゴブルゴブルと鳴いており、詩想にも共通する点がある。もちろん七面鳥は黒くないが、ヒヤシンスが黒い。

また、岩手病院においては、おそらく賢治をも含めた患者たちが「廊のはづれに、凶事の兆」について語っていたが、共立病院でも、「辛くも起きしいたつきびとは／あなやなにぞといづか」っている（定稿では患者たちが「窓はむなしくとぎ」し、看護婦たちが「あなやなにぞといづか」っている）。

どちらも、最後には看護婦が登場し、空気を和らげているのも同じである。

詩の形式についても、五七調と七五調の違いこそあるが、二行ずつの四連構成であることも共通しており、単なる偶然と解するには、あまりに二つの詩が「対」をなしているように思えてならない。

もちろん本作と「血のいろにゆがめる月は」では、賢治の立場（患者と花壇設計者）が違ったり、対称とする時代も違うなど、異なる点も多々ある。しかし、木村東吉（『五輪峠紀行詩群』と「岩手軽便鉄道の一月」考、『春と修羅』（第一集）との対称性に注目して）『宮沢賢治《春と修羅 第二集》研究 その動態の解明』（溪水社 平成十二年二月）が、『春と修羅（第一集）』と「春と修羅 第二集」について、「全体的にシンメトリカルな構造をもっている」としていたことを考えると、「五十篇」と「二百篇」でも、それぞれに似た内容、似た構造の作品を意図的に配した可能性もあつたのかもしれない。

ただ、何を意図していたのか、がわからない。

先行研究

佐藤進「病院の花壇の復元」〔賢治の花園 花巻共立病院をめぐる 光太郎・隆房〕地方公論社 平成五年十一月）
伊藤光弥「十三歳の聖テレジア」〔賢治研究72〕 宮沢賢治研究会 平成九年四月）
赤田秀子「日本球根商会在が」〔ワルトラワラ12〕 ワルトラワラの会 平成十一年十一月）

93 庚申

① 歳に七度はた五つ、
庚の申を重ぬれば、
稔らぬ秋を恐みて、
家長ら塚を埋めにき。

② 汗に蝕むまなこゆゑ、
昂の鎖の火の数を、
七つと五つあるはたど、
一つの雲と仰ぎ見き。

大意

一年のうち七度あるいは五度、
庚に申が重なった日がある年は、
稲の稔りが悪いという俗信を恐れて、
農家の家長たちは塚を埋めた。

汗にやられた眼では、
スバルの鎖のように連なった星の数を、
七つか五つ、あるいはただ、
一つの雲のようなものだと仰ぎ見た。

モチーフ

庚申講は、年に六度あるはずの庚申の日が五度あるいは七度ある時には凶作となるという俗信から発したもの（それぞれの地域や

時代によっても内容は異なる)。これを長年の農作業に疲れた目には、スバルを構成する星の数が五つ、あるいは七つに見えるということを重ねたのだろう。本作は賢治が農民の窮状を描いたものだが、目の前にいる彼らの姿をスケッチしたのではない。農民たちに関わる五と七という数字についての詩だと言わなければならない。五と七と言え、この文語詩も五と七の句によってできている。何か思う所もあったかもしれない。

語注

庚申 中国では十干十二支で年月や日時、方位などを表した。

庚申(かのえさる)の日は、六十日ごとに回って来るので、一年のうちで六回あるのが普通だが、七回ある年があり、それを七庚申と呼んだ。また、旧暦では一ヶ月が二十九日ないし三十日しかないのが、五庚申の年も出てくる。七庚申と五庚申の年は、それぞれ凶作になると言われていたので、岩手県下ではこれらの年に供養塔を建てるなどして、災厄を逃れようとした。

ただし、ブログ「庚申塔への想い」(「宮沢賢治の里より」<http://blog.goo.ne.jp/suzukikeimori/> 平成二十一年三月二十五日)によれば、花巻市中鍋倉の庚申講のメンバーだという大正十一年生れの古老が、『五庚申』は滅多に廻ってこずその年は凶作といい伝えられている、「『七庚申』は豊作であると言いつつ伝えられている」と語っていたとのことなので、賢治の認識とはズレがあったかもしれない。庚申講の背景には道教の思想がある。道教には、人間の身中に三尸という虫がおり、庚申の日になると、眠っているうちに体から抜け出して、その人の悪事を天帝に告げ、罰として命を縮められてしまうという説があり、そのために、庚申の日の夜は一家をあけて眠らずに食事をし、語り合うというところが行われたという。これが土俗化し、赤田秀子(後掲)によれば、「花巻周辺の庚申講では、人々は、青面金剛などの掛軸を飾り、宿(ヤド)と呼ばれる当番の家に

集まり、身を清め、となえごとをし、祈ったあと、精進料理を食べ、歓談したと言う。歓談はその年の作柄の話が多く、集落の大切な決め事もそこで話し合われることが常で、事実上の集落の寄り合いとしての機能を果たしていた」という。熊谷章一(「民俗篇」『花巻市史3』昭和五十六年九月「国書刊行会」)によれば、町でも庚申講はあり、「これを信ずると家内安全、商売繁盛、夫婦和合である」という。この考えは相当根強い次にこの日にしてはならない禁忌であるが、男女の同衾である。この日に生まれた子は、よくなればうんとよい子に、悪ければ大悪人になるといつている。又この日に立ちものしては悪いともいう。その他言われていることをあげると庚申の前の日は庚申アレといつて必ず荒れる」と言われているようである。嶋二郎(後掲)によれば、花巻市には二七三の庚申塔があり、内訳は七庚申塔が八三・五%、五庚申塔は一〇・六%、七と五が併記された塔が五・八%となっている。賢治が晩年に使っていた「雨ニモマケズ手帳」には、七庚申と五庚申の図、そして早池峰山、出羽三山、巖鷲山(岩手山の別称)の塚の図、さらに「剣舞供養」の塚の図が書かれている。賢治が庚申講に加わったということはないようだが、これらを俗信として否定するつもりはなかったように感じられる。

七度はた五つ 庚申の日が七回か、または五回ということ。七度は音数の関係から「ななたび」と読ませたかったのであろう。

庚の申 庚申に同じ。読み方は「かのえのさる」。

鼻の鎖の火の数 おうし座の散開星団でプレアデス星団とも呼ばれるスバル星団の星の数のこと。スバルは外国語のようだが、「統べる」(集まる)という意味の日本語で、方言名では六連星(賢治の使用例がある)、集まり星、六地藏星、破風形星、九曜の星などと呼ばれる。実際の星の数は五百ほどあるというが、肉眼で見えるのは六つ程度であることから「六」(あるいは五、十二など)にちなんだ方言名が多い。「二百篇」の「臘月」にも

登場する。賢治が読んでいたとされる『肉眼で見える星の研究』（警醒社書店 大正十一年九月）に「汝プレアデス（昴宿）の鍊索を結び得るや」という旧約聖書のヨブ記の引用がある。「銀河鉄道の夜」にも、「プレシオスの鎖を解かなければならぬ」とあるが、これも聖書由来のもので、スバルのことを指しているものと思われる（ただし須川力（後掲B）は、ケンタウル座のα星の伴星プロクシマを指すのではないかという）。

評釈

先行作品である「春と修羅 第二集」所収の口語詩「五〇六」「そのとき嫁いだ妹に云ふ」一九二五、四、二二」の下書稿(一)の余白に書かれた下書稿(-)（タイトルは「庚申」、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし）。

口語詩「五〇六」「そのとき嫁いだ妹に云ふ」は、はじめは「農民劇団」というタイトルで書きだされたもので、農業に身も心も捧げ、しかし、敬われることもない老農夫たちについて詠んでいる。

そのとき嫁いだ妹に云ふ
十三もある昴の星を

汗に眼を蝕まれ

あるひは五つや七つと数へ

或ひは一つの雲と見る

老いた野原の師父たちのため

老いと病ひになげいては

その子と孫にあざけられ

死にの床では誰ひとり

たゞ安らかにその道を

行けと云はれぬ軀のために

……水音とホップのかほり

青ぐらい峽の月光……

おまへのいまだに頑是なく

赤い毛糸のはっぴを着せた

まなこつぶらな童子をば

舞台の雪と青いあかりにしばらく借せと

……ほのかにしるい並列は

達曾部川の鉄橋の脚……

そこではしづかにこの国の

古い和讃の海が鳴り

地藏菩薩はそのかみの、

母の死による発心を、

眉やはらかに物がたり

孝子は誨へられたるやうに

無心に両手を合すであらう

（菩薩威霊を仮したまへ）

ぎざぎざの黒い崖から

雪融の水が崩れ落ち

種山あたり雲の蛍光

雪か風かの変質が

その高原のしづかな頂部で行はれる

……まなこつぶらな童子をば

しばらくわれに借せといふ……

いまシグナルの暗い青燈

やや観念的、感傷的ではあるが、赤田秀子（後掲）の言うように、この「老いた野原の師父たち」への想いが、文語詩下書稿で「もろびと」へ、そして文語詩定稿で「家長」となり、「老人たちへの同情から、《稔らぬ秋》を恐れる農民全体の主題へと転化」してきている。

文語詩の下書稿(-)は、右にあげた口語詩と同一の用紙の余白に

次のように書かれている。

①歳に七度はた五度

庚は申と重なれば

もろびと巨き石とりて

稔らぬ秋をかしこみぬ

②汗に蝕むまなこゆゑ

昂の鎖の火の数を

あるひは七や五と数へ

あるひは一つの雲と見る

原稿コピーを見ると、まず口語詩の上部に②にあたる部分が書かれ、その後になって右側の余白を使って①が書き込まれたように見える。当初は口語詩全体を文語化しようとして書きだしたものの、上部左側にはまだ余白を多く残しながら、右側余白に新たに書きつけられ、数字もその後には付けられたように見える。おそらくは、後連にあたる部分に七と五の数字を書いたことをきっかけに庚申信仰のことを思い出し、そちらを書くことにしたのである。

賢治は劇「種山ヶ原の夜」で、

伊藤（起きて空を見る）「あゝ霽れだ 霽れだ。天の川まるつき

り廻ってしまったな。」

草刈二、「あれ、庚申さん、あそこさお出やっつてら。」

見廻人「あの大きな青い星あ明の明星だべすか。」

とスバルのことを「庚申さん」と呼ばせており、また、「化物丁場」でも、

その晩は実は、春木場で一杯やったんです。それから小舎に帰

って寝ましたがね、いゝ晩なんです、すっかり晴れて申庚さんなども実にはつきり見えてるんです。あしたは詩もがひどいぞ、砂利も悪くすると凍るぞって云ひながら、寝たんです。

というように使われている。

逆に、「春と修羅 第三集」所収の「七四〇 秋 一九二六、九、二三、」では、庚申塔のことを「昂の塚」と呼んでいる。

江釣子森の脚から半里

荒さんで甘い乱積雲の風の底

稔った稲や赤い萱穂の波のなか

そこに鍋倉上組合の

けらを装った年よりたちが

けさあつまって待つてゐる

恐れた歳のとりいれ近く

わたりの鳥はつぎつぎ渡り

野ばらの藪のガラスの実から

風が刻んだりんだうの花

……里道は白く一すじわたる……

やがて幾重の林のはてに

赤い鳥居や昂の塚や

おのおのの田の熟した稲に

異なる百の因子を数へ

われわれは今日一日をめぐる

青じろいそばの花から

蜂が終りの蜜を運べば

まるめろの香とめぐるい風に

江釣子森の脚から半里

雨つぶ落ちる萱野の岸で
上鍋倉の年よりたちが
けさ集って待つてゐる

しかし、スバルを庚申と呼んでいたという例は報告されていないとのことで、草下英明（後掲）や小倉豊文（後掲）、赤田（後掲）は、賢治の創作であったとする。しかし、あまりにも自然な書き振りのので、賢治が思い違いをしていたとすべきではないかと思う。

本来は六回であるところが五回や七回になってしまふという庚申と、十三個（「五〇六」）そのとき嫁いだ妹に云ふ）あるはずのスバルの星の数が、五つか七つ（あるいは一つ）にしか見えなくなってしまうという農村の重労働を賢治は結びつけ（意図的ではなく）、どちらも農民たちの厳しい生活を反映したものであることに気付いて、本作を書いたのではないだろうか。いや、賢治の記憶違いではなく、庚申講とスバルの星の数を意図的に結び付けようとした可能性もなくはない。

賢治は花巻近郊で信奉する者が多かった隠し念仏については、終始、批判的な立場でいたようだが、同じ民間信仰であっても、「一百篇」の「岩手山巔」にあったような山や石像に対する信仰、また、庚申講に対しては批判的な調子が窺いにくい。農民たちの輪に加わることこそなかったようだが、「稔らぬ秋を恐」れて神仏に祈る気持ちの真摯さに対して、法華経的宇宙観や科学的な世界観を持ち出して論破するような気持ちには、とうていなれなかったということだろう。

そして、この伝統的土俗的な五と七という数が、日本の韻文をずっと支配していた神秘的な数であることについても、執筆途中の賢治は感じていたのではないかと思う。文語詩を思わせるような文言は見つけ出せないが、伝統的な思考が現在にまで受け継がれているという内容は、やはり伝統に則った七五調という形式で

書かれていることと無関係ではないように思う。五と七の神秘を謳う本詩は、自らの詩作について思いをめぐらす詩でもあったように思えるのである。

先行研究

- 草下英明「宮沢賢治と星」〔宮沢賢治研究叢書1 宮沢賢治と星〕
学芸書林 昭和五十年七月）
小倉豊文「剣舞供養」〔「雨ニモマケズ手帳」新考〕 東京創元社
昭和五十三年十二月）
宮沢賢治「そのとき嫁いだ妹に云ふ」〔春と修羅 第二集〕
〔国文学 解釈と教材の研究29―1〕 学燈社 昭和五十九年一
月）
須川力A「星空を仰いで」〔星の世界 宮沢賢治とともに〕 そし
えて 昭和五十九年八月）
須川力B「四季の星座」〔星の世界 宮沢賢治とともに〕 そしえ
て 昭和五十九年八月）
須川力C「賢治のスカイ・ウォッチングⅧ1Ⅴ」〔賢治研究47〕
宮沢賢治研究会 昭和六十三年六月）
嶋二郎「宮沢賢治と庚申信仰」〔花巻市文化財調査報告書22〕 花
巻市教育委員会 平成八年三月）
吉田精美「花巻市材木町・嶋二郎氏邸」〔新訂 宮沢賢治の碑・全
国版〕 花巻市文化団体協議会 平成十二年五月）
赤田秀子「庚申」〔宮沢賢治 文語詩の森 第三集〕 柏プラーノ
平成十四年七月）
板谷栄城「庚申 ラーマーヤナからの影響」〔賢治小景〕 熊谷印
刷出版部 平成十七年十一月）
奥本淳恵「『春と修羅』第一集」所収詩篇「昴」 〆昴〰の意味
するもの」〔論攷宮沢賢治10〕 中四国宮沢賢治研究会 平成二
十四年一月）

①みねの雪よりいくそたび、
 萌えし柏をとどろかし、
 風はあをあを崩れ来て、
 きみかげさうを軋らしむ。

②おのれと影とたゞふたり、
 ひねもす白き眼して、
 あれと云はれし業なれば、
 放牧の柵をつくろひぬ。

大意

峰の雪から何十回ともなく、
 吹いて来て、
 萌えはじめた柏林をとどろかせ、
 風はあおあおと崩れ落ちるよう
 スズランの花を揺らせる。

自分とその影との二人だけで、
 一日じゅう白い眼をして、
 一緒にいると言われた仕事な
 放牧のための柵の修繕に精を出す。

モチーフ

岩手山麓で影だけを相棒として共同作業に勤しむ人を描いている。
 賢治がここで「賦役」に参加しなければいけなかった必然性はな
 いので、自分が見たことを一人称的に書いたのかもしれないし、
 羅須地人協会時代の「賦役」の経験が踏まえながら虚構化してい
 たのかもしれない。「あれ」の解釈次第では、共同作業ならぬ一人
 作業をするしかないという孤独感を綴った作品なのかもしれない。

語注

賦役 「ふ(ぶ)えき」、「ふ(ぶ)やく」とさまざまに読む場合
 があり、読み方は特定しにくい。中村稔(後掲)は「賦役とは
 本来は公に収める調租と公に使役される労働とをいうが、ここ

では小作農民が地主に命じられてする強制労働を意味するであ
 ろう」とし、佐藤通雅(後掲)も、「農民が地主にたいして労働
 ではらう地代、すなわち労働地代のことだ」とするが、『日本国
 語大辞典』に方言(ただし、香川県高見島)としてあげられた
 「村の仕事を各戸に割り当て、無報酬で行なうこと。共同勞
 作」と考えるべきだろう。「春と修羅 第三集」に「七三五 饗宴
 一九二六、九、五、」があり、ここには「みんなは地主や賦役
 に出ない人たちから／集めた酒を飲んでゐる」とあり、伊藤博
 美(「饗宴」の舞台)「賢治研究42」宮沢賢治研究会 昭和六
 十二年一月)は、「ここでの賦役は、農民の払う労働地代のこと
 ではなく、村の共同労役のことである。個人の所有する橋では
 ないし、小作地専用の橋でもないからである」としている。
 きみかげさう ユリ科の多年草であるスズランのこと。本州の中
 部より北にある高地に自生する。

あれと云はれし業 「あれ」の解釈は難しい。佐藤(後掲)も、
 「よくわからない」とするが、「ひねもす白き眼して、」は不満
 のしぐさだから、「やれと命令された仕事だから」と解すること
 ができる」とする。ただ、「あれ」と「やれ」を、発音上・意味
 上で混同することはあまりないし、下書稿(一)から定稿までずつ
 と「あれ」のままなので、「おのれと影とたゞふたりであれと言
 われた」とも解釈できよう。共同作業とはいいいながら、村人と
 一緒に汗を流すのではなく、影と二人だけで一緒にいると言わ
 れること、つまり共同作業の中の孤独を引き立たせようとした
 のかもしれない。

放牧 作品の舞台は、岩手山東方の裾野、柳沢のあたりであるよ
 うだが、そこから考えると、馬の放牧がさかんであったので、
 その柵を共同作業で修理するということなのだろう。賢治自身
 の経験を詠んだのではなく、自身の経験や心情を虚構化したか、
 第三者を描いたものだと考えられる。

評釈

「孔雀印手帳」に書かれた下書稿(一)、黄野(2222行)詩稿用紙の裏面に「未定稿」の「中尊寺(二二)」、「火渡り」とともに書かれた下書稿(二)(鉛筆で⑤)、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

まず下書稿(一)から見てみたい。

◎あをあをゆらぐ雪のみね

風は谷より崩れきて

萌えし柏をとどろかし

きみかげさうを軋らしむ

おのれと影とたゞふたり

あれと云はれしわざゆゑに

ひねもすしろきまなこして

放牧の柵をつくるひぬ

「孔雀印手帳」が使用されたのは昭和三年八月の発病以前と昭和六年五月上旬から七月以降とされているが、八一〜八八ページを空白にし、その次の八九ページにこれが載っており、見開きの九十ページには「五十篇」の「夜をま青き藺むしろに」の下書稿(三)が書かれている。書き方や筆記用具から同じ時に書かれたものだと思われるが、両作品が内容的に強く関連しているようには思えない。

本作の関連作品について言及されたことはないようだが、「五十篇」の「きみにならびて野にたてば」は関連が深いように思う。

①きみにならびて野にたてば、
柏ばやしをとどろかし、

風きららかに吹ききたり、
枯葉を雪にまろばしぬ。

②げにもひかりの群青や、
鳥はその巢やつくろはん、
山のけむりのこなたにも、
ちぎれの艸をついばみぬ。

まず目につくのは、柏ばやしの中を風がとどろいて吹き抜けていくところだろう。そして、ダジャレめくが、「きみにならびて」と「キミカゲソウ」にも関連をもたせようとした気がする。さらに「賦役」では、自分と影のことを「ふたり」とし、その「ふたり」が柵を「つくる」うのだと書いてあるが、「きみにならびて野にたてば」の方でも、「ふたり」の関係を暗示するかのようには鳥が自分たちの巢を「つくるはん」となっている。

賦役という言葉や内容の違いのためもあって、なかなか「きみにならびて野にたてば」との繋がりは見出しにくいかもしれないが、こうして言葉の一致や類似を考えてみると、偶然であるとは思えない。

木村東吉(『五輪峠紀行詩群』と「岩手軽便鉄道の一ヶ月」考『春と修羅』(第一集)との対称性に注目して)、『宮沢賢治『春と修羅 第二集』研究その動態の解明』(溪水社 平成十二年二月)は、『春と修羅(第一集)』と「春と修羅 第二集」について、「全体的にシンメトリカルな構造をもっている」としたが、「五十篇」と「一百篇」でも、賢治がそれぞれ似た内容、似た構造の作品を、意図的に配した可能性が考えられてもよいように思う。

「秘事念仏の大師匠」(一一)と「秘事念仏の大師匠」(二二)、「車中(一一)」と「車中(二二)」は、タイトルが同じだということからもわかりやすく、登場人物やテーマにも共通性が見いだせるが、先に指摘した「五十篇」の「血のいろにゆがめる月は」と「一百篇」の「日本球根商會が」や、この「きみにならびて野にたてば」と「賦役」の類似性については、少しわかりにくい。なぜこのような方法を取ったのか、また、別の「対」がなかったのかについては、まだ不明な点も多いが、今後の課題にしたいと思う。

ところで、岩手山麓の柳沢付近の放牧地で賢治が「賦役」に参加したというようなことは、伝記的に考えにくい。

『新校本全集』の索引を使って賦役を使った例を調べてみると、「春と修羅 第三集」所収の「七三五 饗宴 一九二六、九、三、」とその発展形である「みんなは酸っぱい胡瓜を噛んで」、それを文語詩化した「未定稿」の「ひとびと酸き胡瓜を噛み」が見つかった。

酸っぱい胡瓜をぼくぼく噛んで

みんなは酒を飲んでゐる

……土橋は曇りの午前にできて

いまうら青い櫓のけむりは

稲いちめん^に這ひかゝり

そのせきぶちの杉や櫓には

雨がどしやどしや注いでゐる……

みんなは地主や賦役に出ない人たちから

集めた酒を飲んでゐる

……われにもあらず

ぼんやり稲の種類を云ふ

こゝは天山路であるか……

さつき十ぺん

あの赤砂利をかつがせられた

顔のむくんだ弱さうな子が

みんなのうしろの板の間で

座って素麵^をたべてゐる

(紫雲英植れば米とれるてが

藁ばりとつたて間に合あなじや)

こどもはむぎを食ふのをやめて

ちらつとこつちをぬすみみる

語注にも書いたとおり、「こゝでの賦役は、農民の払う労働地代のことではなく、村の共同労役のこと」(伊藤博美「饗宴」の舞台)「賢治研究42」宮沢賢治研究会 昭和六十二年一月)だと思われるが、おそらくは地人協会周辺の土橋の修繕を共同ですることになったのだらう。義務として、賢治もそれに参加することについて異論はなかったと思うが、佐藤寛(「饗宴 解説(2)」主として農民をうたへる詩について)「四次元24」宮沢賢治研究会 昭和二十六年十二月)が言うように、「何かにかこつけては酒を飲む——これは東北の農村の因襲のやうになつて」いたようで、賢治は「あつちもこつちも／ひとさわぎおこして／いっぱい呑みたいやつらばかりだ」(「詩ノート」「一〇五三 政治家 一九二七、五、三、二」というような状況を目の当たりにするのが不快だったのだと思われる。

とはいえ賢治も賦役というシステム、また、酒を飲むことに依るストレス発散について、ある程度の意義は認めていただらうと思う。ただ、その輪に積極的に入っているほどにはオトナになりきれなかった、ということだらう。

賢治は素麵をたべるこどもに救いを求めようとするのだが、こどもは賢治の方を「ちらつとこつちをぬすみみる」。つまり、賢治はこどもにとつても「あつち」の人間であり、「ぬすみみる」対象であつたわけである。

ここで「春と修羅(第三集)」の「一〇四二」(同心町の夜あけがた)「一九二七、四、二二、」における程吉の「横眼」を思い浮かべるのは自然なことだらう。

同心町の夜あけがた

一列の淡い電燈

春めいた浅葱いろしたもやのなかから

ぼんやりけぶる東のそらの

海泡石のこつちの方を

馬をひいてわたくしにならび
 町をさしてあるきながら
 程吉はまた横眼でみる
 わたくしのレアカーのなかの
 青い雪菜が原因ならば
 それは一種の嫉視であるが
 乾いて軽く明日は消える
 切りとつてきた六本の
 ヒアシンスの穂が原因ならば
 それもなかばは嫉視であつて
 わたくしはそれを作らなければそれで済む
 どんな奇怪な考が
 わたくしにあるかはかりかねて
 さういふふうに見るならば
 それは懼れて見るといふ
 わたくしはもつと明らかに物を云ひ
 あたり前にしばらく行動すれば
 間もなくそれは消えるであらう
 われわれ学校を出て来たもの
 われわれ町に育つたもの
 われわれ月給をとつたことのあるもの
 それ全体への疑ひや
 漠然とした反感ならば
 容易にこれは抜き得ない

「おのれと影とたゞふたり、あれと云はれし業なれば」は、
 「あれ」を「やれ」に置き換えると、佐藤通雅（後掲）の言うよ
 うに「やれと命令された仕事だから」と考えることが可能で、賦
 役の辛さ、共同作業の辛さを書いた詩となろう。ただ、「あれ」を
 文字通り「在れ」であつたと解すると、「自分と影の二人だけでい

つづけると言われた作業なので」ということになり、それが共同
 作業である賦役をするよりもつらい経験、すなわち、共同の中で
 ただ一人で（影と二人だけ）居続けるという扱いを受けていると
 いうことになる。まだ、そう断言するだけの根拠が、我ながら十
 分だとは言えないのだが、ひとまず共同作業の中の孤独という方
 向で読んでみることを提案したい。

先行研究

中村稔「鑑賞」『日本の詩歌18 新訂版 宮沢賢治』 中央公論社
 昭和五十四年九月
 佐藤通雅「二冊の手帖」『宮沢賢治 東北砕石工場技師論』 洋々
 社 平成十二年二月

95 「商人ら やみていぶせきわれ
 をあざみ」

① 商人ら、やみていぶせきわれをあざみ、
 川ははるかかの峽に鳴る。

② ましろきそらの蔓むらに、 雨をいとなむみそさざい、
 黒き砂糖の樽かげを、 ひそかにわたる昼の猫。

③ 病みに恥つむこの郷を、
 つめたくすぎる春の風かな。

大意

商人たちは、病気でみすばらしい自分を嘲けり、
 川の音は谷合の町の隅々まで鳴り響く。

まつしろな空を草むらのようにして、雨の中を飛び交うのはミソサザイ、黒い砂糖の入った樽の陰を、ひっそりと歩くのは昼の猫である。病気になって恥ばかりが増えてくるこの町で、冷たい春の風はくすぐるように吹き抜けていく。

モチーフ

東北砕石工場でのセールスマン時代に使っていた「王冠印手帳」にあったメモから生まれた作品。病を抱えながら店や展示会などを回り、恥を積んでいると思いつながらの仕事は、肉体的にも精神的にも相当なものであったと思われる。本作は「五十篇」の「打身の床をいできたり」と同時に生まれた作品だが、成立事情は複雑で、考えようによっては、「五十篇」と「二百篇」に対する考え方を考え直す必要も出てくるかもしれない。

語注

いぶせき みすばらしい、汚い、不愉快、という意味に加えて、気味が悪い、恐ろしい、危険に見えるといった意味も含んでいる。東北砕石工場の賢治が肺を病んでいたので、その意味で「肺病持ち」として嫌われたということかもしれない。
みそさざい スズメ目ミソサザイ科の黒褐色の鳥。地味で目立たないが、冬には人里に降り、初夏には山地の溪流付近の森に移る。オスは高く澄んだ声で囀る。

評釈

本作は「五十篇」の「[打身の床をいできたり]」の下書稿から定稿に移されている。源流は「王冠印手帳」に書かれた二つのメモ（下書稿(一)、(二)）で、このうち下書稿(一)を改めて黄野（220行）詩稿用紙に書かれたのが下書稿(二)。その余白に下書稿(一)の要

素を加えて書き直し、青インクで⑦、鉛筆で⑧が付けられた下書稿(二)。「新校本全集」では、この「下書稿(二)」に⑨があることから、本作の定稿が書かれたのだとしている（『第十六卷（上）補遺・資料補遺・資料篇』では、「商人らやみていぶせきわれをあざみ」の項に、「下書稿(四)」とあったものは「下書稿(二)」の誤りだったと訂正されている）。「新校本全集」に本作の成立事情の複雑さについての長めのコメントがある。煩雑だが、文語詩の成立とその特徴を考えるための資料として引用しておきたい。

A群

下書稿(一)

B群

下書稿(二)

C群

「商人ら…」

下書稿(二)初形

下書稿(二)

下書稿(二) (⑨あり)

終形

下書稿(三)

下書稿(四)

「商人ら…」
定稿

下書稿(五)

清書稿

定稿

表のようにして、定稿に至っていると考えられるが、「下書稿(二)」には、⑨の文字があり、他に⑨はない。⑨は、他例から推す

と、下書稿最終段階で、定稿の直前のものに書かれている。つまり定稿へ写したの意と見られる。

本稿の場合、途中段階に㊦があることは、ここから定稿が作られたと見ていいであろう。それが「商人ら やみていぶせきわれをあざみ」の定稿と考えられる。

「商人ら やみていぶせきわれをあざみ」の方が先に書かれたとする方が、右の逐次形の配列からは自然であるが、「文語詩稿 一百篇」と「文語詩稿 五十篇」のまとめられた時点から見ると「打身の床をいできたり」までまとめて「文語詩稿 五十篇」へ組み入れた後、B群の要素捨てがたく、「下書稿(二)」から、「商人ら やみていぶせきわれをあざみ」が書かれた、と考えられよう。

しかし、下書稿(三)は、「商人ら／疾みてはかなきわれを嘲り／川ははるかの峡に鳴る」で始まっており、この他にも定稿と共通する詩句が多いことから、明らかに「商人ら やみていぶせきわれをあざみ」の先行形態だと言いうことができる。つまり㊦が書かれた後にも推敲が続けられていたということである。

島田隆輔(「写稿論」『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』朝文社 平成十七年十二月)は、㊦が「定稿として写すべきもの」を意味するのは確かであるにしても、㊦の付与された後の手入れが生かされている例、また「一百篇」の「小きメリヤス塩の魚」のように㊦の後に原稿を新しく書く場合があったことも指摘している。本作における㊦もそのように解されるべきものだと思う。

実は『新校本全集』にも、下書稿(三)について、「手入れはなされていいない。なお、太いえんびつの横線が詩稿上に引いてある。この稿を他へ移した意味の印であろうか」とあるので、右に引用したような解釈に迷いがあったようにも思える。

たしかに下書稿(三)よりも下書稿(二)の方に定稿と同じ語が見られる箇所もあり、なかなかスッキリした解釈は見つかりそうにない。

しかし、下書稿(三)が「商人ら やみていぶせきわれをあざみ」の先行形態であることだけは確実である。

さて、下書稿を順に追っていこう。下書稿(一)、(二)は、東北砕石工場時代に使っていた「王冠印手帳」に、当時の賢治の心境を語るかのように走り書きされたものだが、四三〜四五ページに記された下書稿(一)とされるものは次のとおり。

あらたなるよきみちを得しといふことは
たゞあらたなる

なやみのみちを得しといふのみ

このことむしろ正しくて
あかるからんと思ひしに
はやくもこゝにあらたなる
なやみぞつもりそめにけり

あゝいつの日か弱なる
わが身恥なく生くるを得んや

野の雪はいまかゞやきて
遠の山藍のいろせり

肥料屋の用事をもつて
組合にさこそは行くと

病めるがゆゑにうらぎりしと
さこそはひと唱へしか

続いて二二一・二二二ページに記された下書稿(二)は次のとおり。

農民ら病みてはかなきわれを嘲り
小雨の春のそらに居て
その蔓むらに鳥らゐて
雨にその小胸をふくらばす

さてははるかに鳴る川と
冷えてさびしきゴム沓や
あゝあざけりと辱しめ
もなかを風の過ぎ行けば
小鳥の一羽尾をひろげ
一羽は波を描き飛ぶ

賢治は昭和三年夏に体調を崩し、羅須地人協会の試みを諦めざるを得ない状態となったが、自宅で病氣療養をしている間に東北砕石工場の鈴木東蔵と知り合い、やや病状の回復した昭和六年二月二十一日には同工場の嘱託技師となっている。岩手県は酸性土壌で、植物の生育に関して支障があったが、同工場の生産する石灰岩の粉末は土壌改良に効果があり、賢治の師・関豊太郎教授も賢治がこの事業に関わることに賛意を表していた。またこれは賢治をなんとか実業につけようと考えていた父にとつて、そして羅須地人協会の試みに失敗し、それにかわる何かができないかと考えていた賢治にとつても、願ってもないチャンスであったと思われる。

これが下書稿(一)に「あらたなるよきみち」と書かれた所以であろう。しかし「王冠印手帳」には、「いやしくも身をへりくだし／ひとひつかれしとて／夜汽車のなかにまどろめば／せなまた怪しく熱くして」とあるように、精神的にも肉体的にも無理を強いられた。そして「あらたなるよきみち」は「あらたなるなやみのみち」にも容易に転化していったのだと思われる。

下書稿(一)ではセールスマン賢治が農民の元に向かうと「病める

がゆゑにうらぎりし」と言われたのが、下書稿(一)では「農民ら病みてはかなきわれを嘲り」と変化し、下書稿(二)では「商人ら」が「やみていぶせきわれをあざけ」ることとなっている。

商人ら
やみていぶせきわれをあざけり
川ははるかの峽に鳴る
ましろきそらの蔓むらに
雨をいとなむみそさゞぬ
かばんんつるせし赤髪の子

恥いや積まんこの春を
つめたくすぐる春の風かな

新しい黄野(220行)詩稿用紙に「病起」というタイトルで書きはじめられるのが下書稿(三)で、本作「商人ら やみていぶせきわれをあざみ」の先行形態となるが、その裏面には「五十篇」の「打身の床をいできたり」の先行形態となる下書稿「米穀肥料商」が書かれ、これが下書稿(四)となっている。紙の表と裏だが、「川ははるかの峽に鳴る」「黒の(き)砂糖の樽かげを／さびしく(ひそかに)わたるひるの猫」など、ほぼ同一の句もあり、詩句は「対」になっていると言えそうだ。手入れ後の形態をあげてみたい。

病起 下書稿(三)
商人ら
疾みてはかなきわれを嘲り
川ははるかの峽に鳴る

米穀肥料商 下書稿(四)
①打身の床をいできたり
箱の火鉢にうちゐする
②粉のたばこをひねりつゝ

ましるきそらの蔓むらに

見あぐるそらの雨もよひ

雨をいとなむみそさざい

③ 黒き砂糖の樽かげを

黒き砂糖の樽かげを

ひそかにわたるひるの猫

さびしくわたるひるの猫

④ 人なき店の春寒み

げに恥積まんこの春を

川ははるかの峡に鳴る

下書稿(三)の系統では、肥料を店で扱ってもらおうように頼みにいくセールスマンの恥を積むような心情が語られているが、下書稿(四)の系統では「商人」の側の心情が書かれている。

「〔打身の床をいできたり〕」の「評釈」(信時哲郎 後掲)で、

賢治は「推敲の過程で我と彼とを入れ替えてしまうということは、後代の読者が想像するよりもずっとたやすく行ったように思われる」として、鹿と人間の違いを忘れて鹿たちの踊りの輪に飛び込んでしまう童話「鹿踊りのはじまり」や、敵であったはずの者に同情してしまう「鳥の北斗七星」や「大礼服の例外的効果」などを例にあげてこの事態について論じたとおりである。

下書稿(五)を経て、『新校本全集』で、「何かに発表することを予定したような清書」とされる清書稿は次のようなものだ。

打身の床をいできたり
箱の火鉢にうちぬれば
人なき店のひるすぎを
雪げの川の音すなり

粉のたばこをひねりつゝ
見あぐるそらの雨もよひ
黒き砂糖の樽蔭を
ひそかにわたる白の猫。

この直後に書かれた定稿では、末尾の二行が「殻売町のかなたにて、／＼人らほのかに祝ふらし。」に改められる。この二行は下書稿(三)、下書稿(四)、下書稿(五)と受け継がれていたものだが、突然この二行だけが改められているのである。

しかし、このフレーズが気に入らなかつたということではない。このフレーズは「二百篇」の「商人ら やみていぶせきわれをあざみ」の定稿の方で「黒き砂糖の樽かげを、ひそかにわたる昼の猫。」として使われることになるからだ。重複を避けたのだろう。が、そうするとややこしい問題が生じる。下書稿(三)(あるいは下書稿(四))から「二百篇」の定稿「商人ら やみていぶせきわれをあざみ」ができたのは確認してきたとおりだが、その定稿中の詩句が決まってから、時間的には早くできたときとされている。「五十篇」の定稿「〔打身の床をいできたり〕」が成立したとなると、「五十篇」と「二百篇」のクロノロジーがくるってしまうのである。

賢治は、定稿をはさんでいた厚手の和紙に「五十篇」を「八月十五日」に「定稿とす」と書き、「二百篇」を「八月廿二日」に「定稿となす」と書いたと言われている。もしも、「二百篇」の定稿ができた後に「五十篇」の定稿が成立したとすると、この日付がおかしいことになる。もともと、所詮は賢治が心覚えに書いた言葉である。『春と修羅(第一集)』の刊行後の初版本にさえ、賢治は推敲の手を入れたことが広く知られているが、だとすれば、文語詩についても、賢治自らが宣言した「定稿と(な)す」の言葉信じ切ってしまうことこそ、実は愚かな試みだったのかもしれない。

あるいは、「五十篇」と「二百篇」が完成した後、何らかの思いから「五十篇」所収の「〔打身の床をいできたり〕」と「二百篇」所収の「商人ら やみていぶせきわれをあざみ」を入れ替えたということがあったのかもしれない。

この一例だけから、「五十篇」と「二百篇」を書いた順序、あるいは定稿として日付けまで書いた後になって内容を差し替えた可能性について主張するのは、文語詩の制作事情について根本から疑うことにもなりかねないが、賢治の文語詩を読むということは、常にこうした問題を孕んでいることについて、改めて自戒したいと思う。

先行研究

山内修「非在の個へ」(『宮沢賢治 研究ノート受苦と祈り』 河出書房新社 平成元年十一月)
島田隆輔A「文語詩稿」構想試論『五十篇』と『一百篇』の差異」『国語教育論叢4』 島根大学教育学部国文学会 平成六年二月)
佐藤通雅「二冊の手帖」(『宮沢賢治 東北砕石工場技師論』 洋々社 平成十二年二月)
杉浦静「打身の床をいできたり」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』 柏プラーノ 平成十二年九月)
信時哲郎「打身の床をいできたり」(『宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈』 朝文社 平成二十二年十二月)
島田隆輔B「打身の床をいできたり」(『宮沢賢治研究 文語詩稿 五十篇訳注1』 「未刊行」 平成二十三年三月)

96 風底

雪けむり閃めき過ぎて、 ひとしばし汗をぬぐへば、
布づつみになふ時計の、 リリリリとひびきふるへる。

大意

雪けむりがきらめいて風に流れ、 しばし汗をぬぐうと、

布に包んで持って来た時計が、 リリリリと響いてふるえた。

モチーフ

雪けむりがきらめいて吹きすぎ、しばし汗をぬぐうと、その途端に風呂敷包みの中の目覚まし時計が鳴りだした、というだけの詩。俳句的な取り合わせだが、壮大な自然と生活の両方が描かれた秀作だと思う。ただ、よく考えてみると、アナログの目覚まし時計であろうから、十二時間前の深夜(早朝)に鳴り、おそらく「ひと」はその時以来、ずっと眠っていないことが想像できる。その状態で雪道を歩くというのはいへんなことで、危険でさえある。まして東北砕石工場時代の賢治がモデルであったとすれば、ほとんど自殺行為と言わなければならない。しかし、本作はそのような詮索などしなくても十分に鑑賞が可能だ。労働を描くことが、そのまま芸術になったという稀有の例かもしれない。

語注

風底 『日本国語大辞典』や『大漢和辞典』、『望月仏教大辞典』等にも見つかからないが、賢治作品に「風の底」の用例は多く、「春と修羅 第二集」の「五一」(「はつれて軋る手袋と」 一九二五、四、二)の下書稿(一)の手入れ段階には、「丘いちめん／＼風がごうごう鳴ってゐる／＼そしてこゝはしづかな風の底なので／＼笹がすこしさわぐきり／＼かれ草はみな／＼ニッケルのアマルガムで／＼眠さも沼になつてゐる」とあり、地形的には似ているのではないかと思う。住田美知子(後掲)は、「上空で風が舞い、空気の量を感じさせる、平らな場所であり、広義には、気層の底、気圏の底、光の底と繋がっていると解釈できる」とする。

布づつみ おそらく風呂敷のことだろう。風呂敷の用例としては、「春と修羅 第三集」の「二〇二」(「甲助今朝まだくらあに」 一九二七、三、二二)や童話「銀河鉄道の夜」の鳥捕りが驚

を包むのに使っており、第一次産業従事者の持ち物として描かれることが多いようだ。「初期短編綴等」の短篇「電車」では、登場人物を「むしやくしやした若い古物商 紋付と黄の風呂敷」と設定して、制服制帽の大学生と口論させていた。また、弟の清六（「兄のトランク」『兄のトランク』筑摩書房 平成三年十二月）が、「あれは茶色なズックを貼った大きなトランクだった。大正十年七月に、兄はそいつを神田あたりで買ったということだ」と述懐するトランクのことも思い浮かぶ。清六によれば、賢治が昭和六年に東北砕石工場で働きはじめることになると「その大トランクは蔵から持ち出されることになった」とあり、ここにたくさんの製品見本を詰めていたのだというが、雪の中を大きな風呂敷を持ちながら歩いてきた「ひと」には、ズックを貼ったセールスマン時代の賢治をイメージすることもできそうだ。

時計 「リリリリ」と鳴っていることから、目覚まし時計である。『日本大百科全書』には、「目覚し装置そのものはすでに機械時計初期から存在し、今日ではクロックの過半数が目覚しである。腕時計については1947年スイスのバルカン社が初めてCricket（コオロギ）と名づけた製品を市販した」とある。目覚まし機能付きの懐中時計もあったらしいが、希少で値段も高かったというので、ここでは置時計であろう。精工舎（現・セイコーウオッチ株式会社）では明治三十二年から製造を開始したというが、大正五年頃から製造が始まった精工舎の山形両鈴時計は大正五年のカタログによれば二円十銭だったという（「TIME KEEPER 古時計」のホームページ <http://www.kodokei.com/>）。腕時計に比べればずっと安価だったので、旅を仕事とするような人であれば携帯していたのだろう。

評釈

定稿用紙に書かれた定稿のみ現存。生前発表なし。

下書稿も存在せず、関連作品の指摘もない作品だが、後掲の内村剛介や住田美知子、大沢正善らの論者は、こぞって本作を絶賛する。大沢は次のように書いている。

地吹雪がひとしきり吹き止んで、「ひと」が汗をぬぐったことと、風呂敷の中の時計が鳴り響いたこととは、単に偶然に生じた継起的な関係にすぎないであろう。しかし、その稀薄なはずの因果関係は、稀薄なだけにおさら人知を超えた「宇宙的な進行」であるかのような印象を残す。それが、真っ白な「雪けむり」とその直後の静止した「風底」に時計のベルの音が偏在して行く、という透明なと形容したい物語を生み出すのである。

もはや付け足す言葉もない気もするが、無粋ながら作品の背景について考えてみたい。

まず、風呂敷の中で目覚まし時計が鳴るということについて考えてみる。

目覚まし時計をもつて歩いているということから視点人物は旅の途中にあることが分かる。そして、当時は電池式の時計などなかったのも、前日か前々日に「ひと」がネジを巻いたのだということになる。もしも時計の行商人であったら、わざわざ商品の品物のネジを巻くことはないの、目覚まし時計を携帯しながら旅をする人だろう。

そして、急に鳴りだした目覚まし時計は、おそらく十二時間前にも鳴っている。当時はベルの鳴る時間を二十四時間で設定できなかったのも、ベルを止めるためのスイッチがオフになっただけで、目覚まし時計は一日に二回鳴る。おそらく「ひと」は、今朝、この目覚まし時計によって起床したのだろうが、その時にきちんとスイッチを押して音を止めたはずだ。しかし、風呂敷の中の何かがこのスイッチに接触するなどの理由から、止めてあったはずのスイッチが勝手にオンとなり、とぼけた時間に鳴りだしたということだろう。

どんなに風呂敷の中がゴチャゴチャしていたとしても、ベルの鳴る時間を設定する針が勝手に動くということは考えにくい。

では、目覚まし時計が鳴ったのは何時だろう。「雪けむり」が「閃めき過ぎて」いることから考えれば、太陽の出ている時間帯である。岩手の冬であれば、朝の九時から十六時の間くらいということになるだろうか。その十二時間前に目覚ましを鳴らしたのだとすると、午後九時から午前四時の間に目覚ましをセットしたということになるが、午後九時、午後十時、午後十一時……に目覚ましをかけて眠りに就くということは、まずないと思われる。そう思えば、午前三時から午前四時頃に、夜汽車に乗るためか、あるいは遠い雪道を歩いていく必要があったために目覚ましをかけていたのだということになるだろう。

いずれにせよ、この「ひと」の旅程はハードである。というのも、夜汽車に乗った場合、車中でうとうとするくらいはできたかもしれないが、午前三時から午前四時から、午後の三時から四時まで、ずっと安眠することもできず、目的地向かっていたことになるからだ。もしも未明からずっと歩き通しであったなら、その疲労のはなはだしさはそうとうなものだっただろう。歩きに歩いているため、やつと風の底ともいうべき場所（あるいは吹雪が止んだ時間）までやってきたというのに、汗までかいている始末である。

もしかしたら、時計を買ってから使ったのが初めてだったのだ、おかしな時間に目覚ましでデフォルト設定されていたということだったのかもしれない。あるいは、以前に使った際に、たまたま真昼の時間を設定しており、それを修正することなく旅に出ってしまった可能性もある。ただ、目覚まし時計というものは、そうそう買い換えるものでもないし、大幅に時間を前にしたり、後にしたりすることもないはずだ（昼と夜が逆転することのある私などは、アラーム設定の午前と午後を間違えて寝過ぎすこともあるのだが……）。たしかに大沢（後掲）が書くように、この詩は美しく、冬の寒さと厳しさを描くと共に、雪の白さまで見えてくるような、そして、

どこかしらユーモアも湛えた秀作であると思う。しかし、たとえ夜汽車の中でうとうとすることがあったとしても、睡眠不足の状態での雪道を汗をかくまでに歩くということは、肉体的には相当にハードである。

もし、ここに登場する「ひと」がセールスマン時代の賢治であったとしたらどうだろう。雪けむりの日に汗までかいていることからすると、「布づつみ」の中には、目覚まし時計だけでなく、東北砕石工場の製品見本も入っていたのかもしれない。だとすれば、すでに肺を病んでいた賢治にとつて、ほとんど自殺行為だったのではないだろうか。

下書稿もなく、先行作品や関連作品の指摘もされていない二行の詩に過ぎないので、これ以上の詮索はできないが、本作が極限的な状況で旅を続けている「ひと」を描いた作品だということは明らかだと思う（レジャーの旅であったにしても命がけ、である）。

賢治は「農民芸術概論綱要」で、「おお朋だちよ いっしょに正しい力を併せ われらのすべての田園とわれらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の芸術に創りあげようでないか」と書いていた。賢治が求めていたものは、階級闘争や革命のためのプロレタリア文学ではなく、労働そのものが芸術であるような文学であった。童話「マリヴロンと少女」には、「正しく清くはたらくひとはひとつの大きな芸術を時間のうしろにつくるのです」とも書いていた。労働の厳しさを描いていながらも、ひとことも労働に触れず、その厳しさに触れず、しかし、周りの風景までもが美しく感じられるような本作は、最高レベルの文語詩であり、また労働詩でもあったように思うのである。

先行研究

内村剛介「ホワイト・ホールのなかの時間」（『ユリイカ』9-10）

青土社 昭和五十二年九月）

住田美知子「風底」（『宮沢賢治 文語詩の森』 柏プラーノ 平成十

一年六月)

大沢正善「宮沢賢治の文語詩」(『文芸研究150』 日本文芸研究会

平成十二年九月)

赤田秀子「文語詩を読むその4 「かれ草の雪とけたれば」を中心に」(『ワルトラワラ15』 ワルトラワラの会 平成十三年十一月)

97 「雪げの水に涵されし」

①雪げの水に涵されし、
犬の皮着てたゞひとり、

御料草地のどての上、
藁外線をい行くもの。

②ひかりとゞろく雪代の、
兎のごとく跳ねたるは、

土手のきれ目をせな円み、
かの耳しひの牧夫なるらん。

大意

雪解けの水にひたされた、
犬の毛皮を着てただ一人、

御料草地の土手の上に、
紫外線の中を行く者がいる。

光が雪解け水に乱反射し、
ウサギのように跳ねているのは、

土手の切れ目で背中を丸め、
あの耳の聞こえない牧夫であ
ろう。

モチーフ

岩手山から流れてくる雄大な雪解け水で御料草地が水浸しになっ
ている中を、「耳しひ」の牧夫が跳ね歩く様子を描いた詩。ろう者が
が職に就いて収入を得るのは、盲者よりも大変だったというが、
賢治は大自然の中で働くろう者にエールを送っているのだろう。
ただ、第一連と第二連のそれぞれに「犬の毛皮」、「兎のごとく」

と動物を登場させながら牧夫を描いているのは気になるところだ。
ろう者を動物的な野生の感覚の持ち主、つまり人間的感性からは
遠い存在だとして捉えているように読めてしまう。

語注

御料草地

『定本語彙辞典』では、本作における御料草地を外山
にあつた御料牧場のこととしているが、赤田秀子(後掲)も指
摘するように御料草地は全国各地にあり、本作は岩手山麓の滝
沢御料地のイメージが強いとしている。「雪げの水」といえば、
「一百篇」の「遠く琥珀のいろなして」などで、岩手山麓の
景観を描いていることなどから、赤田のいう通りであろうと思
う。『岩手県史9』には「明治二十三年四月、官有地のうちから
二万五千五百九十二町歩を御料地に設定された。その範囲は、
岩手・和賀・胆沢・上閉伊・二戸の諸郡の中にある官有地(国
有林野)の中から定められた」(『本県産業の変遷 林業と林制』
杜陵印刷 昭和三十九年八月)とある。

犬の皮

牧夫が犬の皮で作った外套を羽織っていたのだろう。「春
と修羅(第一集)」の最後の作品にあたる「冬と銀河ステーション」
でも、「土沢の冬の市日」に集まった人が「狐や犬の毛皮を
着て」いたと書かれている。

藁外線

読み方は「きんがいせん」。紫外線のこと。音数や音韻の
関係でこちらを用いたのである。

い行く 「い」は接頭語。音数を整えるために使われているのだ
ろう。

耳しひ

耳が聞こえない者、ろう者のこと。明治二十九年の民法

十一条には「心神耗弱者、聾者、啞者、盲者及び浪費者は、準
禁治産者として之に保佐人を附する事を得」とあって、法律的
には、昭和五十四年まで改正されることがなく、住宅ローン
組んだり、借金をしたり、家業を継ぐこともできなかった。遠
くから見ても、ろう者であるかどうかは見分けがつかないので、

「かの耳しひの牧夫」とあるごとく、視点人物の顔見知り、または、有名人だったということだろう。もちろん虚構の可能性も高い。

評釈

黄罨(220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(一)(鉛筆で⑤)、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。関連作品等の指摘はない。

赤田秀子(後掲)は、本作には岩手山麓の滝沢御料地のイメー
ジがあるとしているが、ここには御料地があり、また、「二百篇」
に多出する「雪げの水」について書いていることから、ここを舞
台にして書いたものだと行って間違いはないと思う。

岩手山麓の「雪げの水」を書いたものには、例えば「遠く琥珀
のいろなして」があり、

①遠く琥珀のいろなして、 春べと見えしこの原は、
枯草をひたして雪げ水、 さざめきしげく奔るなり。

②峯には青き雪けむり、 裾は柏の赤ばやし、
雪げの水はきらめきて、 たゞひたすらにまろぶなり。

同じく「一百篇」の「「かれ草の雪とけたれば」では、「人民の
敵」というタイトル案もあったような一癖も二癖もありそうな
面々が、「かれ草の雪とけたれば／裾野はゆめのごとくなり」とい
う光景を目にして、「みな恍惚とのぞみある」と書いていた。本作
では「耳しひの牧夫」が雪解け水が流れる中を、背中をまるめな
がら飛び跳ねていく様子を描いている。

ところで、この「耳しひの牧夫」であるが、「一百篇」の「崖下
の床屋」では、床屋に弟子入りをした「啞の子」が登場していた。

①あかりを外れし古かゞみ、 客あるさまにみまもりて、
啞の子鳴らす空鉄。

②かゞみは映す崖のはな、 ちさき祠に蔓垂れて、
三日月凍る銀斜子。

③五たつ泥をほとほと、 かまちにけりて支店長、
玻璃戸の冬を入り来る。

④のれんをあげて理髪技士、 白き衣をつくろひつ、
弟子の鉄をとりあぐる。

下書稿(一)では、「かなしみいとゞ青ければ／かの赤砂利の崖下の
／啞のどこやに行かんとす」とあったように、小沢俊郎(後掲)
によれば、「この詩の最初の主題は、わがかなしみのゆえに、同じ
くかなしく不幸に耐えている啞の子の床屋へ足を向けたという作
者の思いにある」(小沢俊郎「崖下の床屋 賢治の文語詩」『小
沢俊郎 宮沢賢治論集3』 有精堂 昭和六十二年六月)といったも
のであったが、「支店長」がやってくると理髪技師が「弟子の鉄を
とりあぐる」といったように、弟子の努力は全く報われていない。
賢治の文語詩には、社会的弱者の生活や心情を描き、社会文学
的な性格を持つものも少なくないが、賢治はろう者の就業や待遇
についても関心を持っていたことがわかる。本作に關しても、下
書稿も一種しかなく、関連作品も指摘されていないので、そのあ
たりの事情はわからないにせよ、当初は賢治自身を語るものであ
ったのが、次第に社会文学的な性格を帯びてきたのかもしれない。
明治四十四年、日露戦争に従軍して両目を失明した柴内魁三は、
私費を投じて岩手盲啞学校を設立した。同校は、大正十四年の
『岩手県統計書』によれば、「盲生卒業生中 大病院盲啞学校ニ奉
職スル者アリ多数ハ自宅開業ヲナシ月収四五十円ヨリ百円位ニシ

テ独立自営シ中ニハ結婚生活ニ入ルモノ数名アリ聾啞生ハ盲生ニ比シ遜色アルモ鉄瓶製造業工場裁縫等ニ従事シ月収十五六円ヨリ八九十円位ニシテ父兄ヨリ余分ノ物質的援助ヲ仰クモノ尠シ」と報告しているが、「聾啞生」の方が就業に関する条件は悪かったようである。

東京盲聾学校（現・筑波大学附属視覚特別支援学校、同聴覚特別支援学校）校長を務めるなど、初期の盲教育・聾啞教育に貢献した小西信八（「盲人教育と聾啞教育」『小西信八先生存稿集』小西信八先生存稿刊行会、昭和十年十一月）は、大正六年の文部省調査によると、学齢期にある盲児が三二二九人いるのに対して、聾啞の児童数は六〇三九人（両方を兼ねた児童数は十一人）なのに、盲児が入学できる学校数が六十三校であるのに対して、聾啞児が入学できる学校は三十三校に過ぎないということから、日本における聾啞教育の未熟を指摘している（欧米では聾啞学校が二倍から三倍あるという）。少し長いが、小西の言を引用してみたい。

盲人は自然他人の同情を惹き易き境遇に在りて一瞥伶俐の情を促し惻隱の心を動すに反して聾啞者の不自由を他人が認識する機会は多くないからいつ迄も見逃さるゝ不利があるのと盲人自身が躍起となりて有志者に懇談切望して学校の設立や金品の寄附を促すのに聾啞者中にはかゝる事に奔走尽力するためには言語の不自由が大障礙となつて出来ない、盲人は卒業後マッサージ師や按摩手となつたり鍼医や琴師匠となつて医師格師匠株で尊敬の意を以て接待せられるに聾啞は縦令常人に劣らない技能があつても言語不自由のために喜んで之を使用する者少く偶之を使用する者あればとて低給で酷使に近くはないかと疑はれる程の事さへあるので、よくても職工の待遇に過ぎない、中年以上の盲人は遠方から東京、京都、大阪其他へ留学するに道中按摩を営みながら京阪に出て鍼按の師匠に就き夜は按摩を営み昼間学校に通学する便利ありて出京にも留学にも父兄を煩はすこ

と少なくて相応の研学は出来るから中産以下の子弟も出京留学するが多かるに聾啞は此便利なく初めて入学するには父兄若は母姉の付添を要し之がために三人の旅費を要し夏休に迎へに来て連れ帰るに亦三人の旅費を要す、九月帰校にも同様なれば入学当年九人の旅費を要し二年若は三年の間は一年六人の路費を要し在学六年若は八年間に習得する学識は尋常子弟が小学校に入る前の言語を自由自在に誤りなく使用することは容易ならずして費す所の学費の盲人に比して莫大の相違あるに拘らず収納する所の成績は此の如く微少なれば中産以下の子弟は初より放縦の生活に委ねられ少しく成長するに及んでは家事の手伝に使役せられ其役使にも堪へない者は道路に放棄せられたも同様の姿で竊盗する外には生存の道なく度々警官を煩はした末監獄に投ぜられ刑期満るも温情より之を迎へて親切に世話する親族信友なければ入獄前と同様の犯罪を繰返すが常習となるは止むを得ぬ事で当人を咎むるよりも社会の欠陥を訴へねばならぬ。

大正八年七月に発表されたものであるので、賢治が岩手山麓によく登っていた頃と年代的にも一致するが、盲教育と聾啞教育の現場にいた小西の文章だけに信憑性がある。

島田隆輔（「原詩集の発展」〔宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インク入写稿〕による過程） 広島大学博士論文 <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00032003> 平成二十二年九月）は、岩手盲聾学校に理容科ができるのが昭和十九年だということから、「崖下の床屋」の弟子は、理容の基礎教育を受けることなく、小西が書くように、「喜んで之を使用する者少く偶之を使用する者あればとて低給」ということからすると、「理髪技師」が「弟子」を邪険に扱っていたのは、自分の店に置いてあるだけでも感謝すべきだという気持ち根底にあったからではないかと思う。賢治がこうした盲者と聾啞者の社会的な立場の違いについて、

どれくらいに知っていたのかはわからない。ただ、文語詩に亡者は登場せず、聾啞者のみ二件登場することなどを考えれば、父・政次郎が方面委員であったことなどから、こうした事情を知っていたのかもしれない。あるいは視覚面よりも音声面が重視される文語詩稿であったから、聾者に関心を持っていたのかもしれない。

賢治と交流があり、「二百篇」には「社会主事 佐伯正氏」にて実名入りで詩化されている佐伯正は、昭和六年四月十三〜十五日の「岩手毎日新聞」紙上で「社会事業と薄倅歌人（一）」（三））を書いてゐる。佐伯は小田島孤舟や森莊巳池から岩手の天才歌人・下山清の噂を聞き、「歌人としても学者としても絶倫の天分を享けて生れながら石川啄木よりも更に〜悲痛陰惨な運命を荷なひ、肉体はと言へば耳は聾眼は微かに視える程度の力しかないのみか、不治の病に不断に脅威せられ、血をはきながら安住の家なく、寂びしい放浪をつゞけねばならない稀有な薄倅歌人下山清君」として論じている。本作と直接の関係はないと思われるが、森莊巳池の関係から、賢治もこの人物のことを知っていた可能性はあり、また佐伯の記事を読んだ可能性も高いため（昭和六年三月頃に書かれたとされる賢治の佐伯宛の書簡下書きには「ご消息、父よりまた生々岩手毎日等より始終承はり居ります」とある）、賢治の聾啞者観を形成する一つのきっかけにはなっていたかもしれない。

ただ、気になる点がある。というのは、賢治はこの「牧夫」に、第一連では犬の皮を着せ、第二連では兎のように飛び跳ねさせ、動物を登場させることによって対句的に表現していたことである。馬の放牧をしていたことからくる、一種の縁語的な表現なのかもしれないが、この牧夫を、人間的に描くより、野生に近い存在として描こうとしていたように思えてしまうのである。

たしかに賢治は、「春と修羅 第二集」の「九三 「ふたりおんなじさういふ奇狎な扮装で」一九二四、一〇、二六、」で、二人の村娘を「鳥 踊」にたとえてもいるが、犬の皮衣を着せて、背中

を丸めて兎のように跳ねて行かせる姿には、村娘を鳥にたとえたような明るさやユーモアより、どこか陰気さや暗さを感じてしまう。本作における「牧夫」の描写には、「崖下の床屋」において「啞の子」が一生懸命に鉄の練習をして、言葉を交わすことが無くても、その思いが十分に伝わってくるのに比べると温もりを感じさせない。

「「かれ草の雪とけたれば」」でも、岩手山の山麓で雪溶け水が大量に流れ落ちていく様子を税務吏や馬喰、「陰気の狼」という綽名を持つ三百代言といった「人民の敵」とされる面々が、その自然の雄大さに感嘆するという詩だが、本作における「牧夫」は、社会の表舞台に立つ人間ではないということでは共通するもの、人間性が表れてしまう側面も出てこない。もちろん、ここで働いている人間であれば、今さら雪解け水ごとときで感動などしないということなのかもしれないが：

賢治が「耳しひ」を差別的に描いたなどと言うつもりはない。賢治としては、なんとか床屋の弟子のように、あるいは御料草地の牧夫のように聾啞者たちにも生活の道が与えられて欲しいと思っていたに違いないからだ。ただ、それでも賢治は聾啞者を自分たちとは違った世界にいる者としており、遠いところから見ただけの存在であったということは疑えないと思う。

先行研究

栗原敦「「文語詩稿」試論」『宮沢賢治 透明な軌道の上から』新宿書房 平成四年八月

赤田秀子「文語詩を読む その4 「かれ草の雪とけたれば」を中心に」（「ワルトラワラ15」ワルトラワラの会 平成十三年十一月）

①あへぎてくれば丘のひら、
白き手巾を草にして、
地平をのぞむ天気輪、
をとめらみたりまどぬしき。

②大寺のみちをこととへど、
はやくも死相われにありやと、
いらへず肩をすくむるは、
肅涼をちの雲を見ぬ。

大意

息も切れ切れに登つてくると丘の頂上には、地平をのぞむ天気輪があり、
白いハンカチを草に敷いて、少女たち三人が輪になって座っていた。

大寺までの道を探ねてみたが、答えはなく肩をすくめるだけであつたのは、
早くも死相が自分の顔に浮かんでいるのではないかと、さびしく遠くの雲を見上げた。

モチーフ

東北砕石工場でセールスのために東奔西走していた時代に使っていた手帳に書かれた詩句が発展した作品。息を切らして丘の頂に登ると、おとめたちは質問にも答えることなく、視点人物は自分の顔に死相が浮かんでいるのではないかという気分になるという内容。何といても童話「銀河鉄道の夜」にも登場する「天気輪」が登場するのが気になるが、三人の乙女にも注目したい。賢治は「谷」(『春と修羅(第一集)』)で、「かれ草層の上で」「何か相談をやつてゐた／三人の妖女」を登場させているが、賢治は関登久也に、彼女らが「疱瘡神」であると語つたとのこと。天と地、生と死の境に立つ天気輪。その脇に円居する三人の乙女：本作は、こうした夢幻的世界を描いた作品として読むこともできよう。

語注

病技師 賢治を直接に視点人物にしているわけではないかもしれないが、文語詩が晩年に書かれたことを思うと、賢治その人の行状や思想が託されていると考えざるを得ない。尚、読み方について、三谷弘美(後掲)は「びようぎし」、萩原昌好(後掲B)は、「やまいぎし」と読ませている。ここでは「びようぎし」としたい。

天気輪 童話「銀河鉄道の夜」にも登場する語で、本作の解釈上で最も意見の割れるところであろう。丘の上に設置された、大地と空を繋ぎとめるかのようにも思える構造物。また、あたかも生と死を繋ぎとめるかのようにも思える構造物。実際には山頂などの見晴らしのよい所に設置された三角点のようなものであつたのだろう。

手巾 手拭い、ハンカチのこと。「をとめら」が使っていたものだとすれば、ハンカチがふさわしいだろう。七五調で読むのなら、読み方は「しゅきん」だろう。

大寺 大きな寺。読み方は「だいじ」。萩原(後掲B)は、「この一語につまづいて、私は全く筆を進めることができなくなつて」しまつたとし、佐藤勝治は萩原宛の私信で「大寺の位置が分りました」と伝えたというが、どこをモデルにしたかの案は、どちらからも提出されていない。下書稿(二)の手入れ段階で出現した語なので虚構である可能性も高い。それでも、「をとめら」でも場所を知っているだろうと思われる大きな寺を、病技師は知らないでいたのだから、盛岡や花巻の周辺ではなく、肥料販売のために訪ねた宮城や秋田あたりなのであろう。

肅涼 『大漢和辞典』にも『日本国語大辞典』にも見えない熟語だが、肅には厳しい、静かの意味、涼には、涼しい、さびしいの意味があることから、寒い、涼しいの意があり、さびしく、寒々しい心境を示すのだろう。

をちの雲 遠くの雲。

評釈

「GERIEF手帳」に書かれた下書稿(一)、黄野(222行)詩
稿用紙に書かれた下書稿(二)(タイトルは「病技師」、鉛筆で⑤)、
定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。「一百篇」
に同題の「病技師(一)」があり、「天気輪」は童話「銀河鉄道の
夜」にも登場する。

「GERIEF手帳」の使用時期は、『新校本全集』によれば昭
和六年三月末から同年七月末前後ということなので、ちょうど賢
治が東北砕石工場の技師として東奔西走していた時期にあたる。
年譜を見ると、四月四日の項に「帰花後発熱臥床する」とあり、
四月十一・十二日(推定)にも「発熱、臥床」、五月十六日にも
「発熱病臥」等と書かれている。「死相」の詩語もあるが、年譜に
は、この年の春に会見した黒沢尻高等女学校長の新井正市郎が
「いくぶん衰弱されていた」とあり、同年五月に会見した斎藤報
恩農業館の毛藤勤治も「やせほそった風体」であったとしている。
手帳に書かれたそのままではなかったにせよ、本作と似たような
経験をしたのであろう。下書稿(一)とされる手帳の記述は次のとお
り。

よき児らかなとこととへば
いらえず恐れ泣きいでぬ
はやくも死相われにありやと
さびしく遠き雲を見ぬ

毛筆で書かれているので、取材先で筆記したものではないよう
だが、実体験に最も近いものだと考えられる。これが下書稿(二)
になると二連構成となる。

あえぎて丘をおり
地平をのぞむ五輪塔
白き手巾を草にして
をとめらみたりまどろしき

よき児らかなとこととへば
ひとしく畏れて泣きいでしは
はやくも死相われにありやと
さびしく遠の雲を見ぬ

定稿にある「天気輪」は、童話「銀河鉄道の夜」にも登場する
語だが、最初期には「五輪塔」であったことがわかる。五輪塔と
は、「五十篇」の「五輪峠」にも登場したもので、仏教における宇
宙の五大要素である地・水・火・風・空をかたどった塔で、死者
への供養塔や墓標として用いられたものこと。ただ、丘から下
りてきたところで「五輪塔」を見たということなので、文語詩に
登場する五輪峠にあった五輪塔のことではなく、花巻・身照寺の
賢治の墓のような五輪塔をイメージしていたのであろう。大角修
(後掲)も、「この詩の天気輪は墓塔から連想されたもの」だと書
いている。

しかし、一連に「をとめ」とあるのに、二連に「よき児らか
な」とあるのはそぐわない。乙女と言えば、「成年に達した未婚の
女。のちには、一〇歳くらいから成人前の未婚の女性を広くさす
ようになった」(『日本国語大辞典』)という意味であるが、こうし
た女性たちに向かつて「よき児らかな」、すなわち「いい児たちだ
ね」と話しかけるとは考えにくい。これは、「二・三歳くらいの、
ようやく外遊びができるようになった子どもにかけられる言葉ではな
いだろうか。また、いくら死相のようになったものが表われていたに
しても、それで「をとめら」が「ひとしく畏れて泣きいでし」とい
うのも、現実には起こり得ない気がする。

たぶん賢治もそれに気づいたのだろう。手入れを始めるのだが、紙面の右肩に「まへがみ」「ひるのこ」(三歳頃の子どものこと)、「うなゐ」「いらつひめ」「めのわらべ」「めのわらは」「わらべ」「みどりご」「うなゐをとめ」といった語が書き連ねられているが、おそらく意味や、音数、音の響きなどからどれも採用できず、結局、「をとめら」を動かすことができなかったのだろう。

そして、賢治はこちらが変更できないならば、ということなのか、手入れ段階で、二連の方を書き替えたのではないだろうか。すなわち、「よき児らかなこととへば」を「大寺のみちをこととへど」に、そして、「ひとしく畏れて泣きいでしは」を「いらへず肩をすくむるは」に改変した。

萩原昌好(後掲B)は、この改変について、「これは当初の恐れおののく児らとそれに死相を感じとった「われ」の寂しさが、少女の、少々無視するそぶりに取って替わられて、どこかで下書稿(一)の持つ重味が物語めいた軽味に転化してしまう。その点残念な気がする」と書くが、たしかにそうも思えるが、「をとめら」が登場したからには、年齢相応の対応をさせざるを得なかったのであろう。

下書稿(二)の手入れ段階では、「あえぎて丘をおり」が「あえぎてくれば丘のひら」になり、「五輪塔」も「天気輪」になっているので、下書稿(二)の手入れが、ほぼそのまま定稿に引き継がれていると言ってよいだろう。

下書稿(二)の手入れで、一連と二連の不調和を修正したのは見て来たとおりだが、「五輪塔」(おそらく墓地)がある場所から、今さら「大寺」がどこかを問いかけるといのがふさわしくないために、これを「天気輪」と修正し、そのために丘を降りてくるのではなく、逆に丘に登ることとしたのであろう。もちろん修正の順序まではわからないが、ともあれ、定稿では辻褃が合うようになっていいる。風が吹くと桶屋が儲かる、のような話だが、「をとめ」を出し続けるために、天気輪が登場した、ということになる

かもしれない。

さて、そこで丘の上に立っている「天気輪」が何をさすのかであるが、これには諸説あって、どうにも決め難い。加倉井厚夫(後掲)は、天気輪の諸説を次のように整理している。

《宗教関連の事物として推理》

- ・「念仏車、転宝輪」説(小沢俊郎)
- ・「盛岡静養院のお天気柱(後生塔)」説(萩原昌好)
- ・「花巻松庵寺の法輪(車塔婆)」説(吉見正信)
- ・「法華経見宝塔品「七宝の塔」」説(斎藤文一)
- ・「宇宙柱(cosmic pillar)」(上田哲)
- ・「ブリュエルの柱」説(別役実)
- ・《天文・気象上の事物として推理》
- ・「太陽柱、暈」説(根本順吉)
- ・「北極軸の具象化・神聖化」説(香取直一)
- ・「天のきりん(麒麟)」説(杉浦嘉雄・藤田栄一)

特にどれと特定することもできないが、「二百篇」の「病技師(一)」の舞台とされる松庵寺にあった法輪だという吉見(後掲)の見解は重要視せざるを得ない。「病技師(一)」には、松庵寺にあった餓死供養塔を「飢饉供養の巨石並めり」としていたが、同じ「二百篇」の中に同じタイトルで掲載していることから、対照的に詩句を選んでいた可能性があるからだ。また、盛岡の静養院のお天気柱も、イメージの一端にはあったとすべきだろう。それは小沢の言う念仏車にも通じるだろうし、法華経の見宝塔品や宇宙柱のイメージにも通じる。しかし、いずれも魅力的ではありながら、決定打ではないということだ。

おそらく発想の原点は三角点や水準点であったのだろう。ことに三角点に関しては、「三角点は互いに見通せる地点に選ぶため、山頂に設けることが多い」(『日本大百科全書』)ともあるから、頂

上部が平坦な「丘のひら」にあること、また「地平をのぞむ」という詩句ともぴたりである。しかし、それならば三角点あるいは水準点とすればよさそうなのに、賢治は童話「銀河鉄道の夜」にも登場する「天気輪」を採用するのである。

そのまっ黒な、松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘つてゐるのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねさうか野ぎくかの花が、そこらいちめん、夢の中からでも薫りだしたといふやうに咲き、鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこかするからだを、つめたい草に投げました。

「天気輪の柱」とあることから、三角点や水準点よりも背の高い構造物を思わせるが、この後に「天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって」とあるので、やはり賢治の頭には測量用の三角点めいたものが頭にあつたのであろう。しかし、言うまでもなく、ジョバンニは地上にある天気輪の柱から天上の銀河鉄道に乗車し、また、この世の存在からあの世の存在になろうとするカムパネルラに出会うのであるから、この構造物には天と地、また生と死の境界に位置するものだというイメージが付与されていたように思われる。

本作でも、こうした「銀河鉄道の夜」における天気輪イメージは反映されているはずだが、ただ、文語詩は現実の岩手を舞台にしているから、キリスト教的なニュアンスだけは排除してもいいかもしれない。

さて、もう一つ気になるのは、下書稿(一)における「よき兎ら」が、なぜ「をとめらみたりまどろしき」になるかについて、であ

る。「をとめ」については先に見たとおりだが、なぜ「みたり」になったのか、ということである。これにこだわるのは、『春と修羅(第一集)』の「谷」で、やはり賢治は三人の女性について書いていたからである。

ひかりの澱

三角ばたけのうしろ

かれ草層の上で

わたくしの見ましたのは

顔いづばいに赤い点うち

硝子様鋼青のことばをつかつて

しきりに歪み合ひながら

何か相談をやつてゐた

三人の妖女たちです

関登久也(「春と修羅」『新装版 宮沢賢治物語』 学習研究社 平成七年十二月)は、「この詩の中に出てくる三人の妖女というのは、瘡瘡神であると言われています」とし、「鋭い神経と直感力をもっていた賢治。凡人の目には見えない空間に、うようよしている悪霊と善霊を、しばしば肉眼に見ること」ができたと書いている。

賢治の作品には、幻覚や心霊体験の再現としか思えない描写もあるが、「天気輪」に宇宙的、宗教的なものが暗示されていると読むならば、その脇で円居する三人の乙女たちにも、超自然的な力があつたと考えてもよいかもしれない。

佐藤栄二(「シリーズ・エッセイ【賢治詩の隠れた△風▽】」9

花が妖女になるとき」『賢治研究91』 宮沢賢治研究会 平成十五年九月)は、この「谷」について、シェイクスピアの「マクベス」に登場する三人の妖女をイメージしていたが、あるいは『遠野物語』(柳田国男 明治四十三年六月)の第二話にある岩手三山

(岩手山、早池峰山、姫神山)を分け与えられた三人の女神をイメージしてもいいかもしれない。
もちろん晩期の賢治作品に幻覚的なものはあまり登場しなくなっているように思うが、実際の賢治がどのように考えていたかはわからない。たとえば「一百篇」には「まがつび」(災厄の神)をはじめとした、さまざまな超自然的存在を登場させていることを思えば、一笑に伏すこともできないように思う。なかなか論を進めにくい領域ではあるが、賢治研究にとっては欠かせないところだ。晩年の宗教意識とともに、今後とも考え続けていきたい。

先行研究

- 小沢俊郎「『天気輪』 仮説」(『賢治研究26』 宮沢賢治研究会 昭和五十六年二月)
萩原昌好A「『天気輪の柱』」(『宮沢賢治1』 洋々社 昭和五十六年十月)
吉見正信「『修羅のふるさと』」(『宮沢賢治の道程』 八重岳書房 昭和五十七年二月)
萩原昌好B「病技師」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』 柏プラーノ 平成十二年九月)
加倉井厚夫「『銀河鉄道の夜』の天の鉄道を辿る」(『月刊星ナビ』 アストロアーツ 平成十三年九月)
大角修A「銀河の彼方に 祈りと願い」(『イーハトーブ悪人列伝』 宮沢賢治童話のおかしなやつら』 勉強出版 平成二十三年二月)
大角修B「『宮沢賢治』入門⑩ 最後の作品群・文語詩を読む」(『大法輪81-3』 大法輪閣 平成二十六年三月)

99 「西のあをじろがらん洞」

- ①西のあをじろがらん洞、
ゆげはひろがり環をつくり、
一むらゆげをはきだせば、
雪のお山を越し申す。
- ②わさび田ここになさんとて、
たばこを吸へばこの泉、
枯草原にこしおろし、
たゞごろごろと鳴り申す。
- ③それわさび田に害あるもの、
三には視察、四には税、
一には野馬 二には蟹、
五は大更の酒屋なり。
- ④山を越したる雲かげは、
やがては藍の松こめや、
雪をそゞろにすべりおり、
虎の斑形を越え申す。

大意

西の青白いがらん洞、 白い息が吐き出されると、
その湯気はひろがって環状になり、 雪の積もったお山を越し申しあげる。
わさび田をここに作ろうと、 枯れ草原に腰をおろし、
煙草を吸えば近くにある泉が、 ただゴロゴロと鳴り申しあげる。
わさび田に害をなすものといえ、 第一には野馬、第二にカニ、
三には視察、四に税金、 五番目は大更の酒屋である。
山を越えてきた雲の影は、 雪をすべりおりてくるように見え、
すぐに藍色の松がぎっしり生えたあたりや、 虎の縞柄のように
なったあたりを越え申しあげる。

モチーフ

岩手山麓の裾野でわさび田をここに作ろうと将来を夢想する男の詩。「雪のお山を越し申す」や「鳴り申す」、「越え申す」とおどけ

た感じでリズムをとり、わさび田経営に害があるのは野馬、蟹、視察、税、そして酒屋だと「数え歌」のような詩句を入れて、オチをつけるのは民謡などのレトリックを模したのだろう。こうして賢治は、農村の新しい試みを、高みから示すのではなく、農民たちの視線から描こうとしたのだと思う。

語注

がらん洞 洞窟のことを指しているように思われるが、下書稿に「Tournoisの板と見申せど／まことはひどいがらん洞／うす青じろの西ぞらに／雪のお山は立ち申す」とあることからわかるように、トルコ石色の板とも見まがう空のことを指す。

わさび田 ワサビは日本特産のアブラナ科の多年草。山間の溪流に自生する。水温が低く、一年を通して一定で、濁りや汚れの少ない水が必要とするため、伊豆の天城山周辺、静岡の安倍川上流、長野県の穂高などで栽培される。本作の下書稿手入れには「当菜」の語が出てくるが、おそらくこれは和賀郡西和賀町を流れる当楽沢（和賀川の支流）のことで、やはりワサビ栽培ができそうな場所である。

二には蟹 板谷栄城（後掲）は、岩手県八幡平市でワサビ栽培を始めた沢口寅吉の孫・武男による「沢蟹はワサビを食べない」という言葉を紹介している。そこで板谷は、蟹をさがしにやっってきたタヌキがワサビが流れないようにおさえている石をひっくり返してしまうことを言うのだとする。が、梅原寛重『山葵栽培調理法』（有隣堂 明治四十四年二月）では、「白蟹（俗に「シヨツカニ」と云ひ其根を喰害す）」をモンシロチョウ（の幼虫）と共に害虫としてあげており、『最新農家副業全書』（新報知社 大正二十一年四月）にも、「蟹は山葵の嫩芽を好むから時々見廻はりて蟹を殺さねばならぬ」とある。

三には視察 板谷（後掲）は「視察」を、栽培の先進地を視察に行くこと、あるいは先進地からの視察者が来ることとしている

が、宮沢賢治研究会（後掲）では、「視察がくると、接待やら何やらしなくちゃならない。／そりや迷惑なもんだよ。／賢治には役人を皮肉った作品が多いから、そういう感じね」と討議している。いずれも、わさび田を作るための「害」というほどのものではないように思う。冬場にわさび栽培に適した地を探すこと（＝視察すること）の苦勞、あるいは、最適地を他の者に奪われない（＝視察されること）ための苦勞を言っていたのかもしれない。

四には税 板谷（後掲）は、「酒粕の使用には県庁の許可と税務署も一枚噛んでいたから、収入への税金とともに「四には税」となったのかもしれない」とする。が、ワサビと酒税は直接にはつながらない。「視察」とともに疑問が残るところ。

大更の酒屋 地名の「オオブケ」（当時は大更村、現・八幡平市）であろう。硫黄鉱山も近くあったことから賑わっていた。わさび田が成功したとしても、儲けた金は酒屋で使ってしまうので「害」である、とおどけたのだろう。ワサビ漬けにするための酒粕を買うために、酒屋と関わりが出てくるということかもしれないが、「二には野馬 一には蟹、／三には視察、四には税、」というように数え上げてきて、最後にオチをつけたかったのだと思うので、やはりここは「せつかくの災害から逃れたところ」で、最後には酒を飲んでしまつて自業自得」という意味であらうと思う。

松こめや 下書稿に「北面は藍の松をこめ」とある。松がぎつしり生えていることを言ったのである。『岩波古語辞典』には「こみ」の意味の第一に「狭い所にすきまもなく詰まる。集中する」をあげている。

虎の斑形 縞模様がある虎のような、という意味だろう。山肌に雪が積もったところと地面とが縞になっていたのだろうと思う。宮沢賢治研究会（後掲）では、「はんけい」だと宇余りなので「ふけい」ではないか。あるいは「とらのまだら」を提案して

いるが、「つらのふがた」であろう。

評釈

黄野（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「わさび田」。鉛筆で①）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。先行作品や関連作品の指摘はない。

下書稿は岩手山麓の風景と鳥、湯気を詠んでいる。

Tourquois の板と見申せど

まことはひどいがらん洞

うす青じろの西ぞらに

雪のお山は立ち申す

鷺王のごとくしるびかり

雪のお山は立ち申す

鳥一疋とびあがり

谷のこちらをすぎ行けば

鳥が二疋とびあがり

ならんで谷を截って行く

西のあおじろがらん洞

一むらゆげをはきだせば

ゆげはひろがり環をつくり

またももつれて山を越す

北面は藍の松をこめ

熔岩流のあと光り

雪に落ちたる雲のかげ

しづかにすべり落ちてくる

西の青じろがらん洞

もつれた湯気を吸ひ込んで
ふっとひかれれば日はしづか

「鷺王」というのは、「二百篇」の「心相」でも岩手山をたとえた言葉として登場した。『広説仏教語大辞典』によれば、元は「鷺鳥の王」という意味で、仏に喩えた名。仏の三十二相中に手足縵網相があり、手指・足指の間に縵網（水かきのような網）があるのが鷺鳥の足に似ているから、こういう」とある。「溶岩流」とあるのも、岩手山の焼走り溶岩流のことであろうから、舞台が岩手山麓であることは明らかだろう。

湯気について、宮沢賢治研究会（後掲）では、「どんどん湧きあがっている雲でしょう」としているが、「はきだせば」とあるのは、文字どおりに人間が吐き出す白い息のことではないかと思う。「もつれて山を越す」の表現も、白い息が真っ青な空に吸いこまれていくさまであったとする方が合致するように思えるからだ。

なにも真冬にわさび田の栽培地を見に来なくてもいいように思うが、日本最古のわさび農家だというわさびの門前 (<http://www.wasabiya.net/wasabiinae.htm>) には、「沢わさびの場合、水の少なくなる冬場に確保できる水量によってわさび田の大きさが決まります」ともあるためだろう。

『新校本全集』の索引でワサビについて調べてみると、本作の下書稿と定稿以外には用例がない。しかし、下書稿の手入れに「当楽」の文字が見えることから、賢治も岩手県の有望な農産物として注目しており、彼なりに研究をしていたのではないかと思われる。板谷栄城（後掲）によれば、「岩手日報」（大正十四年十二月十二日）に「本県で有望なわさび栽培」として和賀郡江釣子村が取り上げられていたというが、当楽（現・和賀郡西和賀町）は江釣子から和賀川を上流に上ったところにあるので、賢治はこうした情報を元にして原稿を書いていたのだと思う。ただし、岩手山を示す「鷺王」や「溶岩流」の言葉と併存する段階もあった

ので、岩手山麓と和賀郡のイメージは両方入り混じっていたようである。

ちやうど農村での副業が取りざたされる時代であり、大正二年四月刊行の『最新農家副業全書』（新報知社）によれば、「山葵の栽培」の章に、「山葵は需用も広く量目小にして価も高く且つ容易に腐敗せぬから遠方に輸送販売するにも便利であり、代表的な産地である伊豆の天城山を説明しながら、「此地方は溪谷多く寒冷なる流水絶えず疎通し水田として稲を作るに適せぬ所を利用して山葵を栽培するのである、故に山岳多き地方で同一の事情の下にあるものは副業として山葵を作るは有益の副業と信ずる」とあった。大正十五年三月の「岩手県山林会報10」（岩手県山林会）にも、岩手県技手の佐久間善喜が「利益の多いわさびの栽培を勧む」という文章を書いており、副業としてさかんに奨める者もいたようである。

川原仁左エ門「羅須地人協会時代」（『宮沢賢治とその周辺』同書刊行会 昭和四十七年五月）によれば、賢治も農産物を大都市に出荷して、農村が現金収入を得るといふ副業の道について考えていたようなので、本作が賢治の実体験であるとも、実際の取材に基づいて書かれたものであるとも考えにくいにせよ、時代の雰囲気は十分に漂っているように思う。

ところで、賢治は「一篇」の「副業」で、副業として兔の飼育をしている青年を「さっぱり仕事稼がないで／＼のらくらもの」と書き、「兎はつひにつくのはね」とも書いていた。賢治は真面目に努力することなく、安易に副業で巨利を得ようとする人間の浅ましさを描いたのだと思う。しかし、この「わさび田」については、視点人物に対して批判的な視線で見えていたわけではなかったように思える。というのも、数え歌風にワサビ栽培に対する害をあげながら、五つ目には、せっかく無事にワサビを育てて一儲けしたところでも、大更で大酒を飲んで散財してしまふ、といったオチをつけているからだ。ここには農村の窮状や農民の怠惰を嘆

くという深刻さより、農民同志で冗談を言い合うようなユーモアが漂っているように思える。

宮沢賢治研究会（後掲）で書記を務めた大角修は、童話「狼森と笹森、盗森」のように、岩手山に対してわさび田を作っているのかを問うているのではないかといった指摘もしていたが、そんな新民謡的な、あるいは新民話的な趣を楽しむべき詩なのではないかと思う。

先行研究

板谷栄城「賢治が感じた植物」（『宮沢賢治16』 洋々社 平成十三年六月）
宮沢賢治研究会「読書会リポート」（『賢治研究88』 宮沢賢治研究会 平成十四年八月）
入沢康夫「文語詩難読語句のことなど」（『賢治研究118』 宮沢賢治研究会 平成二十四年九月）

100 六十業末式

三宝または水差しなど、 たとへいくたび紅白の、
甘き澱みに運ぶとも、 鐘鳴るまではカラぬるませじと、
うなじに副へし半巾は、 慈鎮和尚のごとくなり。

大意

三宝や水差しなど、もう何回も紅白の幕の張られた卒業式の、
甘い空気の澱んだ会場に運んだからといって、式開始の合図で
ある鐘が鳴るまではカラーをぬらしてはなるまいと、
うなじにあてたハンカチは、まるで慈鎮和尚のようである。

モチーフ

花巻農学校の卒業式の一コマであろう。カラーを汗でにじませてはなるまいと思つてハンカチを入れた様子が慈鎮和尚（歌人としても著名な慈円）のようだという作品。ユーモアを読み取ればよいと思うが、フロックコート（下書稿より）を着たこの人物が、ふと垣間見せた人間性に賢治は感じるところがあつたのだろう。「短編梗概」等の「大礼服の例外的効果」において、賢治は視点人物の富沢に「校長の大礼服のこまやかな金彩」が「ちらちらちらちら顫へた」ことから「この人はこの正直さでこゝまで立身したのだ」と感じさせていたが、ここでも、この些細な点からフロックコートの人物の人間性全体を直感できた気がしたのである。

語注

三宝 白木のヒノキで作った台で、左右と前方の三方に穴があいたもの。古くは食事の際に、時代が下ると神仏や貴人へ物を渡したり、儀式の時に物をのせるのに使う。『定本語彙辞典』では「三宝」と書いているのは「三方」の「誤記と思われる」とするが、『日本国語大辞典』では、「三宝」の説明に「三方」に同じと書き、夏目漱石も小説「野分」で「机は白木の三宝を大きくした位な簡単なもので」と書いている例などを挙げる。読み方は「さんぼう」。現在は「さんぼう」とも読むとのこと（『日本国語大辞典』）。

甘き澱み 卒業式に集まった人々がもたらす華やいだ雰囲気をとえた言葉。

カラぬるませじ 卒業式当日になつて、三方や水差しなどを用意するために出たり入ったりしているために汗ばむが、糊の利いたカラーに汗をしみこませてはなるまいと、悪戦苦闘しているのだろう。『定本語彙辞典』は、「ぬるませじ、濡れるの意をこめた微温む」と独特の表現」としている。

半巾 高位の僧がうなじに布をあてているようにしてハンカチをあてていることを言っている。「はんかち」あるいは「しゅき

ん」と読ませたかつたのだと思う。おくりな 慈鎮和尚 天台座主になつた慈円の諡。関白藤原忠通の子、九条兼実の弟。歴史書『愚管抄』や私家集『拾玉集』がある。賢治が愛用した島地大等『漢和对照妙法蓮華経』の「法華歌集」にも多くの歌が引用されている。和尚に「くわ」のルビが振つてあるのは、天台宗の呼び方を採用したため。ただ、特に宗教的な意味合いを持たせるつもりはなかつたように思う。

評釈

黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「卒業式」。鉛筆で⑨）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。先行作品や関連作品の指摘はない。下書稿は次のとおり。

紅白張りてうす甘き

空気のなかにいそがしく

フロックを着て 賞品と

証書の盆を 持ちはこぶ

式のはじまる それまでは

カラをつめたく たもたんと

うなじに副へし 半巾は

慈鎮和尚の ごとくなり

おそらくは花巻農学校の卒業式の一コマであろう。『新校本全集 16（下）補遺・資料 補遺・伝記資料篇』には大正十三年三月（花巻農学校第三回卒業式）と大正十四年三月（第四回）の写真があり、中央の畠山栄一郎校長はフロックコートらしきものを着ている。『定本語彙辞典』では校長と特定しているが、フロックコートらしき服装をしているのは校長だけではないので、その他の

人物を描いた可能性もある。また、赤田秀子（後掲）は、写真に写っている畠山校長ではなく、その後校長となった中野新佐久ではないかとする。というのも、中野は豪放磊落な畠山と違って、几帳面な性格だったと言われるからで、「いかにも、フロックコートを着たまま、証書や賞品の盆を持つてうろうろしたり、カラの汗ばむのを気にかけたりしそうな人柄」だ、とする。その可能性も高そうだ。

宮沢賢治研究会（後掲）の討議には、「文語詩「記念写真」みたいに厳粛な場面のおかしさを描いた作品ね」とあるが、たしかに「一百篇」の「記念写真」は、何かのうちに盛岡高等農林の教員と学生が写真を撮った際のもので、卒業式に取材した本文語詩と共通する点もあるように思う。ただ、「おかしさ」というよりも、小さな事象から人間性そのものを発見したように思ったことの方に共通性を見たい。

「記念写真」は、何かの式典のうちに記念写真を撮影した際、ちやうど虹が出たという実体験にもとづく短歌が発展したものだ、そこに「短篇梗概」等の「大礼服の例外的効果」のモチーフが組み込まれて成立している。

「大礼服の例外的効果」は、学校に対して反抗的な態度を取る富沢が、なにかの儀式の直前に級長として校長室に入ると、校長は富沢を意識しながらこきざみに身を震わせている。一方の富沢は、校長の大礼服についている金の飾りがちらちらと揺れる様子をこの上なく美しいものに感じたという話である。

校長の大礼服のこまやかな金彩は明るい雪の反射のなかでちらちらちらら顫へた。何といふこの美しさだ。この人はこの正直さでこゝまで立身したのだ。と富沢は思ひながら恍惚として旗をもつたまゝ校長を見てゐた

賢治は対立しているはずの相手の前で、思わず相手に同情して

しまい、対立が無化されてしまうということがよくあり、ことに小説的な作品ではその傾向がよく現われているが、そのためもあって何とも飽き足りない読後感の残る作品である。

ややもすると権力者の前にひれ伏しているようにも思えるが、賢治としては、「校長の大礼服のこまやかな金彩」が「ちらちららちらら顫へた」ことに対する美学的感動と、その結果として校長の「正直さ」を直感して対立が無効化されるという心理劇を描きたかったように思われる。賢治の感性について考えるには重要な作品だと思う。

本作におけるフロックコートの主が校長なのかどうか、いや、花巻農学校ではなく、実際の舞台は岩手国民高等学校の修了式であった可能性、盛岡高等農林学校での記憶であった可能性もあるかもしれないが（岩手国民学校の入学／修了式については、「一百篇」の「式場」に描かれている）、ともかく、賢治は日ごろは親しみもてる相手ではなかったフロックコートの主に対して、「カラをつめたたく たもたんと／うなじに副へし 半巾」（下書稿）を目にして、「この人はこの正直さでこゝまで立身したのだ」（「大礼服の例外的効果」と感じたのではないだろうか。いわば「フロックコート」の例外的効果」ともいうべきものが本作ではないかと思う。

先行研究

宮沢賢治研究会「読書会リポート」（「賢治研究88」 宮沢賢治研究会 平成十四年八月）

赤田秀子「文語詩を読む その8「氷雨虹すれば」を中心に 人へのまなざし 天へのまなざし」（「ワルトラワラ19」 ワルトラワラの会 平成十五年十一月）

101 「燈をを紅きと町の家より」

① 燈を紅き町の家より、
(うみべより売られしその子)
いつはりの電話来れば、
あはたゞし白木のひのき。

② 雪の面に低く霧して、
あゝ鈍びし二重のマント、
桑の群影ひくなかを、
銅版の紙片をおもふ。

大意

紅い燈火のともる町の家から、身分をいつわった電話がかかってくると、
(海辺の村から売られてきたというその子) 白木のひのきの校舎は一斉にあわただしくなる。

雪の積もった地面には低く霧が出て、桑の木々が影を作っている中を、
ああ鈍い色をした二重マントが去っていく、
すべては銅版の紙片が問題なのであろう。

モチーフ

花巻農学校の同僚であった書記の元に、和賀郡の遊郭から、和賀郡役所を偽った電話がかかってきたという事件を描いたもの。職場によくある笑い話の類だろうが、賢治には笑って済ませられなかったのだらう。遊郭の存在を賢治が肯定したはずはないが、下書稿(一)において賢治は「いざ行きてかのひとを訪へ」と書いている。つまり遊郭に反対する思想とは別に、現実問題として、彼女を救うために書記を遊郭に行かせようとしたのである。尚、本作は「五十篇」の「氷雨虹すれば」と農学校の同僚に与える言葉という点で共通しており、これも「対」にするつもりがあったのだと思う。

語注

燈を紅き町の家 「紅灯」といえば「色町(いろまち)のともし火。

歓楽街の華やかな明かり」(『デジタル大辞泉』)とあるとおり。

その町の家と言えば遊郭を指すと思われる。下書稿(一)の手入れ

には「和賀郡の灯ある家より」とあることから和賀郡内の遊郭

であろう。『全国遊郭案内』(日本遊覧社 昭和五年七月)によれば、

岩手県内で十五ヶ所の遊郭が紹介されている中に和賀郡内

では「黒沢尻遊郭」(和賀郡黒沢尻町新穀町、現・北上市)があ

がっている。「此の遊郭には目下貸座敷が五軒あつて、娼妓は二

十人居るが青森県人が最も多い。店には写真も出て無いが陰店

も張つて無い。只楼名を染抜いた「のれん」が張つて在るのみ

だ。娼妓は居稼ぎ制で送り込みはやらない。廻し制で通し花は

取らない。費用は御定りが三円で乙が二円、丙が一円八十銭で

ある。本部屋は二十銭増しで何れも台の物が附いて来る。御定

りは酒肴で、乙と丙は茶菓だ。妓楼は、新盛楼、松月楼、玉泉

楼、福寿楼、橋本楼の五軒である。箱は入らない」とある。

いつはりの電話 下書稿(一)に「和賀郡の郡役所より/あやしくも

なまめける声/わぶごとくうらむがごとく/連綿ときみを呼び

しを」とある。遊郭の楼の名前を名乗って農学校に電話をする

わけにもいかないので、和賀郡の郡役所からだとして電話を

かけてきたのだらう。

白木のひのき 花巻農学校の新築校舎を「一百篇」の「鐘うてば

白木のひのき」で書いていることから、ヒノキ造りの校舎のこ

とだらう。また、下書稿のタイトルが「僚友」と名付けられた

段階もあることから、花巻農学校の同僚がモデルになっている

と思われる。

二重のマント インバネスとも呼ばれた。袖なしでケープ付きの

マントのこと。『定本語彙辞典』では、「古びて薄墨色になった

インバネス」とする。

銅版の紙片 栗原敦(後掲)は「銅版画のくすんだ気配のような

ものが感じられる」とし、『定本語彙辞典』は「銅版印刷の紙き

れ、すなわち紙幣のこと」とする。宮沢賢治研究会（後掲）も、「やっぱりお札ですね。懐具合を気にしながら色街に行く」とする。ここでも紙幣の意味であるとしたい。音数の関係と、あまりにも生々しすぎるために婉曲に表現したのだと思う。佐藤通雅（後掲）は、「おみなに支払う手切れ金とも考えられる」としている。

評釈

無罪詩稿用紙に書かれた下書稿(一)（タイトルは「電話」↓「僚友」。藍インクで①）、その裏面に書かれた下書稿(二)（鉛筆で②）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。「文語詩篇」ノート」の「29 1924」に次のようにある。

放蕩書記

黒沢尻ヨリノ電話

黒ヘリノ女、ナレ故ニココヲシクジリテ

メモは全体に藍インクで×印が付されていることから、文語詩として作成済みだということを示したのだろう。

「電話」と題された下書稿(一)の初期段階の内容は次のとおり。

高書記よ

電話呼へり

和賀郡の郡役所より

高書記よ用は済みしや

和賀郡の郡役所より

あやしくもなまめける声

わぶごとくうらむがごとく

連綿ときみを呼びしを

高書記よかの日見しとき
みどりなる髪うつくしく
かんざしの房など垂れて
もろびとの瞳にたえず
切なげに身をもだえける
かのをみななれに迷ひて
うらぶれてかしこに去りき

ききけらくなはそのはじめ
欺きてをみなとなして
たちまちにいと情なくて
あらたなるをみな漁りぬ

このまひる公署のなかに
なが声を求めて来しは
うらみてか ほしいかりてか
かにかくに ながつれなきに
胸にあまれる故によるらん

高書記よ なが父母は

耕して清く 食へり

をみなこの その父母も

耕せどまた耕せど

炊餐のけむりに足らず

をみなごは 売られ来りぬ

高書記よ なれもしつひに
紅燈の とりこなりせば
いざ行きてかのひとを訪へ
ひとふしの 歌をばひさぎ

わらひ売る むれのなかにも
あきらけき 道はあるなれ

定稿では凝縮され過ぎた内容が、ここまで遡ると内容が見えてくる。

また、定稿には「うみべより売られしその子」という詩句もあったが、そのイメージは「未定稿」の「八戸」から来ているのかもしれない。「八戸」は、琥珀を売る土産物屋の店を守る女性の視点で書かれた詩だが、四年間の「歌ひめ」としての勤めの間に胸を病み、故郷に戻ってきたという内容だ。

さやかなる夏の衣して
ひとびとは汽車を待てども
疾みはてしわれはさびしく
琥珀もて客を待つめり

この駅はきりぎしにして
玻璃の窓海景を盛り
幾条の遙けき青や
岬にはあがる白波

南なるかの野の町に
歌ひめとなるならはしの
かゞやける唇や頬
われとても昨日はありにき

かのひとになべてを捧げ
かゞやかに四年を経しに
わが胸はにはかに重く
病葉と髪は散りにき

モートルの爆音高く
窓過ぐる黒き船あり
ひらめきて鷗はとび交ひ
岩波はまたしもあがる

そのかみもうなひなりし日
こゝにして琥珀うりしを
あゝいまはうなひとなりて
かのひとに行かんすべなし

「かのひとになべてを捧げ」たとあるが、「「燈を紅き町の家より」の下書稿(一)にある「なはそのはじめ／欺きてをみなとなし」と書いていたのにも通じるように思う。

大正十三年に岩手県気仙郡綾里村(現・大船渡市)に生まれ育った山下文男(「昭和五年(1930)『世界恐慌の直撃』」「昭和東北大凶作 娘身売りと欠食児童」無明舎 平成十三年一月)は、「どこの家でも、働いても働いても、なお追いつかない、ぎりぎりの貧乏生活をしていた」として、たった一人の女の子であった自分の姉も、借金のために隣町の旅館に女中奉公に出されたと言っている。「歌ひめ」でこそなかったにせよ、海辺の町には、そうした「ならはし」があったようである。

また、賢治の家から近い花巻の遊郭街・東町(通称・裏町)の老舗蕎麦屋・嘉司屋の主人であった佐々木喜太郎によると、「芸者や酌婦には八戸(青森県)出身者が多かった。親の心情としてあまり近いところでは気まずいし、かといって遠すぎるのは不憫だったのでしょう。逆に花巻からは宮城方面へ売られていくことが多かったようです」とのこと。また、東町三十年記念誌の『うらまち』(平成八年十一月)にも、日の出楼茶屋の元女将の手記に「娼妓は八戸出身者が多かった」と書かれているという(泉沢善

雄「賢治周辺の聞き書き 第十話 三人の先生への追悼 賢治エピソード 落穂拾い（七）」 「ワルトラワラ 27」 ワルトラワラの会 平成二十年五月）。

小原忠（後掲）は、「農学校の隣の郡役所に行きこのことを知ったとし、宮沢賢治研究会（後掲）も役所での小事件であると解している。たしかに「公署」の字はあるが、栗原敦（後掲）も書くように、下書稿（一）の手入れではタイトルが「僚友」に改められていることから、花巻農学校のできごとに取材しているのだろう（もちろん虚構が混じっている可能性はある）。

農学校説を主張する理由としては、関連すると思われるメモが「文語詩篇」ノート」の大正十二年のページに書かれており、この頃、農学校は既に移転して郡役所とは距離も離れていたため、それほど頻繁には郡役所の情報が聞こえては来なかったであろうことが、まずあげられる。

また、「白木のひのき」という言葉は、「一百篇」の「鐘うてば白木のひのき」等にも出てきており、ヒノキ造りのだった移転・新築後の花巻農学校を指すと思われること。

さらに「高書記」とあるのは、宮沢賢治研究会（後掲）も書くとおりに、高木や高橋を指すのだと思われるが、『新校本全集』を見ると、花巻農学校の「書記」として、果して高橋某の名があり、この人物は大正十二年二月に就任して昭和二年に離任とあることから、農学校が大正十二年三月に移転したとと时期的にもピッタリと重なっているからである。

ちなみにこの高橋某は、他の作品には登場していないようで、年譜にも数回は名前が出てくるものの、特色ある人物としては登場していない。ただ、佐藤隆房（「運動」 『宮沢賢治 素顔のわが友』 桜地人館 平成八年三月）によれば、「花巻農学校に奉職していた時、某という書記がいました。その書記は何かしら賢治さんの心によくうつりません」とあり、或る日、賢治は生徒が帰ってしまった後、彼に向かって、「おれあお前に負けないから、やるべ、

さ、やるべ」と、剣道の試合を申し込んで一撃を喰らわせようとしたところが、逆にダンガダンガと打ち込まれたと書かれており、これが高橋であった可能性は高いと思う。もちろん別の人物を想定していた可能性もあるし、完全な虚構であった可能性もあろう。しかし、もしもこの文語詩のような事件が背景にあったのなら、平和主義者の賢治が高橋書記に戦いを挑んだのも納得できるように思う。

賢治が「歌ひめ」に対して、ことに文語詩では一貫して同情的であることは、何度も繰り返し返して確認してきたところだが、本作における「をみなご」にも、もちろんそれはあてはまる。郡役所と偽って学校（下書稿（一）においては「公署」）に電話をかけてきたことは、非常識だと言えば非常識かもしれないが、なんら咎められてはいない。彼女には何の落ち度もなく、ただ家が貧しく、家に迷惑をかけずに、少しでも生活が楽になるようにと思つて苦界に身を沈めただけだからだ。対して、高書記の父母も、まじめな農民で、その真面目さの故に息子は遊郭の客になれるくらいに経済力を持つようになったわけだが、この息子は、はじめのうちは言葉巧みに「をみな」に近づきながら、今となっては「あらたなるをみな漁」という状態である。「あきらけき道」がどちらにあるかは明白だろう。

ところで、「五十篇」と「二百篇」には「対」をなす作品群があることを指摘してきたが、本作でもその傾向が指摘できる。「対」の相手となるのは、「五十篇」の「氷雨虹すれば」である。

①氷雨虹すれば、 時針盤たゞに明るく、
病の今朝やまされる、 青き套門を入るなし。

②二限わがなさん、 公 五時を補ひてんや、
火をあらぬひのきづくりは、 神祝にどよもすべけれ。

農学校を舞台にしたという点、「ひのきづくり」が登場する点くらいにしか同一性は見いだせないように見えるが、本作の下書稿(一)の最終形態と並べてみれば、類似性ははっきりしてくるだろう。

① 高書記よ

電話呼へり

和賀郡の郡役所より

② 和賀郡の灯ある家より

(うみべよりうられしそのこ)

あやしくもなまめける声

連綿とひとをもとめぬ

③ 夕陽いま落ちなんととして

ちぢれ雲四方にかゞよひ

雪の面に低く霧して

桑の群影をこそひけ

④ 高書記よ簿はわがなさん

なれは去れ五時に間もなき

「氷雨虹すれば」は、花巻農学校の同僚であった奥寺五郎と
思しき人物が病気のために学校を休み、賢治は白藤慈秀に対して
「二限わがなさん、公 五時を補ひてんや」と持ちかけている
作品であるが、最終行で同じようなフレーズが使われている。も
ちろん「燈を紅き町の家より」における「五時」は、十七時と
いう時間であるのに対して、「氷雨虹すれば」は五時間目という
意味の「五時」であるが、同僚に対して「わがなさん」と提案し
ている点なども含めて、偶然の一致にしてはできすぎている。
そもそも、どちらの下書稿にも「僚友」のタイトルが付けられ

ており、視点人物が呼びかけている相手が、「高書記」にしても白藤慈秀にしても、どちらも賢治が敵視していた人物であったことも共通しており、ここまでくると、もはや偶然とは言えない。

ただ、わからないのは、このような対を作ること、どういう狙いがあったのか、である。なにやら呪術的な効果、あるいはサブリミナル効果のようなものを考えていたのかもしれない。

それにしても、下書稿(一)で、賢治は「高書記よ なれもしつひに／紅燈の とりこなりせば／いざ行きてかのひとを訪へ」と書いているのは興味深い。遊郭の存在さえ否定したい賢治のはずだが、ここでは遊郭に行つて金を落とすとしてこいと書いているからである。遊郭の存在を否定するなら、今後一切、客として足を運ばないようにさせたいはずなのだが、ここでは理想を説くよりも現実路線を取っている。かといって、遊郭の存在を正当化しているようにとられてしまうわけにもいかず、そのあたりの葛藤が、定稿における「銅版の紙片をおもふ」という含蓄に富んだ語、悪く言えば曖昧な表現にとどめたのかもしれない。

先行研究

小原忠「作品研究「イーハトーボ農学校の春」と「山地の稜」

(「賢治研究16」 宮沢賢治研究会 昭和四十九年六月)

青山和憲「文語詩に関する独善的妄言」(「宮沢賢治9」 洋々社

平成元年十一月)

栗原敦「うられしおみなごのうた」(『宮沢賢治 透明な軌道の上か

ら』 新宿書房 平成四年八月)

佐藤通雅「文語詩稿へ」(『宮沢賢治 東北砕石工場技師論』 洋々

社 平成十二年二月)

宮沢賢治研究会「読書会リポート」(「賢治研究88」 宮沢賢治研究

会 平成十四年八月)

(連載・完)